

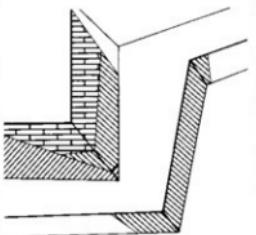
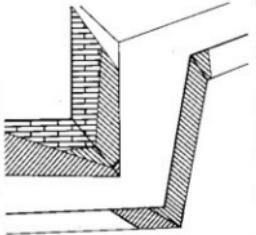
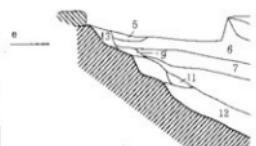
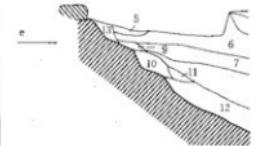


史跡鳥取城跡附太閤ケ平 天球丸保存整備事業報告書

平成9年3月

鳥取市教育委員会

正誤表

頁行	誤	正	備考
挿図目次第3図	因幡国鳥取絵図	因幡國鳥取城絵図	挿入
1頁10行	か ^て 袋川	かつ ^て 袋川	
2頁33行	秀吉の部将宮部	秀吉の武将宮部	
10頁第2表 3年	石垣石積 72m ²	石垣石積 128m ²	
10頁第2表 8年	国庫補助18,000	国庫補助18,100	
11頁第5図			
22頁39行	久保讓二郎	久保讓二朗	
27頁18行	これらをを合成して	これらを合成して	削除
36頁21行	掘建柱建物	掘立柱建物	
43・44頁第25図			(土層番号10挿入)
53頁12行	底部を外面を	底部外面を	削除
62頁30行	白磁(石段第36図)	白磁(第36図)	削除
63頁18行	「鳥取城破損修復図」	「鳥取城破損御修復図」	挿入
63頁31行	したものと推察される	したものと推察される	挿入
63頁41行	久保讓二郎	久保讓二朗	

はじめに

鳥取市は、鳥取県の県都として、また山陰地方有数の中核都市として発展してきた人口14万余を擁する城下町です。この鳥取市の扇の要に位置するのが久松山鳥取城です。築城以来、城下町として発展してきた鳥取市のシンボルであり、鳥取市民の心のより所として親しまれています。現在の鳥取城跡は、観光客や市民の散策の場所として、春の桜、秋の紅葉、夏の蟬時雨、冬の雪化粧と四季折々の姿を見せてくれています。

鳥取城は、中世末期の16世紀中頃に築城され、近世には因幡、伯耆二国を治める鳥取藩池田家の居城として明治維新まで存続しました。しかし、明治維新後城郭建物をことごとく解体撤去され、放置されたままとなっていました。その後、昭和18年の鳥取大地震によって三階櫓石垣をはじめ各所の石垣が崩壊するなど大きな被害を受け、著しく荒廃していました。戦後、市民の鳥取城跡保存に対する熱意と関係機関のご尽力によって、昭和32年には国の史跡に指定されました。鳥取城に残る中世山城型式と近世平城型式の機能を併せ持つ遺構が学術的・歴史的に高く評価されたものと思っております。

昭和34年には、文化庁の指導をいただき三階櫓石垣の復元修理に着手し、その後走り櫓、菱櫓等の石垣復元修理、米蔵跡等の環境整備を実施してまいりました。

平成元年度からは、はらみ出しにより崩壊の危険性が生じていた天球丸石垣の保存修理事業に着手し、国・県の補助を得てこのほど8ヶ年間におよぶ工事を終了することができました。

今回、一つの区切りとして、この天球丸石垣修理工事の経過及び概要、並びに発掘調査の結果をとりまとめ報告書として刊行することとした次第であります。つたない報告書ではありますが、市民並びに関係者各位の利用に供していただければ幸いです。

この天球丸石垣の保存修理事業の実施にあたっては、文化庁記念物課、鳥取県教育委員会のご指導を賜り、修理工事の推進については鳥取市建設部にご尽力をいただきました。関係の皆様方に心からお礼申し上げます。

最後ではありますが、史跡鳥取城跡附太閤ヶ平の今後の保存事業について、関係各位の一層のご協力と市民の皆様方の深いご理解をお願いいたします。

平成 9 年 3 月

鳥取市教育委員会
教育長 田中哲夫

例　　言

1. 本書は、史跡鳥取城跡附太閤ケ平保存修理事業として平成元年（1989）度から平成8年度まで実施した「天球丸石垣保存修理」の報告書である。
2. 本報告書の編集は、各工事を監督した鳥取市建設部、発掘調査を担当した鳥取市埋蔵文化財調査センターの協力を得て教育委員会文化課が担当した。
3. 本書に用いた方位は磁北を示し、レベルは海拔標高である。
4. 発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は、鳥取市教育委員会で保管している。

目 次

はじめに

例 言

第1章 石垣保存修理

第1節 位置と地形	1
第2節 鳥取城の沿革	
1. 鳥取城の成立	2
2. 秀吉の鳥取城攻略	2
3. 近世の鳥取城	2
4. 鳥取城の城郭構成	3
5. 明治維新後の鳥取城跡と史跡指定	4
第3節 天球丸保存修理経過	
1. 工事に至る経過	7
(1) 既往の復元修理	7
(2) 天球丸石垣保存修理	8
(3) 保存修理事業の体制	9
2. 保存修理事業の経過と実績	10
第4節 修理前の天球丸石垣	
(1) 文献等に見る天球丸	12
(2) 修理前の石垣	12
(3) 石垣石材の産地	14
第5節 保存修理工事の方法	16
(1) 事前調査	16
(2) 天球丸石垣各部の復元数値	16
(3) 石垣IV・Vの復元修理	16
(4) 保存石垣	16
(5) 石垣復元修理工事の確認事項	16
(6) 石垣解体工事	16
(7) 石積工事	17
(8) 整地工事及び擬木構	17

第2章 発掘調査

第1節 調査の経過

1. 調査の経過と方法	21
2. 調査の体制	22

第2節 調査の結果

1. 調査区の層序	27
2. 石垣の調査	27
3. 上層検出遺構	30

4. 下層検出遺構	36
5. 出土遺物	48
第3節　まとめ	61
写真図版	

挿図目次

第1図 史跡鳥取城跡附太閣ヶ平位置図	1	第23図 S B05実測図	42
第2図 史跡鳥取城跡附太閣ヶ平指定範囲図	5	第24図 S B06実測図	42
第3図 因幡國鳥取絵図（文化4年） 『鳥取県立博物館所蔵』	6	第25図 石段遺構・石垣01実測図	43・44
第4図 天球丸石垣概念図	8	第26図 S K48実測図	46
第5図 天球丸石垣保存修理工事年度別 石積個所	11	第27図 S K50実測図	47
第6図 石積工事標準寸法図	17	第28図 S D27実測図	48
第7図 天球丸実測図	23・24	第29図 S K04・S K16出土遺物	49
第8図 第一次調査区断面図	25・26	第30図 S K14出土遺物	50
第9図 第二次調査区断面図	25・26	第31図 S B02出土遺物	50
第10図 第三次調査区断面図	25・26	第32図 S K16・S K33出土遺物	50
第11図 第1トレンチ断面図	28	第33図 S B03出土遺物	51
第12図 第2トレンチ断面図	28	第34図 石垣01出土遺物(1)	52
第13図 第3トレンチ断面図	29	第35図 石垣01出土遺物(2)	52
第14図 石垣II断面図	29	第36図 石段遺構出土遺物	52
第15図 石垣IV(下半)断面図	29	第37図 S K07出土遺物	53
第16図 上層検出遺構配置図	31・32	第38図 S K06・S K07・S K08・S K10 出土遺物	54
第17図 S B02実測図	33・34	第39図 瓦溜り出土遺物	54
第18図 S K16実測図	35	第40図 遺構外出土遺物(1)	55
第19図 S K17実測図	35	第41図 遺構外出土遺物(2)	56
第20図 下層検出遺構配置図	37・38	第42図 遺構外出土遺物(3)	57
第21図 S B03実測図	39・40	第43図 S B03・瓦溜り・遺構外出土瓦	58
第22図 S B04実測図	41	第44図 鳥取城破損御修覆図(天和3年) 『鳥取県立博物館所蔵』	63

表目次

第1表 既往の史跡整備概要	7	第3表 土坑一覧表	59
第2表 年度別保存修理事業実績	10	第4表 溝一覧表	60

付図目次

付図1 石垣I・II・III測量図		付図3 石垣IV・VI測量図	
付図2 石垣V・VI測量図			

図版目次

図版1 天球丸石垣I修復後(南西から)		天球丸石垣I根石(南東隅)	
天球丸石垣III修復後(西から)		天球丸石垣II(北西から)	
図版2 天球丸石垣I(南西から)		天球丸石垣II根石(北東隅)	

図版 4	天球丸石垣Ⅱ根石（南西角） 天球丸石垣Ⅲ（西から）	図版18	石段検出状況（北西から） 石段検出状況（南東から）
図版 5	天球丸石垣Ⅲ根石（第2トレンチ部） 天球丸石垣Ⅲ根石（第3トレンチ部）	図版19	石段北壁石垣（南西から） 石垣02裏込検出状況（南西から）
図版 6	天球丸石垣V・VI（西から） 天球丸石垣V・VI（西から）	図版20	S K08検出状況（南東から） S K16検出状況（北東から）
図版 7	天球丸石垣Ⅲ裏込状況（北西から） 天球丸石垣Ⅲ裏込状況（北西から）	図版21	S K17検出状況（南東から） S K39検出状況（北東から）
図版 8	第二次調査区調査前（北東から） 第三次調査区調査前（北から）	図版22	S K42検出状況（北西から） S K42断面
図版 9	第一次調査区遺構検出状況（北東から） 第二次調査区上層遺構検出状況 (北東から)	図版23	S K43検出状況（北西から） S K43断面
図版10	第二次調査区上層遺構検出状況 (南東から) 第二次調査区下層遺構検出状況 (北東から)	図版24	S K44検出状況（南西から） S K48検出状況（北東から） S K50検出状況（北西から） S D27検出状況（北西から）
図版11	第二次調査区下層遺構検出状況 (北西から) 第三次調査区遺構検出状況（北西から）	図版25	瓦溜り検出状況（南西から） 瓦溜り検出状況（北東から） S K04出土遺物
図版12	S B01検出状況（南東から） S B02検出状況（南西から）	図版26	S K16出土遺物 石段出土遺物
図版13	S B02検出状況（北西から） S B02検出状況（北東から）	図版27	石垣01出土遺物
図版14	S B03検出状況（北西から） S B03検出状況（北東から）	図版28	S K06出土遺物 S K07出土遺物
図版15	S B03検出状況（南西から） S B03埋土状況（南西から）	図版29	S K10出土遺物 瓦溜り出土遺物
図版16	石垣01検出状況（北から） 石垣01取付部（北西から）	図版30	遺構外出土遺物 S B03出土鉄釘
図版17	石垣01検出状況（北西から） 石段検出状況（南西から）		図版29 S B03・瓦溜り・遺構外出土瓦
			図版30 S B03・瓦溜り・遺構外出土瓦

第1章 石垣保存修理

第1節 位置と地形

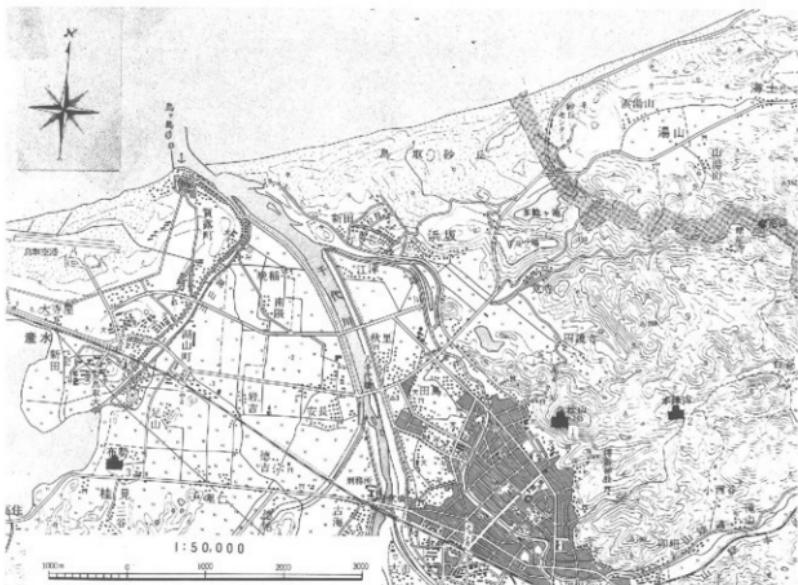
鳥取市は鳥取県の東部に位置し、鳥取平野の沖積地に拓かれた人口14万人余りの都市である。江戸時代には因幡、伯耆の二国を治めた鳥取藩32万石の城下町であり、現在は、鳥取県の県庁所在地として、政治、経済、文化の中心となっている。

鳥取市の立地する鳥取平野は、中国山地に水源を持つ千代川及びその支流によって形成された沖積平野で、平野の東側は主として千代川本流及び支流の袋川によって形成されたものである。鳥取城は、この鳥取平野の東北側に位置する標高263mの久松山に築城されている。久松山の山頂（天守）からは、鳥取平野の大半を見渡すことができるだけでなく、日本海や砂丘、遠く大山までも望むことができる。

久松山の前面は、かって袋川が蛇行して流れ、低湿地を形成していたといわれる。鳥取の城下町は、この袋川を外堀として利用しながら整備されてきたものである。このため、江戸時代には千代川の氾濫による洪水にたびたび襲われている。

久松山から北西には、雁金山へと尾根が続き、東は羽柴秀吉の鳥取城攻めの際に本陣を置いた本陣山（太閤ヶ平）へと続いている。久松山の背後は円蔵寺谷に向けて急角度の斜面となって落ち込んでいる。

鳥取城から日本海に面した賀露の港までは袋川、千代川と下って約10キロメートルである。



第1図 史跡鳥取城跡附太閤ヶ平位置図 (1. 鳥取城跡 2. 太閤ヶ平 3. 天神山城)

第2節 鳥取城の沿革

1. 鳥取城の成立

鳥取城の築城については、従来、『因幡民談記』の記述から天文14（1545）年布施天神山城の出城として山名誠通によって築かれたとされてきた。しかし、近年の研究では、当時布施天神山城と対立する但馬山名氏によって天文12（1543）年には久松山になんらかの戦略拠点が設けられていたとし、これが後の鳥取城の起源となるものであるという説が出されている。いずれにしても、鳥取平野の東北に位置する久松山に城が築かれたのは、16世紀中頃（天文年間）ということになる。今後、築城時期、築城主について更に研究が進むことを期待したい。

築城当時の因幡の政治状況をみると、因幡の守護は、鳥取平野の西方に位置する湖山池東岸の布施天神山城を本拠とする山名氏であった。この因幡山名氏は惣領家但馬山名氏の同族である。しかし、因幡、但馬の両山名氏は、因幡における支配権力をめぐって鋭く対立していた。この対立の中には出雲月山富田城を本拠とする尼子氏の勢力拡大による因幡地方への影響力も大きく絡み合っていた。天文10（1541）年岩井表の合戦をはじめとして、以後両山名氏の対立抗争は続いたが、この争いの過程でその戦略的要衝である千代川右岸の久松山に砦としての城が築かれた。この城については「山の形駒組にして、八葉の谷尾をわけ四方ははしく切り立ちたる事、宛も工匠けり成せるに異ならず。一略一その高さ万仞にして、周りは二、三里に及び。あたりに双びの山もなく、咫尺に千里の地をしじめ一国の山川唯眼の下に明らかなり。」（『因幡民談記』）とあるように、戦略的拠点として良好な立地条件を備えた場所であった。こうして鳥取城は誕生したわけであるが、当初はあくまで布施天神山城の出城であった。ところがこの出城を守る武田高信が天神山に対して反旗をひるがえしたことによって、鳥取城をめぐる攻防戦が永禄6（1563）年からおよそ10年間続くことになる。この戦いによって鳥取城の因幡における戦略的・政治的拠点としての重要性が認識されることになった。

天正元（1573）年因幡の守護山名豊国は武田高信を鳥取城から退けて、かわって鳥取城に入り、これを因幡の本城とするにいたった。

2. 秀吉の鳥取城攻略

天正4（1576）年織田信長と中国の毛利氏が対立し羽柴秀吉による中国攻略が始まった。秀吉は播磨の三木城を降し、但馬の山名氏を平定すると、天正8（1580）年因幡に進攻してきた。これに対し鳥取城の山名豊国はあまり抵抗せずに降伏した。この豊国の降服に対し、不満を持つ国人層は、豊国を鳥取城から追放し、代わって毛利氏から吉川経家を迎えて、秀吉に対抗する道を選んだ。天正9（1581）年、秀吉は、再度因幡に入り、反織田勢力の結集する鳥取城を厳重に包囲した。鳥取城の兵糧を完全に断ち切って攻める戦法である。籠城4ヶ月、城兵は絶望的な飢餓状態のもとで防戦したが、経家の自決をもって鳥取城は陥落した。後にいう鳥取城の「渴え殺し」である。

3. 近世の鳥取城

天正9（1581）年秀吉による因幡平定によって、鳥取城には秀吉の部将宮部継潤を置き、因幡の4郡（邑美・法美・高草・八上）4万3千石を与えて支配させた。しかし、慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いで西軍に与したため鳥取城主の宮部氏は滅亡した。

宮部氏に代わって鳥取城に入ったのは池田長吉で、池田信輝の三男輝政の弟である。長吉は、城内、城下の大改修を行い、山上ノ丸の天守を三層から二層に改築し、山下ノ丸の二ノ丸、天球丸を築き、更には三ノ丸や堀の拡張整備などを行っている。ここに近世鳥取城のおおよその姿を作り上げた。

豊臣氏が大阪城で滅亡した後の元和3（1617）年には、姫路城主池田光政が因幡・伯耆両国32万石の鳥取城主として転封してきた。同時に、鳥取城主であった池田長吉の子長幸は備中松山に転封されて

いる。光政の入国によって、これまで小大名によって分割統治されていた因伯両国は一つに統治され、幕藩体制による鳥取藩が誕生した。

寛永9（1632）年岡山藩主池田光仲は当時幼少であったが、鳥取藩との交替転封の命を受けて光政と入れ替わった。以後、鳥取城に入った光仲の子孫が明治維新まで鳥取藩主としてその地位についたので、この系統を鳥取池田家といい、光仲はその祖となった。

4. 鳥取城の城郭構成

久松山に構築された鳥取城は、藩政期に描かれた数多くの鳥取城絵図によって、その城構えの様子と拡充の変化はおおよそ判断することはできる。この鳥取城の基本的姿はさきに述べたとおり、池田長吉の時代までに完成しており、これを大別すると山上ノ丸（本丸）、山下ノ丸、その他の諸郭に分けられる。

山上ノ丸 山上ノ丸は久松山の山頂を大きく切り拓き、その周囲を高石垣で囲って曲輪としたものである。一段高い本丸の西北隅に更に高く石積をして天守櫓を設けている。天守は初め三層であったとされるが、長吉のとき二層に改めたとされる。この天守櫓はその後元禄5年に消失してしまい再建されることになった。本丸には、その他車井戸、著見櫓、多聞櫓とそれをつなぐ走櫓が設けられており、これらの建物はその後幕末まで残った。山上ノ丸にはその他本丸の東側に二ノ丸、三ノ丸と呼ばれる曲輪があり、西側にも一段低い場所に高石垣で築かれた出丸が設けられている。この出丸から西の尾根を下ると、鐘ヶ平、太鼓ヶ平、松ノ丸などの曲輪の遺構が残っており、長吉の鳥取城大改築以前はこの西尾根が鳥取城の主要な城郭と考えられている。山上ノ丸はこの時期において名実ともに本丸の役割を果たしていたといえるだろう。

山下ノ丸 山下ノ丸は、近世における藩政の中心で鳥取城の中核となっていた。曲輪は、二ノ丸、三ノ丸、天球丸、その他の諸郭からなり、堀によって城下と区分されていた。これらの曲輪の主なものについて概説すると、二ノ丸は、山下ノ丸の諸郭の中心部に位置し、高石垣をめぐらし、偉容を呈している。三代藩主吉泰の時まで藩主の居館が設けられ藩政の拠点となっていた。

この南西隅には石垣を一段高くし、三層の櫓が建てられていた。山上の天守櫓が焼失して後は、この三層櫓が鳥取城を象徴する建物となった。三ノ丸は三代藩主の時、二ノ丸から南東の一段低い三ノ丸が拡充整備され、城主の居館を始めとする主要な建物が建てられ、藩政の中心が二ノ丸からこの三ノ丸に移った。

天球丸は、二ノ丸の東北の一段高い場所にあたる。これは池田長吉のときその姉の天球院の居館を建てるために築いたものといわれているが、今回の石垣修理に伴う発掘調査で長吉以前に構築された石垣が検出され、前身になる小規模な曲輪が存在したものと思われる。

その他、山下ノ丸には多くの曲輪があるが、二ノ丸、三ノ丸、天球丸以外は時代によって用途も異なり複雑に変化している。

このように山下ノ丸は、中世的な山城が近世的城郭へと変化整備された典型として特筆されるものである。なお、山上ノ丸、山下ノ丸の諸々の建物は、明治12年政府の命によってすべて解体撤去されてしまい、現在は、石垣や堀等を残すのみとなっている。

山腹の砦群 鳥取城に関する主要な城郭遺構は、古絵図、文献等の歴史資料や、史跡公園として活用されるなかでよく知られているが、その他に久松山の山腹には一般にあまり認識されていない城郭関連遺構が数多く残っている。これらのほとんどは、山上ノ丸が鳥取城の中心であった近世初期の頃までに構築されたと思われるもので、それは山腹の斜面を削り出して平坦部を形成したものである。これらの遺構の配置状況を概観すると、それは山上ノ丸を防禦するために、山頂にいたる主要な尾根を中心に構築されている。東坂道周辺、中坂道周辺、西坂道周辺及び雁金山・丸山へ尾根伝いに結ぶルートにあた

る久松山北面の尾根周辺に集中して見られる。このうち西坂道周辺部のものには、初期の鳥取城の主要部として活用されていたものがあり、古絵図にも記されている「松ノ丸」「太鼓ヶ平」「鐘ヶ平」などに符合する遺構が明確に残っている。

また東坂道中途のひょうたん池付近にも大規模でまとまりのある一群の遺構がある。ここには井戸跡、通路、土塁を伴う曲輪なども見られ、鳥取城の重要施設があったことをうかがわせるものであるが、これに関する文献資料はなく、遺構の示す性格については現在のところ不明である。

5. 明治維新後の鳥取城跡と史跡指定

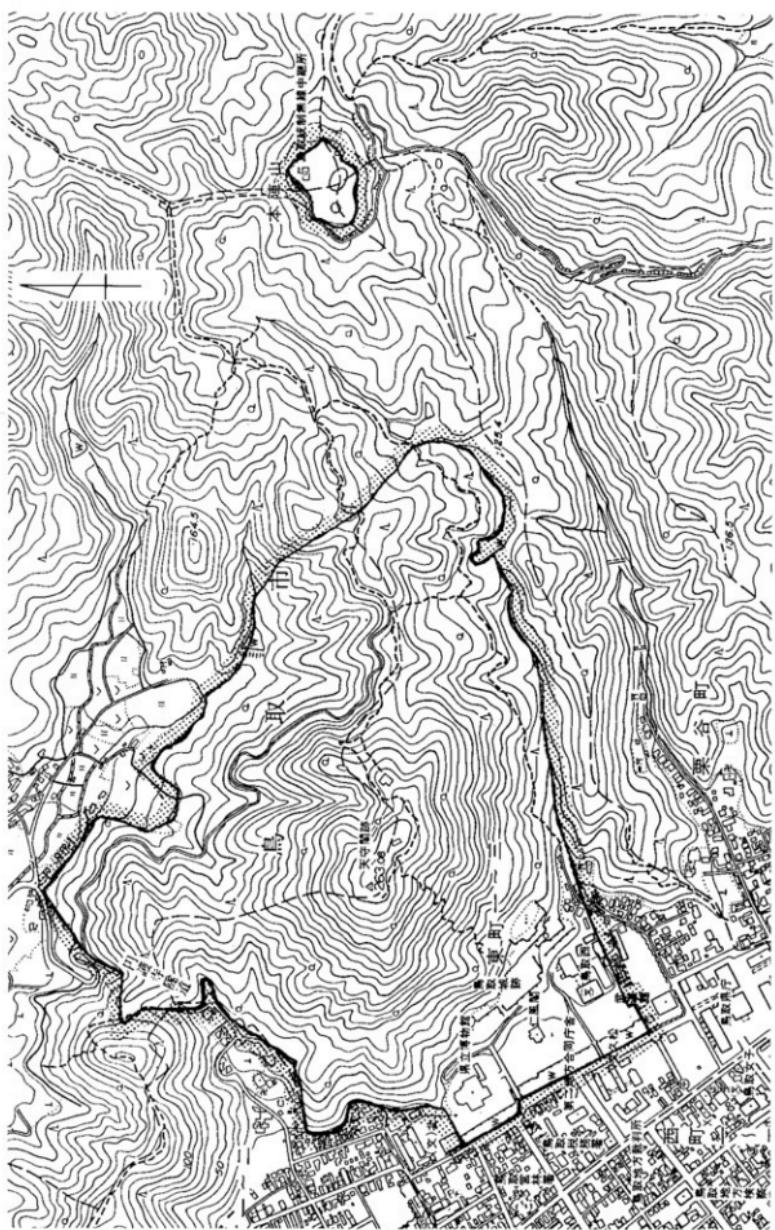
明治維新によって廢藩置県が実施されると、鳥取城は池田家から陸軍省の所管となり、明治12年には鳥取城に残るすべての建物は解体撤去され、石垣、堀等の遺構のみが残った。同22年鳥取城跡は再び池田家のものになり、以後、山下ノ丸跡の広場には公共的施設が相ついで建設されていった。その主なものを見ると、三ノ丸跡には現在の県立鳥取西高等学校の前身となる尋常中学校（明治22年）、宝隆院庭園の横には、当時の皇太子（後の明治天皇）の山陰行啓に際し、その宿泊所となった「仁風閣」（明治40年）が建ち、更に仁風閣敷地より西側の家老屋敷等の跡地には、一部埋立てして「鳥取公設運動場」（大正13年）が設けられるなど、公共の場として大いに活用された。しかし、反面広大な城跡の大部分の土地は、地形的な制約や池田家の私有地であることもあって、放置されて荒れるに任せた状態であった。さらに昭和18年に襲った鳥取大地震によって、城跡各所の石垣崩壊が生じ、無残な城跡を露呈することになった。翌19年、城跡の所有者である池田家は、その土地の全てを鳥取市へ寄付している。

戦後、鳥取城跡の保存の気運が市民の間で盛り上がっていった。こうした中で、昭和28年鳥取市の平和塔建立奉賛会は、山上ノ丸の三ノ丸跡に白亜の塔の建設を計画した。この塔の建立の目的は「塔に大藏經を埋蔵して、不運の戰死をなぐさめ、もって鳥取市の天災地変を防止する」ことであった。この計画について鳥取市教育委員会は、山上ノ丸に建設することについて次のごとく異議を唱えた。「久松山城址は数少ない山城であり、強大な防禦性と戦略的位置の重要さは全国的にも希有のものであり、このような重要史跡内に永久的構築物を設置することは、史跡としての意義を失わせるものであり、さらに、建立後の景観を予想しても好ましくない」というものであった。結果、この平和塔は久松山の西側の雁金山に建立された。

これを機に鳥取城跡の史跡指定による保存の気運が一層高まり、昭和29年4月、鳥取市教育委員会と鳥取市長は、史跡指定申請書を文化財保護委員会に提出し、さらに指定までの当分の間保護措置として鳥取県教育委員会から史跡の仮指定を受けた。

同30年、仮指定となった鳥取城跡について、文化財保護委員会の文部技官の現地調査が実施された。同32年12月18日、鳥取城跡のある東町地内と太閤ヶ平のある滝山・百合地内約668,663平方メートルが史跡として指定された。鳥取城跡が織豊時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係を持つ史跡であること、城跡の構成が前記の歴史的推移と対応し山城的型式を残す山上ノ丸と中腹の砦跡等の古い城跡遺構に対し、近世の城郭型式を残す山下ノ丸を中心とする新しい城跡遺構が新旧重層して併存すること等が学術的に高く評価されたためである。

その後、昭和62年8月10日円護寺側299,661平方メートルが追加指定され、久松山のほか金山968,324平方メートルが国の史跡に指定された。



第2図 史跡鳥取城跡附太閤ヶ平指定範囲図(1:10000)



第3図 因幡国鳥取城絵図（文化4年）「鳥取県立博物館所蔵」

第3章 天球丸保存修理経過

1. 工事に至る経過

(1) 既往の復元修理

鳥取城跡の石垣は、昭和18年の鳥取大震災によって、崩壊または石積の孕み出し等の変形を受け荒廃したまま放置されていたが、昭和32年に国の史跡に指定されたことにより、同34年から復元修理事業が始められた。石垣復元事業は、まず大地震で崩壊した三階櫓石垣の修復工事から始め、その後年次計画のもとに事業を進めていった。三階櫓石垣修復の後、文化庁の指導をうけ城跡公園整備計画をたて城跡整備を実施することになった。この計画に基づき、昭和42年から山上ノ丸、山下ノ丸にわたって整地、石段補修、標識の設置など史跡としての環境整備を行なった。このような城跡整備が進められるなかで、鳥取市は、昭和47年に鳥取久松山整備審議会を設置し、審議会の答申のもとに事業を推進することとした。昭和47年度から、内濠浚渫、米蔵跡整備、大菱櫓石垣、走櫓石垣、菱櫓石垣、宝蔵跡石垣、二ノ丸三階櫓下石垣の復元修理、そして史跡平面図作成等を実施してきた。

この他、災害復旧事業として、鳥取西高校記念館裏石垣（昭和41）、山上ノ丸石積・天球丸土石運搬（昭和47）、家老屋敷付近石垣石積（昭和51）、武器庫跡石積（昭和56）を実施している。

第1表 既往の史跡整備概要

実施年度	事業名	事業内容	備考
1 昭34~40	三階櫓石垣復元	石積面積 540m ²	
2 昭42~46	山下ノ丸整備	石段、柵、側溝、標識板	
3 昭44・45	山上ノ丸整備	石段、柵、側溝、標識板	
4 昭46・47	宝隆院庭園復元	造園、整地	
5 昭46	坂口御門石垣復元	石積面積 23.8m ²	
6 昭47~49	内濠浚渫	浚渫面積 13,533.3m ²	
7 昭47~49	内濠周辺石垣復元	石積面積 151.1m ²	
8 昭50~52	米蔵跡整地	民家・石碑移転、整地修景	
9 昭53	大菱櫓石垣復元	石積面積163.8m ²	
10 昭54	渡御門石垣復元・石段復元	石積面積59.3m ² 石段226m	
11 昭54~57	走櫓・武者走り櫓石垣復元	石積面積562.1m ²	
12 昭58~61	菱櫓石垣復元	石積面積462.3m ²	
13 昭62	史跡平面図作成	図化面積30,000m ²	
14 昭63	二ノ丸三階櫓下石垣	石積面積66m ²	

(2) 天球丸石垣保存修理

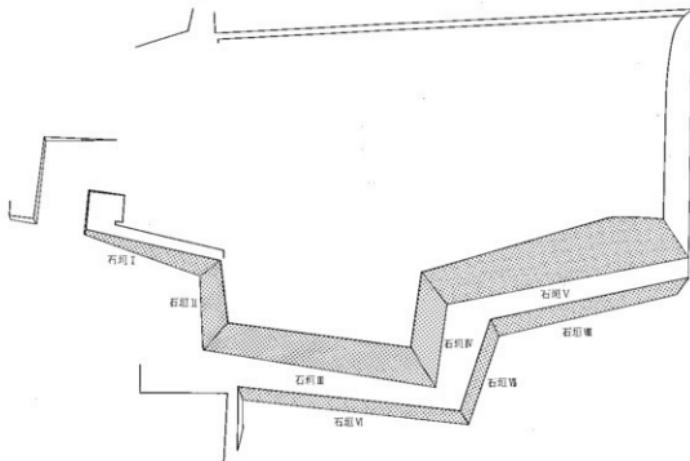
昭和34年度から進めてきた鳥取城跡整備は、主として鳥取大地震によって崩壊してしまった石垣の復元修理、そして、史跡としてふさわしい環境整備を行なうことを主眼に実施してきた。

石垣の修理は、地震で崩壊してしまった鳥取城の主たる曲輪である二ノ丸の三階櫓石垣、走櫓石垣、菱櫓石垣等を優先して実施した。昭和61年には、これらの大規模な石垣修理が終了したため、長年懸案となっていた天球丸石垣の修理を計画した。

天球丸の石垣は、野面石、粗削石を用い穴太（あのう）積みで積まれた石垣である。現在鳥取城の山下ノ丸に残っている石垣のなかで最も古い様相を持っている。しかし、それだけ長い年月に耐えてきた石垣であるため、石垣の中腹で外へ石垣が押し出される「孕み」が顕著、部分的には二段に渡って孕みが認められた。また、角石も外へ押し出され、間詰め石も抜け落ち大きな空隙ができ、微妙なバランスによって辛うじて持ちこたえているような状況であった。このような天球丸石垣の激しい孕みと弛みは、いつ崩壊してもおかしくない危険な状況であった。

このため、天球丸石垣の根本的な修復について文化庁記念物課のご指導を仰ぎ、天球丸石垣修理事業に着手することとなった。

修理は、事前に現存する石垣の写真測量図を作成し平面的な発掘調査を実施すること、修理範囲は崩壊している部分及び孕みが激しく崩壊の危険性がたかい部分に限ることなどの指導を得た。鳥取市では、この指導に基づいて、まず平成元年度から石垣写真測量を奈良国立文化財研究所の伊東太作先生の指導で実施することにし、石垣の解体・積上げは平成2年度に発掘調査を実施した後に着手することになった。石垣の修理範囲は文化庁の指導に基づいて北西側の石垣I、II、III、IVとV、VI、VIIの一部とした。およそ石垣の面積は1,000m²であった。



第4図 天球丸石垣概念図

(3) 保存修理事業の体制

天球丸石垣保存修理事業の体制・組織は下記のとおりである。

事業主体 烏取市 市長 西尾道富

指導機関 文化庁記念物課 安原啓示、田中哲雄、加藤充彦、服部英雄
奈良国立文化財研究所 伊東太作
鳥取県教育委員会 田中精夫、小椋博幸、中林範明、松田潔、中原齊、池原和彦

指導者 北垣聰一郎、五味盛重、山根幸恵、山名巖、坂本敬司（順不同）

工事担当	鳥取市建設部	部長	斎藤 博（平成元～3年度） 前田八壽彥（平成4～6年度） 東健一郎（平成7～8年度）
		開発課長	木下佑三郎（平成元～2年度） 福長 正弘（平成3～6年度）
		課長補佐兼係長	福長 正弘（平成元～2年度）
		係長	浜本 幸彦（平成3～4年度） 松本 憲夫（平成5～6年度）
		技師	徳田 則（平成元～6年度）
		道路管理課長	福長 正弘（平成7～8年度）
		課長補佐兼係長	大石 正幸（平成7～8年度）
		技師	井本 哲文（平成7年度）
		技師	大和谷雅人（平成8年度）
事務局	鳥取市教育委員会	教育長	田中 哲夫（平成元～8年度）
		次長兼社会教育課長	繩田 捷彦（平成元～2年度）
		社会教育課長	小谷莊太郎（平成3～4年度） 小杉 宗雄（平成5～7年度） 岩成 潔一（平成8年度）
		文化課係長	小杉 宗雄（平成元～4年度） 平川 誠（平成5～8年度）
		主任	平川 誠（平成元～4年度） 石井 克明（平成5～8年度）
修理工事	上月工業有限会社	代表取締役	上月 騰
		主任技術者	上月 保道
写真測量	朝日航洋(株)	岡山営業所長	西尾 東
		主任技術者	長谷 望

2. 保存修理事業の経過と実績

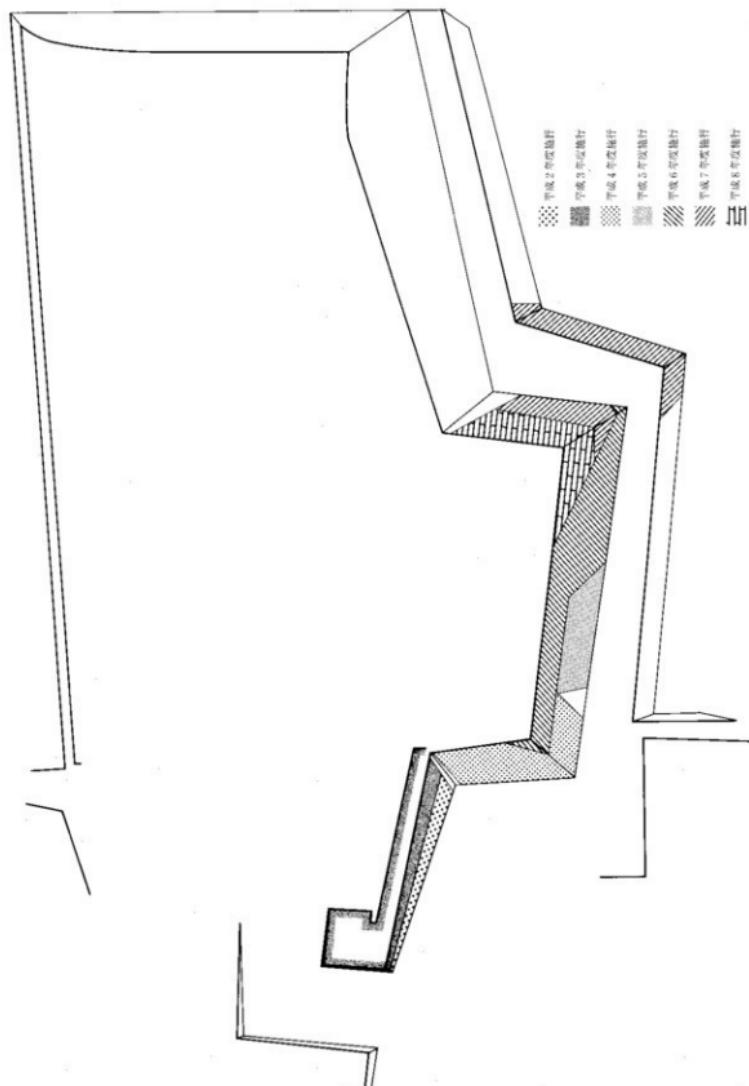
平成元年5月20日に文化財関係国庫補助事業の内定通知を受け鳥取市を事業主体として平成元年5月1日に天球丸石垣保存修理事業に着手した。

平成8年度までの8年間に総面積989m²の石垣修理事業を実施した。また、この石垣修理事業に伴って総面積1,395m²の発掘調査、1,813m²の写真測量調査を実施している。

第2表 年度別保存修理事業実績

年 度	石垣修理	発掘調査	写真測量	事業費(千円)	備考
平成元年			測量図化 1,339m ²	国庫補助 7,956 県費補助 2,652 市 費 5,306 合 計 15,914	経費には宝蔵跡石垣復元44m ² を含む。
2 年	石垣解体 166m ² 石垣石積 72m ²	発掘調査 320m ²	測量図化 300m ²	国庫補助 8,500 県費補助 2,833 市 費 5,667 合 計 17,000	
3 年	石垣解体 179m ² 石垣石積 128m ²	発掘調査 530m ² (発掘調査概要報告書作成)		国庫補助 12,000 県費補助 4,000 市 費 8,000 合 計 24,000	
4 年	石垣解体 175m ² 石垣石積 129m ²			国庫補助 12,000 県費補助 4,000 市 費 8,001 合 計 24,001	
5 年	石垣解体 262m ² 石垣石積 76m ²		測量図化 130m ²	国庫補助 14,000 県費補助 4,666 市 費 9,334 合 計 28,000	
6 年	石垣解体 70m ² 石垣石積 214m ²		測量図化 44m ²	国庫補助 17,500 県費補助 5,833 市 費 11,668 合 計 35,001	
7 年	石垣解体 39m ² 石垣石積 206m ²	発掘調査 545m ²		国庫補助 17,500 県費補助 5,833 市 費 11,669 合 計 35,002	
8 年	石垣石積 164m ²	報告書作成		国庫補助 18,000 県費補助 6,033 市 費 12,067 合 計 36,200	
合 計	石垣解体 891m ² 石垣石積 989m ²	発掘調査 1,395m ²	測量図化 1,813m ²	国庫補助 107,556 県費補助 35,850 市 費 71,712 合 計 215,118	

第5図 天球丸石垣保存修理工事年度別石積個所



第4節 修理前の天球丸石垣

(1) 文献等に見る天球丸

天球丸は、二ノ丸の東北方に位置し、山下ノ丸にあって一番高い位置に造られた曲輪である。天球丸は、文献にあまり記されることなく、不明の部分の多い曲輪である。天球丸の名称は、文政12（1829）年に成立した岡島正義の『鳥府志』によれば、慶長五年（1600）の閑ヶ原の戦いの後、鳥取城の城主になった池田長吉の姉、天球院に由来するという。若桜鬼ヶ城主山崎家盛の夫人であった天球院が、山崎家を去って長吉のもとに寄寓し、この曲輪に造られた居館に住んだことから名付けられたという。絵図は比較的残っており、享保年間までは天球丸に風呂屋御門と呼ばれる門、東側隅に建てられた細長い三層の櫓などがあったことが知られている。三層櫓は享保五（1720）年の大火（石黒火事）によって焼失し、その後は再建されることはなかったようである。なお、この三層の櫓が天球院の館であったかは定かではない。下って幕末頃には、武術の稽古所、御蔵が建てられたことが絵図に残されている。



絵図のなかには、鳥取城石垣の修理を幕府に願いでた時の写しが何枚か残っており、このなかに文化4（1807）年天球丸石垣の崩壊、孕みについて記されているものもある。しかし、総じて絵図に描かれている天球丸石垣は、パターン化されており、腰石垣などは描かれていない。



今後、文献等と突き合わせながら詳細に検討する必要がある。

(2) 修理前の石垣

天球丸の石垣は、比較的こぶりの野面石、粗割石を用い穴太（あのう）積みで積まれた石垣である。現在鳥取城の山下ノ丸に残っている石垣のなかで最も古い様相を持っている。ここでは各石垣の修理前の状況を記述する。



石垣Ⅰ 石垣面に何ヶ所か大きな石を配した石垣である。野面石、粗割石を使用する。天球丸に登る階段に沿って構築されているため徐々に高さを減ずるが、東側の入隅部で7.1mを測る。地山に乗った根石は、特に大きくななく上部の石垣面と同様である。修理前は石垣面の石材が脱落している部分が認められ、控えの少ない石材は前面に大きく傾いていた。また、天端は、当初の天端石の上に小さな石材を置き天端石としており、石垣の沈下に対する後の補修の跡が明らかである。



石垣Ⅱ 天球丸の凸形に出た部分の西側の石垣である。他の面に比べると比較的残存状況はよい。向かって右側部分は比較的大振りの石材で構築しており、左手入隅部及び上部は

こぶりの石材である。入隅下端から右上方へ目地が通っているように見える部分があるが、ただちに石積みの時間差を示すものとは断定できないが、隅角部の傾斜の変化を含めて今後検討する必要があろう。隅角部は、曲輪造成前の自然地形の谷部にあたるため、かなり深い位置に大振りの根石をおいている。



石垣Ⅲ 天球丸の凸部前面の高石垣である。高さ10.3mを測る。こぶりの野面石、粗削石を使用した穴太（あのう）積みである。石垣中位と下段の二箇所が帯状に孕み出している。また、東南の隅角は前方に押し出され、今にも崩れそうな状態である。根石は南西部の隅角部を除いてほぼ地山上に乗っている。石材は上部の石材と変わらない。



石垣Ⅳ この石垣は、上部4.5m以下を土砂で覆われていた。上部の露出した石垣は、野面石、粗削石を使用したもので他の石垣との顕著な差異は認められない。下部の土砂を撤去したところ背後から野面石、粗削石を使用した石垣が現れた。この石垣は石材の割れも多く石積も弛んでおり、そのまま保存できる状態ではなかった。

文化4（1807）年12月に鳥取城石垣の修理を幕府に願いいた時の絵図（因幡國鳥取城絵図）の写しがあり、この石垣Ⅳの崩壊、孕み出しについての記載がある。

「此所石垣高サモト六尺余横六間余崩申候」

右崩口ヨリ民ノ方ニ六間坤ノ方江五尺横合六間

五尺高サ貳丈モト足孕出申候」

とあり、原因についての記載はないが、高さ約5m幅11mにわたって崩壊し、幅12.5m高さ3.3m孕み出したことがわかる。願い出た結果どのような修理がなされたのかは不明だが、修理前の石垣に見るような、土砂で覆い崩壊を止める処置がなされ、上部については新たな石積を行なったものと推定できる。



石垣Ⅴ 天球丸の凸部から南東方向に延びる高さ約9.4mの高石垣である。部分的に孕み出しが見られることから当初は凸部との入隅部分を修復する計画であったが、今回は見送ることになった。こぶりの野面石、粗削石を使用した穴太積みである。正面からやや東南方向でわずかに屈曲する部分が認められる。



石垣Ⅵ 石垣Ⅲの下方に位置する腰石垣である。石材の弛み、孕みが部分的に認められる。角部は崩壊している。

石垣Ⅶ 石垣Ⅳの下方に位置する腰石垣である。現状は、こぶりの削石を使用した亀甲積様の石垣を湾曲させて積み上げている。この石垣を外したところ、当初の腰石垣の根石が残存しており角石から石垣Ⅴの腰石垣との入隅まで直線で並

ぶ。また、この石垣は、解体修理の過程で石垣Ⅲの方向に延び行くことが確認され、石垣Ⅲ、Ⅳの時間的な前後関係が判明した。地山を掘削しすぐに腰石垣を構築しており、裏込めは入らない。

(3) 石垣石材の产地

鳥取城が構築されている久松山は、白亜紀後期に属する久松花崗岩によって造られた丘陵である。天球丸の石垣に使用されている石材の大部分も花崗岩であり、久松山から産出する花崗岩を主として利用したものと考えられる。しかし、千代川流域にも花崗岩を産出する地域は多くあり、河原にも花崗岩の転石がみられる。ごくわずかだが天球丸の石垣には、中生代火山岩類である流紋岩の石材が用いられている。この花崗岩に比べて暗い色をした流紋岩の産出地は、久松山系と鴨溪を挟んで対峙する源太夫山が考えられている。





第5節 保存修理工事の方法

ここでは、天球丸石垣の復元修理工事にあたって文化庁及び関係機関等の指導を受けた諸点並びに復元修理工事の方法等について記述し記録に残しておきたい。

(1) 事前調査

石垣写真測量 修理工事によって解体復元される石垣の現状を記録するために石垣の地上写真測量を実施し、立面図を記録として残した。縮尺は1/20とし、石垣解体時の参考及び記録としても利用できるものとした。また、発掘調査及び石垣修理の過程で検出した比較的大きい石垣についても写真測量を実施している。

発掘調査 石垣修理工事によって掘削がおよぶ範囲については、いわゆる記録保存を前提とした発掘調査方法をとり、下層の遺構まで発掘調査を行った。その他必要に応じて行なった発掘調査については遺構の確認にとどめ、実測、写真等の記録作成後は土のう袋等で遺構を保護し埋め戻しを行なった。

また、石積みの状況を記録するため、石垣解体工事とともに、断面部分を2箇所設定し石材の取上げごとに塊盤石を含めて実測図、写真的記録を作成した。

(2) 天球丸石垣各部の復元数値

天球丸石垣各天端部の長さについては、石垣の孕み、緩みによって石垣が相当変形しており、現状の数値をそのまま復元数値とすることは困難であった。このため、鳥取城絵図面のうち鳥取御城全図等の絵図面に記された数値を参考に石垣復元のための石垣寸法を設定した。

石垣勾配については、石垣下部の保存状態のよい部分及び根石部分の勾配を測定し、当初の勾配を推定して完成時の勾配を設定した。5分から5分5厘の勾配である。

(3) 石垣IV、VIIの復元修理工事

石垣IV、VIIは、すでに述べたように藩政期に一部崩壊し残った石垣も孕み出したことが記録にみえ、その後そう遅れずに土砂や土留石垣を設置することによって崩壊を防いでいたものと考えられた。このためこの石垣IV、VIIの復元について文化庁等に指導を仰ぎ、土砂及び土留石垣を撤去した状態、すなわち本来の石垣が露出下状態で復元することになった。これまで鳥取城跡の保存整備は、明治初年の状態に復元することを原則としており、その意味では本石垣は例外である。

(4) 保存石垣

本天球丸石垣修理工事を実施した石垣に、一部構築当初の石垣を手を加えずに保存している。石垣I、II間の入隅と石垣IIIの向かって左下の部分である。

(5) 石垣復元修理工事の確認事項

石垣修理工事にあたっては、文化財の修理であるという立場から以下の点を確認した。

- ・石垣の石材は、可能な限り再利用し、同位置に戻すようにする。
- ・割れ、控えがないなど再利用が困難なものは新石と取り替える。
- ・割れなどによって同位置に利用できない石材も他の位置で利用をはかるようにする。
- ・補充の新石は、花崗岩を利用する。
- ・裏込架石は、新石とする。
- ・これまで知られていない石垣、根石、出土品等が見つかった場合は現状を変更しないで教育委員会担当者ないしは建設部担当者に連絡をする。
- ・石積工事の標準断面は第6図の通り、積石は0.25m³程度の石材で控を80cm内外取ることとし、高石垣で1.5m程度の裏込栗石をいれること。

(6) 石垣解体工事

石垣の解体工事は、まず石垣の清掃後、写真測量図で確認しながら石面に通し番号を記したガムテープを貼付した。解体後は、側面等に墨で同番号を記入した。番号の貼付後、バックホーで石垣裏の掘削

及び裏込栗石の撤去を行ない、その後人力及びワイヤーロープとクレーン付バックホーを使用して撤去し、安全な位置に仮置きした。この時、石材の状況及び加工痕、刻印・墨書きの有無を確認し、再利用が可能か判断した。石材には割れなどによって再利用できない石材がかなり認められた。

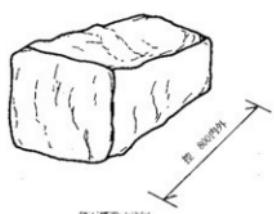
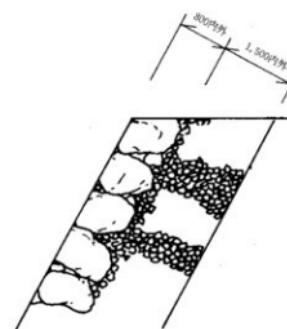
(7) 石積工事

石積工事は、在来工法によって行ない、解体した石材を元の位置にできるだけ戻すことを原則とした。しかしながら天球丸の石材は、小さいものが多く、また、割れなどにより再利用できない石材も多く、難しい面もあった。石積は、石材の据付け、栗石の投入を繰り返して行なうが、石材の据付けに当たっては隙込めの塊盤石を調整し石材の安定及び勾配を取るようにする。

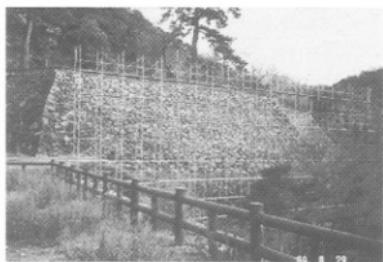
(8) 整地工事及び擬木柵

天球丸の整地は、雨水などの排水のため中央部をやや高くして均等にならした後真砂土を置き転圧して整地した。

擬木柵は、見学者等の転落防止のため必要なものであるが、石垣景観を損なわないよう石垣天端からなるべく控えるように設置した。また、擬木は針葉樹を模したものとした。



第6図 石積工事標準寸法図



石垣写真測量



石垣写真測量



石垣清掃



番号貼付



石積状況調査



石積状況調査



石材の割れ



石積状況



裏込栗石の調査



石材玉掛け



石材吊り上げ



仮置石材調査



人力による掘削



機械による掘削



土石運搬



足場組み立て



石材の設置



塊盤石の設置



新石材の計測



新裏込栗石の計測

第2章 発掘調査

第1節 調査の経過

1. 調査の経過と方法

鳥取城は、標高263mの久松山山頂を本丸とし、山麓の南側裾部標高10m～51mに二ノ丸、三ノ丸などの城郭を構築していった中世山城の様相を呈する城である。現在では城郭に伴う建物はなく、明治12年（1879年）に取り壊された以後は石垣と堀が残っているにすぎないが、石垣からは当時の偉容を偲ぶことができる。

明治以後放置されていた石垣は荒廃し旧状を失いつつあったが、それにも増して昭和18年に発生した鳥取大地震は、鳥取県の東部を中心に大きな被害をもたらし、城跡の石垣も各所で崩壊するなどの多大な影響を受けた。このような中で昭和32年に国の史跡に指定され、被害を受けた石垣の保存修理が始まった。修理は昭和34年から開始され、まず急を要する三階櫓石垣の保存修理から実施された。その後、城跡整備計画に基づき昭和42年度から山上ノ丸、山下ノ丸の整備を行ない、昭和53年度からは大菱櫓石垣、渡御門石垣・石段、走り櫓・武者走り石垣、菱櫓石垣の復元修理が年次計画のもとに行なわれた。

鳥取城跡の発掘調査は、走櫓・武者走り石垣復元事業に伴い、昭和55、56年度に実施されている。調査の結果、二面の遺構面が検出され、走櫓建物の新・旧の礎石、新走櫓建物に伴う遺構、排水施設等が確認されている。

今回の発掘調査は、天球丸石垣の復元修理に先立って行なわれたものである。調査は、石垣の復元修理工事計画にそって平成2年、3年、7年度の三次にわたって実施された。第一次調査は平成2年5月～7月に天球丸の北西部を対象として実施した。調査区北側からは埋没した新規の石垣（石垣01）が検出された。第二次調査は、前年度に確認された新規石垣の東側の拡張調査と、第一次調査区に続く南東部について8月から行なった。第二次調査では古段階の石段、石垣（石垣02）や、この他、建物跡、溝、土坑等の多くの遺構が検出され、12月に現地調査を終了した。第三次調査は天球丸の南東～東側を調査対象とした。しかし、石垣背後に建設されている擬木樁は調査段階で撤去することは困難であり、この擬木樁部分については調査対象から除き調査を実施した。調査は平成7年10月～12月に実施し、焼失した櫓跡、礎石等を新たに確認することができた。

発掘調査は、石垣の復元工事に係る範囲を対象として行なったが、天球丸上部一帯はかつて公園整備がなされ、また、松の古木、桜等の立ち木が多く調査が困難な状況があった。

調査は天球丸およびその周辺の現況調査から開始し、天球丸一帯の平面測量と、天球丸石垣の根石確認調査を行なった。確認調査は石垣I、II、IIIの基部の4箇所にトレンチを設定して行ない、石垣IV、Vについては解体時に確認調査を行なった。上部遺構の調査終了後、石垣解体工事と併行して裏込状況の調査を実施した。この解体時の調査は石垣II、IIIを主に実施し、石材を取外すごとに裏込状況を記録し、その作業を反復して行なっていった。なお、石垣の実測は写真測量によって実施した。

天球丸上部の調査は、石垣解体復元工事に影響が及ぶ範囲を発掘調査区域に設定した。その範囲は石垣の天端から背面へ10～25mとしたが、第三次調査区については石垣背後に設置されている柵を残した状態で調査区を設定した。表土の除去作業は平成2年度調査区については人力で実施し、平成3年度、7年度については前調査結果をもとに表土除去を行い、表土除去後の調査は、試掘トレンチによる土層観察を行なながら段階的に掘り下げていったが、第三次調査区では上層から建物跡が検出され、建物跡の現状保存のため下層は未調査である。

調査区の土層観察は基本的に前面石垣に直交するベルトを設定し、同時に調査区の北東壁面について行なった。また、天球丸の中央部にあたる第二次調査区については、上部遺構の調査後、北東～南西方向の試掘トレンチを掘り下げ、盛土状況や地山面の確認、石垣の裏込め状況の調査を行なった。

2. 発掘調査の体制

発掘調査の体制は下記のとおりである。

調査主体 烏取市教育委員会

教育長 田中 哲夫

事務局 烏取市教育委員会社会教育課（平成2・3年度）

文化課（平成7・8年度）

平成2年度

次長兼社会教育課長 繩田 捷彦

課長補佐兼文化係長 小杉 宗雄

主任 平川 誠

主事 伊田 健司

主事 中島伸一郎

調査員 前田 均

平成3年度

社会教育課長 小谷莊太郎

課長補佐兼文化係長 小杉 宗雄

主任 平川 誠

主事 平野 文弘

主事 中島伸一郎

調査員 前田 均

調査員 塚田 晴子

平成7年度

文化課長 小杉 宗雄

課長補佐 田中勢一郎

文化財係長 平川 誠

主任 石井 克明

嘱託 浜野るみ子

調査員 前田 均（鳥取市埋蔵文化財調査センター）

平成8年度

文化課長 岩成 潔一

課長補佐 田中勢一郎

文化財係長 平川 誠

主任 石井 克明

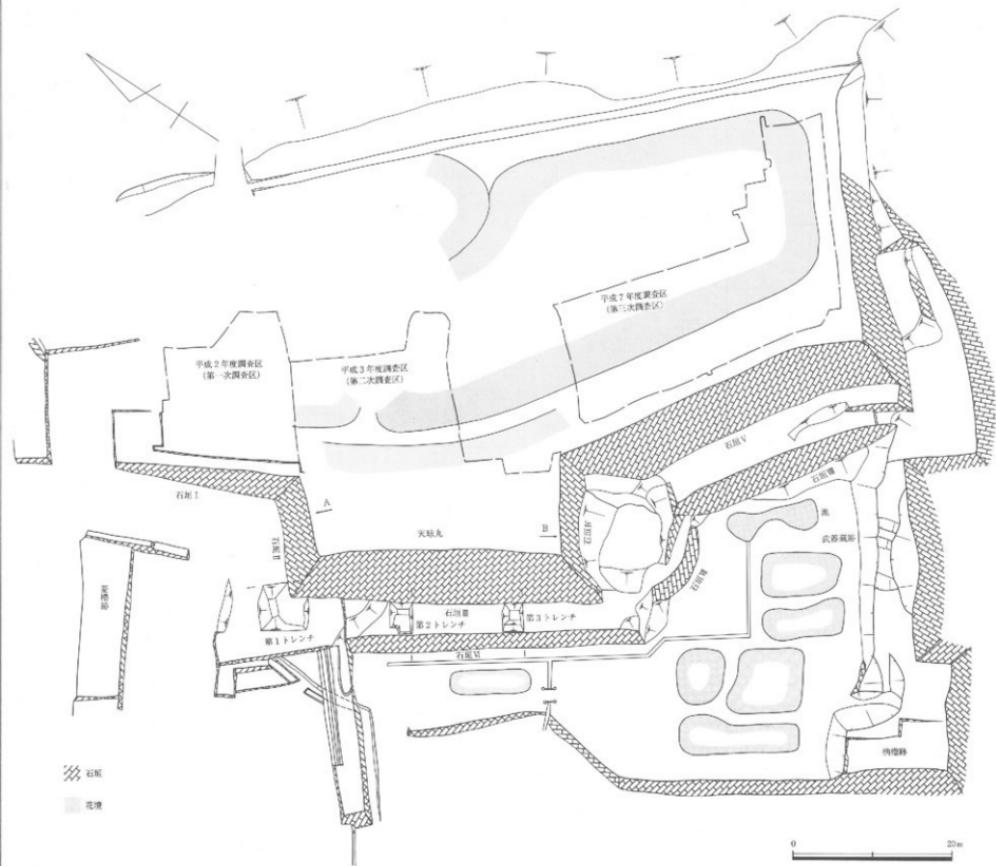
嘱託 浜野るみ子

調査員 前田 均（鳥取市埋蔵文化財調査センター）

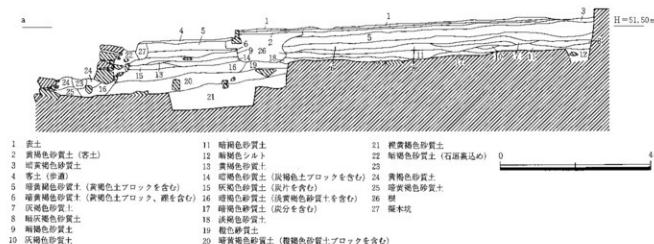
調査指導 文化記念物課、奈良国立文化財研究所、鳥取県教育委員会、鳥取県立博物館、鳥取県埋蔵文化財調査センター

安原啓士、田中哲雄、加藤充彦、伊東太作、北垣聰一郎、山根幸恵、山名巖、村上勇、田中精夫、小椋博幸、中林範明、松田潔、中原齊、池原和彥、坂本敬司、田中弘道、久保謙二郎（順不同）

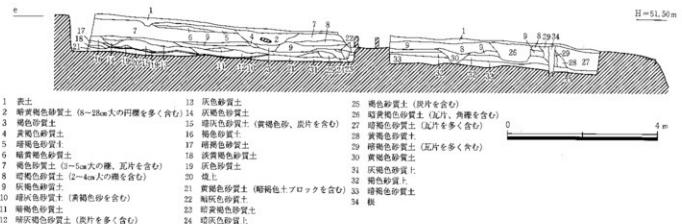
調査協力 鳥取市建設部開発課、道路管理課、上月工業有限会社



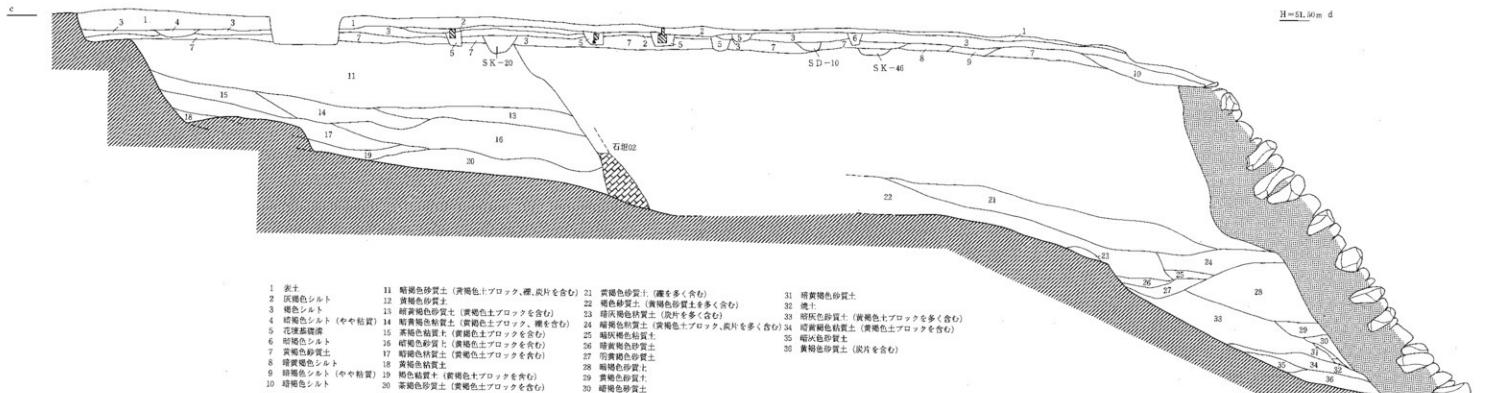
第7回 天球丸案測図



第8図 第一次調査区断面図



第10図 第三次調査区断面図



第9図 第二次調査区断面図

第2節 調査の結果

1. 調査区の層序

調査前の天球丸は公園として整備されており、歩道、花壇、柵などの施設や、それに伴う客土などによって旧状の様相を変えてきている。また、震災等による石垣面の変化もみられ、石垣上端背面では沈下している個所も観察された。

調査区の土層観察は、基本的に前面の石垣に直交する北東～南西ベルトと、調査区の北東壁面について行なった。以下、調査区に設定した北東～南西の土層断面からみた層序についてその概要を述べる。

第一次調査区の層序（第8図）

表土下層には公園整備に伴うものとみられる客土（第2、3、4層）が認められる。第3、4層の下層は比較的均一な暗黄褐色砂質土の第5、6層が40～55cmの厚さで堆積している。この第5、6層は、石垣Ⅰの背面に構築された4段積の石垣に伴って整地された際の盛土と考えられる。第5、6層には遺物はほとんど含まれないが、第6層の下層から遺物の密度が増す傾向がみられ、第11層および第20層上面からは溝、土坑等の遺構が検出された。調査区の東側の下層遺構面では炭片、焼土を含む厚さ10cm前後の灰褐色の砂質土が部分的に確認されている。

第二次調査区の層序（第9図）

第9図は天球丸の中央部に設定したトレチの断面実測図である。第11、12層から上層の断面実測は遺構検出と併行して行ない、その下層は調査終了後にトレチを掘り下げた段階で記録した。また、石垣Ⅲの裏込めおよび盛土状況は、石垣の解体時に実測したものである。第9図はこれらを合成して作成したものである。実測に際しては垂直断面で計測することを心がけたが、石垣背面の実測は垂直断面での計測が不可能であり、傾斜面の土層断面を垂直投影する方法で実測した。

表土（公園整備等の客土を含む）は約30cm～50cmの厚さで認められ、表土下層には灰褐色あるいは褐色の土層が堆積している。これらの層には18世紀以降から現代に至る遺物が混在しており、後世の擾乱をうけているようである。第3層の下層には比較的均一の黄褐色砂質土（第7層）が認められ、この7層上面からは土坑や溝などの遺構が検出された。第7層は約20～30cm程度の厚さで堆積しており、17世紀代とみられる陶磁器類が含まれている。第7層の下層には第11、12層の異なった土層が認められ、これらの土層の上面から多くの遺構が検出された。第11、12層以下の層序には、石垣Ⅲの背後約18mの地点で大きく傾斜する断層面が認められ、この断層面を境に土層の堆積状況が大きく異なっている。下方に石垣の裏込めとみられる栗石が検出され、古段階の石垣が存在していたことが窺われる。

第三次調査区の層序（第10図）

表土下層には厚さ20～45cm前後にわたって褐色砂質土（第7層）が堆積している。この層には摩耗した瓦片や角礫が含まれており、かなり搅乱された様子が窺われる。第7層以下は比較的細かな層序が認められ、第21層上面からは厚さ2～4cmの焼土層が検出された。この焼土層は調査区の西側には認められず、調査区の南東側から検出した櫛跡（S B03）の焼失に伴うものと考えられる。遺構は第9、13層上面と、第21層上面から検出されている。

以上、各調査区の土層についてみたが、各次の調査区において二面の遺構面が検出された。第一次調査区の第11層、第二次調査区では第7層、また、第三次調査区では第9、13層の上面が基本的に上層の遺構面と考えられる。また、基本的な下層遺構面として第一次調査区の第20層上面、第二次調査区では第11、12層上面、第三次調査区では第21層上面を捉えることができる。

2. 石垣の調査（第11～15図 付図1、2、3）

天球丸は、「凸」字型の平面形を呈し、石垣Ⅰ～Ⅴを主体に曲輪が構成されている。石垣Ⅲ、Ⅳ、Ⅴの下段には腰石垣が築かれている。

今回の調査では、解体復元工事の対象となった石垣Ⅰ～Ⅳ、Ⅶについて石垣基底部の確認と、裏込め状況の調査を行なった。石垣Ⅰ～Ⅲの基底部の調査は、石垣解体前に試掘トレンチによって行ない、石垣Ⅳ、Ⅶは解体時に実施した。石垣の実測は写真測量で行ない、試掘トレンチによって新たに確認した部位については、補足実測を行ない写真測量図に合成した。

石垣Ⅰ

石垣Ⅰ、Ⅱの隅部に設定したトレンチによって基底部を確認した。根石は地山面に設置されており、根石から石垣上端までの高さ8.5mを測る。根石部分の標高は41.10mである。裏込めは下半で幅70～110cm、上半で幅105～200cmを測り、上半でかなり幅を増している。

石垣Ⅱ

石垣Ⅰ、Ⅱの隅部と石垣Ⅱ、Ⅲの角部（第1トレンチ）で基底部を確認した。地山は石垣Ⅰ側から石垣Ⅱ、Ⅲの角部側にかなり傾斜しているが、この地山面に根石が置かれている。角部の根石部分の標高は38.20mを測り、根石から石垣上端までの高さは11.7mである。裏込め幅は概ね90～130cmであるが、標高48m前後から上位で極端に幅を増し、幅200～230cmを測る。

石垣Ⅲ

石垣裾部に設定した3個所のトレンチ（第1～3トレンチ）によって基底部を確認した。石垣Ⅳ側に設定した第3トレンチでは、比較的大型の角礫を多く含む盛土上に根石を配するが、石垣Ⅱ側では地山面に根石が置かれている。根石部分の標高は第1トレンチで38.20m、第2トレンチで38.60m、第3トレンチで38.40mを測りほぼ同一レベルを示す。根石から石垣上端までの高さは第2トレンチ部分で11.2mを測る。裏込め幅は概ね70～120cmであるが、中位で幅を増し最大で240cmを測る。

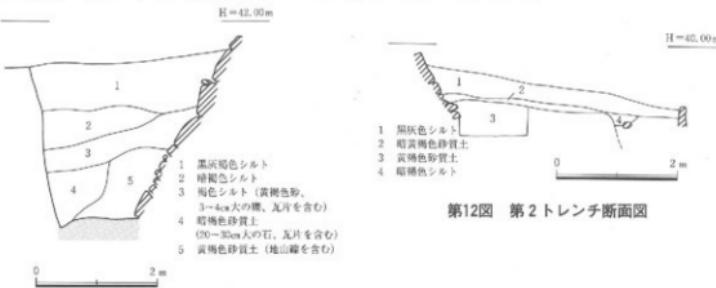
断面（第9図）から石垣Ⅲ背面の盛土状況をみると、下半では、細かく盛土と栗石の敷設を順次行なって積み上げた様子が観察されるが、中腹から上方には均一の黄褐色砂質土が、厚さ3m以上にわたって盛られている。地山面は比較的緩やかに下っており、このような緩斜面に大量の盛土を行なうことによつて曲輪を構築した様子が窺われる。

石垣Ⅳ

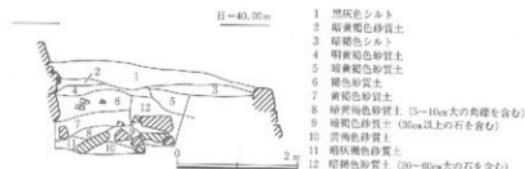
石垣の裾部には多量の土砂が堆積しており、石垣解体時に基底部を確認した。根石は地山面に置かれしており、根石の標高は39.30mである。根石から石垣上端までの高さ10m前後を測る。

石垣Ⅴ

石垣Ⅳの下段に構築された腰石垣である。崩落が著しく原状が明らかでなかったが、解体時に石垣Ⅴ側にさらに延びることが確認された。石垣Ⅴの下段の腰石垣（石垣Ⅶ）より先行して構築されている。根石は地山面に設置されており、石垣の高さは根石から4.2mを測る。なお、石垣Ⅶの前面には湾曲ぎみの石垣が構築されている。「因幡国鳥取城絵図」（文化4年）には石垣が崩落したとの記録がみられ、石垣Ⅶ前面の石垣は、その後補強修理のために築かれたものと思われる。



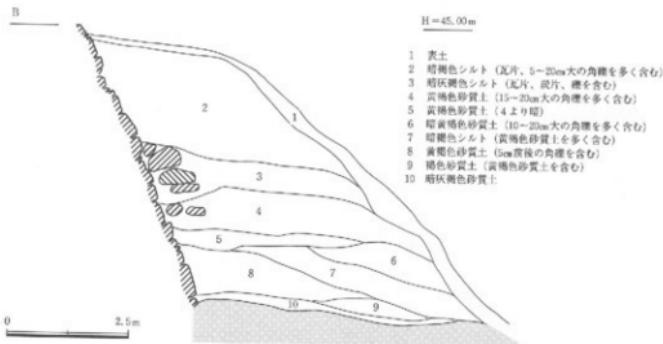
第11図 第1トレンチ断面図



第13図 第3トレンチ断面図



第14図 石垣Ⅱ断面図



第15図 石垣Ⅳ(下半)断面図

3. 上層検出遺構（第16図）

第一次調査区の第11層、第二次調査区の第7層、第三次調査区の第9、13層上面が基本的上層遺構面と考えられ、この上面およびその上位で検出した遺構を上層検出遺構とした。遺構は第一次、第二次調査区側に集中する傾向がみられ、建物跡、柱列、土坑、溝、ピット、列石等が検出された。

建物跡

第一次調査区から柱列跡（S B01）、第三次調査区から建物跡（S B02）を検出した。

S B01

石垣Iのすぐ背面に位置する柱列である。柱列は14基（P01～P14）のピットによって構成されている。ピットの間隔はP01～P02間で2.5m、P02～P03間で1.6mを測るが、P03～P14間の各ピット間は0.9～1.1m間隔である。P01～P14間の長さ15.3mを測り、ピットの径は45cm～65cm、深さは5cm～17cmを測る。P02、P03、P05～P14内には5cm～25cmの角礫が認められる。塀などの建物に伴うものと考えられる。遺物は出土しなかった。

S B02（第17図）

第三次調査区の東～南東側で検出した建物跡である。天球丸の南東に位置し、前面の石垣（石垣V）の背面約10mに建築されている。幅80～130cmにわたって石材を敷設して建物の基礎部を構築している。石材の敷設は丁寧で、比較的大型の石を中心に配し、小型の石を丁寧に詰めて面を整えている。また、床面の中心部には、5m間隔で角礫が敷き詰められた個所が2箇所検出された。柱を設置するための基礎部分の可能性が考えられる。主軸（行行）方向は天球丸の南東石垣とほぼ平行である。基礎部の規模は長さ18m、幅7.6mを測り、建物は梁間4間、桁行9～10間の規模をもつものと考えられる。遺物は弾丸とみられる鉛製の玉が出土している。

この建物跡は、位置、規模などからみて、鳥取城の絵図（鳥取城御住向之図）に表現されている建物に該当するものと考えられる。絵図内の建物には「御蔵桁行拾間張間四間」の記載がみられる。

ピット

第一次、第二次調査区からピット12基を検出した。これらのピットの中にはピット内に5cm～25cmの礫が3ないし5個置かれているP15（53cm×64cm～27cm）、P16（49cm×77cm～29cm）等が検出された。建物を構成する柱穴と考えられるが全容は不明である。遺物は検出されなかった。

土坑状遺構

第一次調査区から5基（SK01～SK05）、第二次調査区で23基（SK11～SK33）を検出した。各土坑の規模、形態等については第3表にまとめた。平面形は全体に円形、楕円形、隅丸長方形を呈する。規模は、最小のSK16で長さ48cm、幅46cm、最大規模のSK04が長さ268cm、幅240cmを測るが、土坑の大半は長さ100cm～160cm、幅50cm～80cmである。深さは4cm～58cmで比較的浅い土坑が主体である。断面形は皿状、あるいは逆台形を呈している。各土坑の性格についてははっきりしないが、SK14、SK16のように廃棄坑的な様相が窺われる土坑もみられる。

SK14

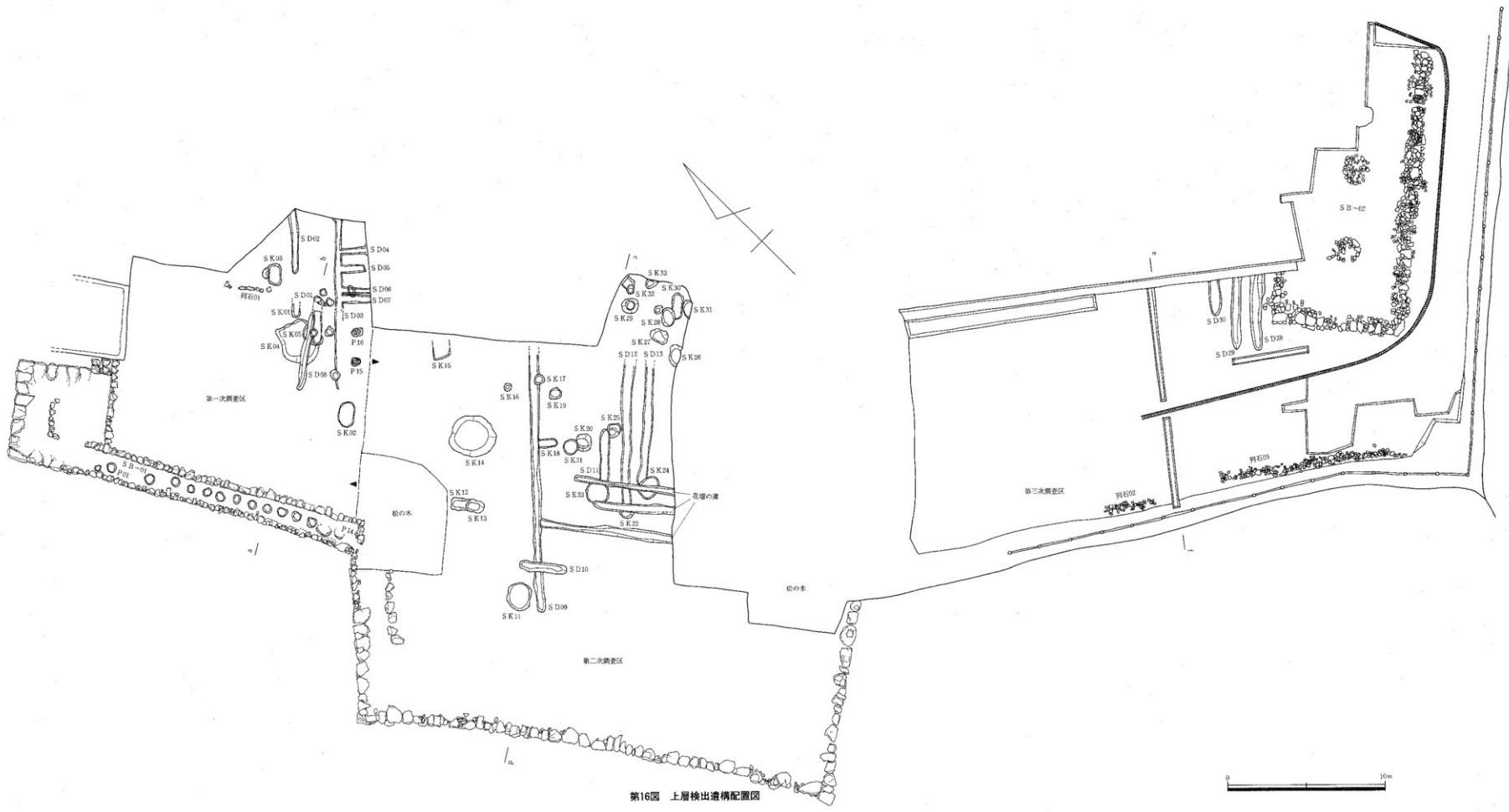
長さ278cm、幅261cmを測りほぼ円形の平面形をもつ土坑である。断面形は逆台形を呈し、深さ48cmを測る。土坑内には多くの瓦片、炭化物、角礫等が埋まっており、廃棄された様相を呈している。

SK16（第18図）

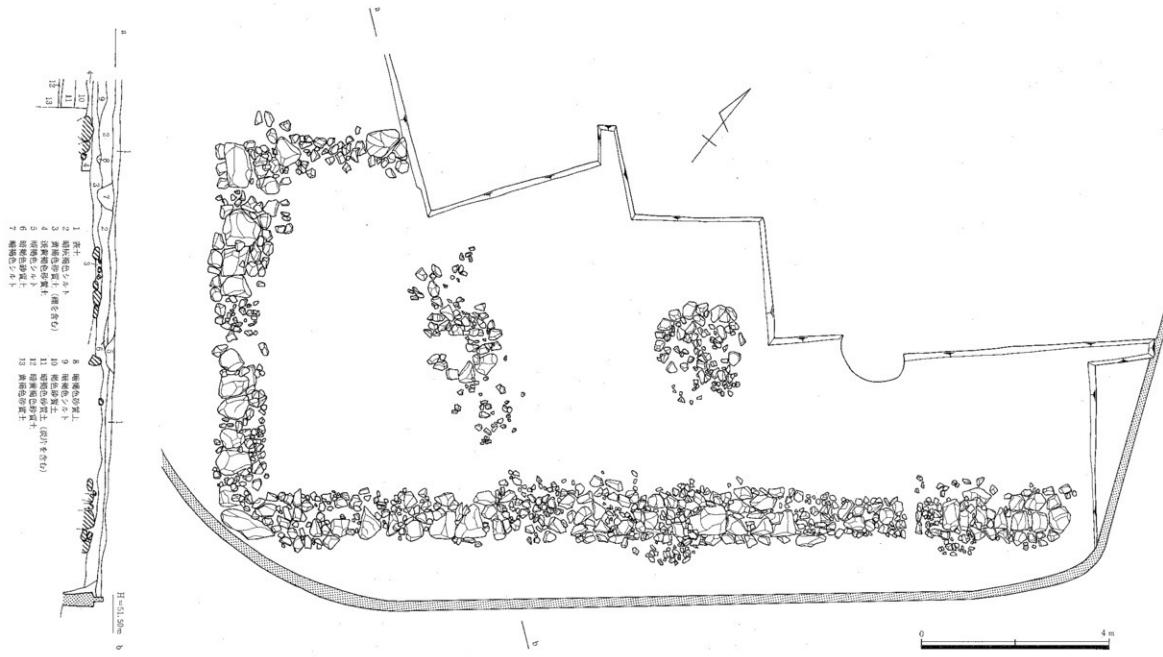
円形の平面形を呈し、径46cm×48cm、深さ24cmを測る。断面形は逆台形である。土坑内および上面周辺には陶磁器、土師質土器、瓦等が比較的良好な遺存状態でまとめて出土した。一括廃棄された様子が窺われる。

SK17（第19図）

長さ69cm、幅62cm、深さ24cmを測る。概ね円形の平面形を呈し、断面形は逆台形である。土坑の底面



第16図 上層検出構造配置図



第17図 SB02実測図

にはほほ接する状態で完形の瓦が出土しており、意図的に置かれた様子がみられる。

出土遺物

遺物は、SK03-05、12-18、20、21、25、29、33から検出された。いずれも埋土中から出土しており陶磁器、土師質土器、瓦、鉄製品、銅製品、古錢、貝殻等がある。

陶磁器類はSK03-05、12-18、20、21、25、29、33から検出されている。全体に残存状態が悪く小片のものが大半を占めるが、SK04、16からは備前系の捕鉢（第29図4、5）や、SK16から伊万里の皿（第29図3）が出土した。土師質土器はSK04、16、18、20、21、33から出土した。大半が皿の破片である。瓦はSK04、05、11、14、15、17から検出された。平瓦、丸瓦の破片が主であるが、SK04からは巴文の軒丸瓦、SK17から完形の平瓦が出土している。鉄製品はSK03、04、29から出土したが、いずれも鋸化が著しく形態不明である。また、SK03、04からは針金状の銅製品が、SK14からは煙管の吸い口（第30図）が出土した。古錢はSK16から寛永通寶（第32図1）、SK33から景徳元寶（第32図2）が検出された。貝殻はSK05の出土である。

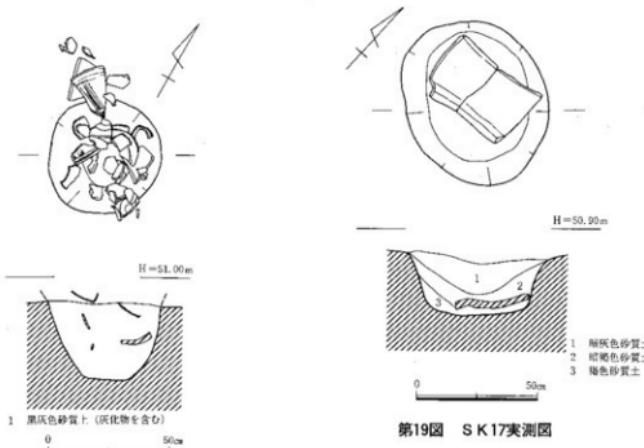
溝状遺構

第一次調査区から8基（SD01-08）、第二次調査区で5基（SD09-13）、第三次調査区で3基（SD28-30）検出した。各溝の規模、形態等については第4表にまとめた。それぞれの溝は前面の石垣（石垣I、III、V）に対して直交か、あるいは平行に主軸をとっており、規則性がみられる。溝の幅は、最小のSD06が36cm、最大幅をもつSD30は74cmを測るが、40cm-60cm幅の溝が主体である。深さも全体に浅く4cm-33cmを測る。幅、深さ、断面ともに概ね類似した形態を示している。排水溝の可能性も考えられるが、具体的な性格は特定できなかった。

遺物は、SD02、03、04、06、09、10、11、12、13から陶磁器片、SD03、12、13から土師質土器片、SD09、11から瓦片が検出された。いずれも小片で埋土からの出土である。

列石遺構

第一次調査区から1基（列石01）、第三次調査区から2基（列石02、03）を検出した。



第18図 SK16実測図

第19図 SK17実測図

列石01

第一次調査区の北側に位置する。長さ25cm～51cm、厚さ25cm～35cm大の角礫を直接床面に並べている。石の配列は直線的に行なわれており、全長3.1mを測る。床面からの高さは8cm～15cmである。主軸はN-41°-Wにとり、石垣Iの主軸より若干北に振っている。遺物は検出されなかった。

列石02

第三次調査区の南西側で検出した。石垣Vの背後1.8mに位置し、石垣Vに対してほぼ平行に並べられている。全長は3.3m、幅40cm～60cmを測り、15cm～30cm大の角礫を配置している。遺物は陶磁器片、瓦片が出土した。

列石03

列石02の南東約4.1mで検出した。石垣V背後1.6mに位置し、石垣Vに対してほぼ平行の主軸をもつ。列石は20cm～45cm大の角礫を主に用い、幅35cm～80cmにわたって概ね直線的に並べられている。一部に二段積みの個所も見られるが、全体では床面に直接一石を置き築いている。検出長11.9m、高さは最大25cmを測る。遺物は、陶磁器片、瓦片がわずかに検出された。

4. 下層検出遺構（第20図）

第一次調査区の第20層、第二次調査区の第11、12層、第三次調査区では第21層の上面が基本的な下層遺構面とみられ、これら各層の上面およびその下位で検出した遺構を下層検出遺構とした。第二次調査区では遺構面の上層に17世紀代に比定される陶磁器類が含まれている。

下層で検出した遺構には建物跡、石段、石垣、土坑、溝、ピット、瓦溜りがある。遺構は南西側に集中し、第三次調査区の南東側では希薄となる傾向がみられる。

建物跡

槽跡（S B03）、掘建柱建物跡（S B04）、柱列（S B05、06、07）を検出した。

S B03（第21図）

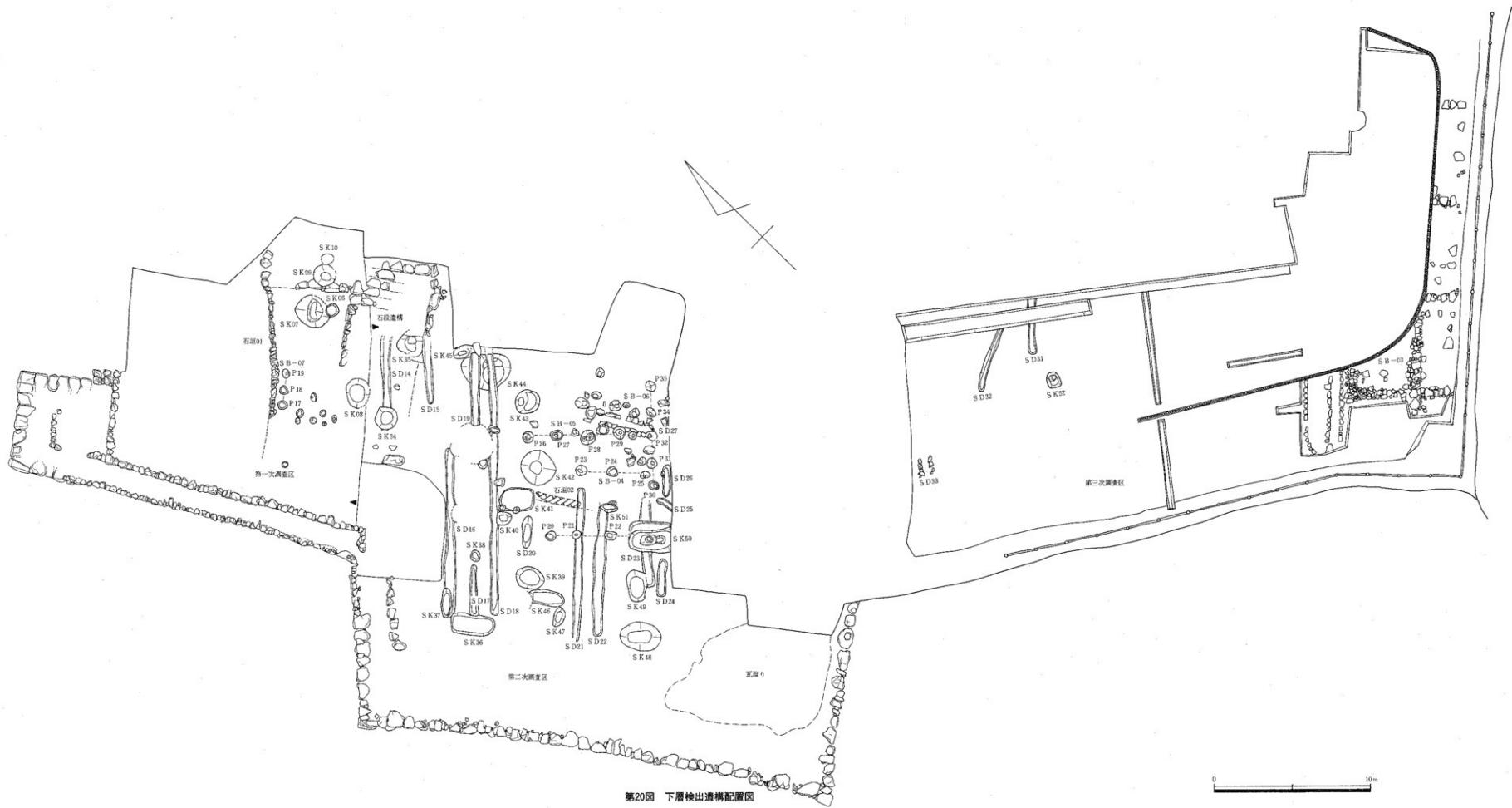
天球丸の南東端に位置し、第三次調査区の東～南東側で検出した建物である。建物の基礎部は、石材を組み合わせて構築されており、規則的な配列を示す。桁行方向の基礎は、天球丸の南東側石垣に対して平行に延び、石垣から4mおよび8mの位置に配列されている。この基礎部は、幅50cm～80cmを測り、10cm～50cm大の石材を用いて帶状に組み合せている。梁間方向の基礎部は、桁行方向の基礎石列に対して6m等間隔で直交し、比較的大型の石材を列状に並べて築いている。また、この石列間の中間に礎石とみられる50cm～80cm大の扁平な石（礎石1、2、3）が配置されている。建物全体の確認は、櫛木柵、北側の上層で検出したS B02によってできなかつたが、検出状況から、建物は前面及び南東の石垣側にさらに延びるものとみられ、建物の復元規模は桁行12間、梁間4間と考えられる。

建物の床面には、焼けた痕跡が広範囲にわたって顕著に認められ、焼土、炭片が検出されている。また、礎石には二次焼成を受けたものが多く見られ、建物が焼失したことが窺われる。

建物に伴う遺構として、南西側基礎部に平行して延びる石列を3条（石列1、2、3）検出した。石列1、2は建物に伴う排水溝とみられ、共に20cm～45cm大の石の平坦面を内側に向けて立てている。幅は内法で50cm前後、深さ25cmを測る。石列3は、石列2の1.4m北西側に位置し、20cm～35cm大の角礫を一部湾曲させ配列している。石列1、2とほぼ同一の主軸をとっており、建物に伴うものと考えられるが、その性格は不明である。

鳥取城絵図（延宝8年）内には、天球丸南東端に三階櫓が描かれている。その位置等からS B03この三階櫓跡に該当するものと考えられる。

遺物は、焼土中から瓦、鉄釘が多数出土した。瓦は、遺存状態が悪くいずれも破片であるが、軒丸瓦、軒平瓦が含まれている。鉄釘は90点あまり検出された。長大な釘は少なく、長さ3cm～9cmのものが主



第20図 下層検出遺構配置図



第21図 SB03実測図

体である。

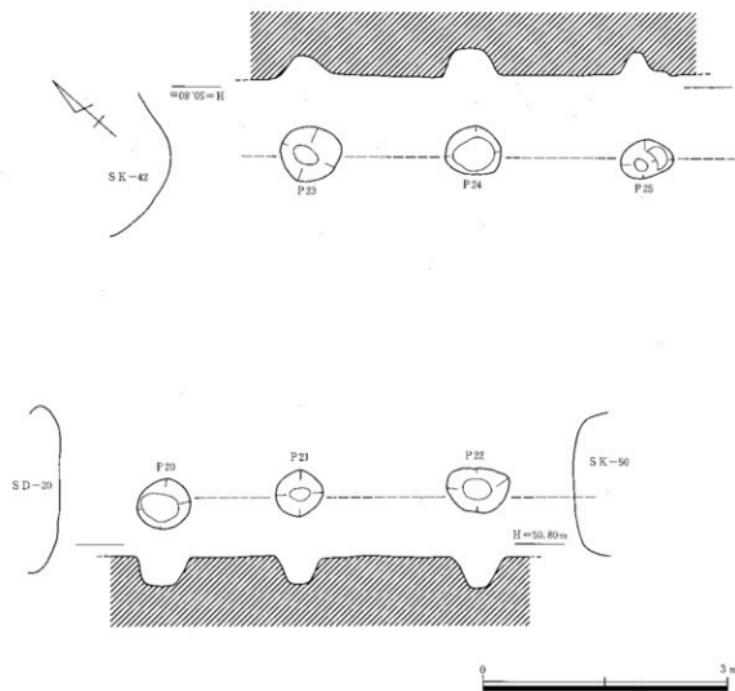
S B04 (第22図)

第二調査区の東側に位置している。P23の北西側、P22の南東側は土坑に切られ、さらに、東側が調查区外となるため建物の規模は特定できないが、桁行3間以上の規模が想定される。また、P22～P24間は4.2mを測り、梁間2間の建物と考えられる。柱穴間はP20～P21が1.8m、P21～22、P23～P24、P24～P25はいずれも2.1mを測る。柱穴の規模はP20 (60×62-34cm)、P21 (60×60-34cm)、P22 (54×74-36cm)、P23 (67×70-27cm)、P24 (60×69-31cm)、P25 (49×64-28cm) である。建物の主軸はN-42°-Wにとり、正面の石垣Ⅲに対してほぼ平行している。

遺物はP21から瓦片、P23、24から土師質土器片が出土した。いずれも埋土中からの出土である。

S B05 (第23図)

S B04の北東約2.5mに位置する柱列 (P26～P29) である。S B04の主軸に対してわずかに西側に振る。P26～P29の各柱穴間は2.0m～2.2mである。柱穴の規模はP26 (70×74-55cm)、P27 (66×81-45cm)、P28 (85×90-38cm)、P29 (79×78-46cm) を測り、比較的大型の柱穴で構成されている。遺物はP26埋土から土師質土器片が出土した。



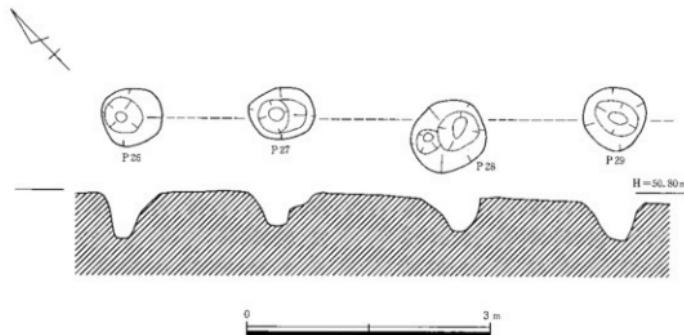
第22図 S B04 実測図

S B 06 (第24図)

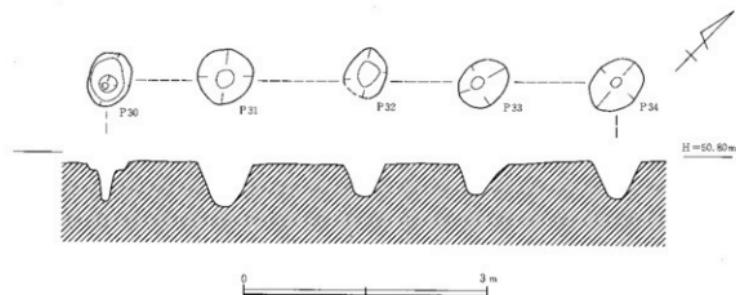
S B 05の東側に隣接する柱列 (P 30~P 34) で、S B 05の主軸に対して直交している。P 30~P 34の各柱穴間は1.5m~1.7mを測る。柱穴規模はP 30 (55×68~49cm)、P 31 (68×68~52cm)、P 32 (50×61~43cm)、P 33 (55×68~40cm)、P 34 (58×70~49cm)である。S B 05の主軸に対してS B 06が直交することや、柱穴規模等から同一建物を構成する可能性も考えられる。遺物はP 34から土師質土器片が出土している。

S B 07

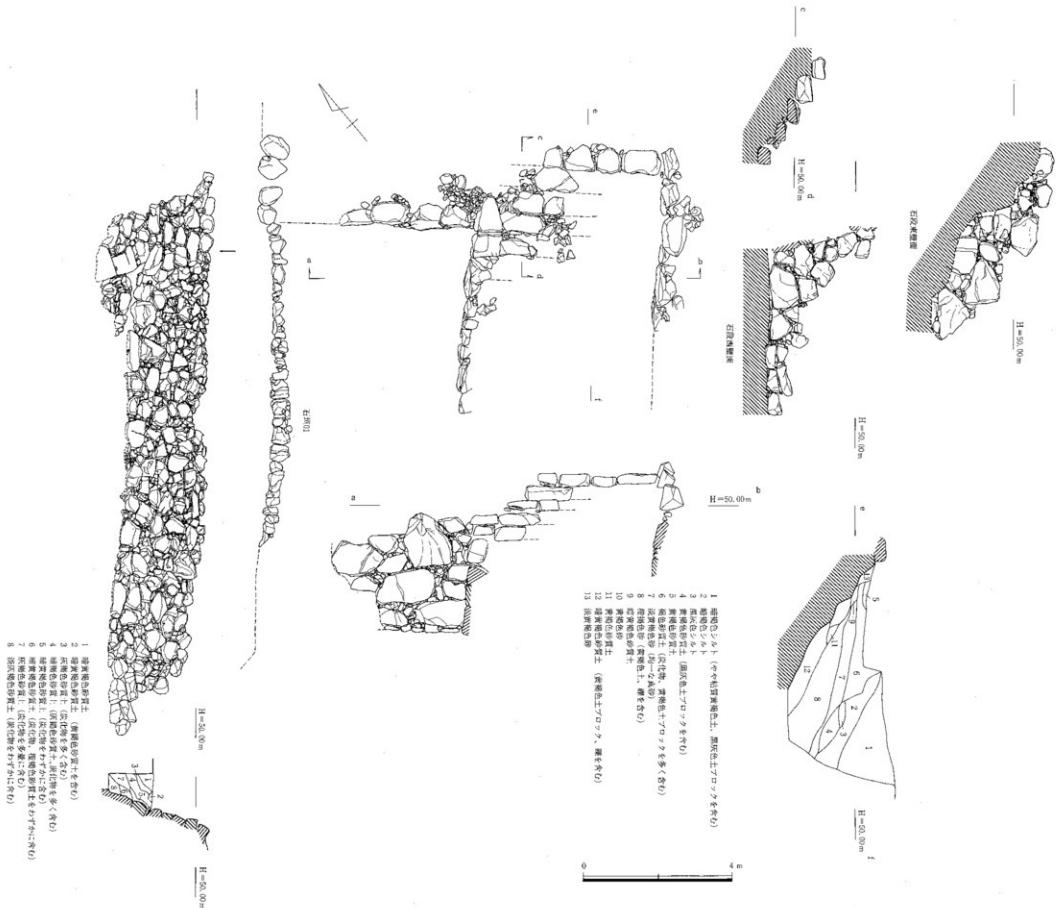
第一次調査区のほぼ中央で検出したP 17~P 19の柱列である。柱穴は、径45cm~60cm、深さ13cm~20cmを測り、ほぼ1m等間隔で並んでいる。P 17とP 18の底面中央には幅16cm~25cm、厚さ10cm前後の石が置かれており、柱の礎石の様相を呈している。概要報告では石垣01に伴う可能性を指摘しているが、石垣01より新段階の造構と考えられる。



第23図 S B 05 実測図



第24図 S B 06 実測図



第25図 石段構造・石垣01実測図

石段遺構（第25図）

第二次調査区の北側に位置し、石垣Iの背面約11.5mで検出した。石段を構成する石材は、上位5段の一部が遺存するのみで、他はすべて除かれている。また、石段の両壁面の石材や、正面壁の石もすでに失われており、原状をかなり失っている。石段の埋土には多量の黄褐色砂質土や暗褐色系の土が大量に堆積しており、埋められた様子が窺われる。

石段は、南西側から北東側へ上がる。N-45°-Eに主軸をとり、石垣Iに対してほぼ同一方向の軸をもつ。石段の規模は、長さは約7.1m、幅4.3m、基底部から最上段までの高さ4.4mを測る。各段の奥行きは50cm~60cm、高さ35cm前後である。段数は遺存部から推定して10~11段と考えられる。

石段の西側壁面を構成する石垣は、南東~北西に主軸をとる正面石垣に対して直交させ、約5.5m突き出している。壁面は西側を整えている。また、石段の東壁石垣には丁寧な裏込めが行なわれている。

石段の正面石垣の構築は、地山を掘削して行なっている。掘削は石段の北西側でみられ、掘削面の高さは最大4m前後を測る。基底部は平坦に整えられており、石垣は地山掘削面から約2m前面から築かれ、75°前後の急勾配で積み上げられている。石材には主に花崗岩を用い、長さ1mをこえる大型の石を多く使用している。

遺物は、石段東壁面の裏栗石の中から16世紀後半に比定される中国製の陶磁器片（第36図1、3）、朝鮮半島製の陶磁器片（第36図2）が出土した。天球丸における初段階の施設と思われる。

石垣01（第25図）

石段の西側約5.5mに位置し、石段の正面石垣の北西角部から南西方向に接ぎ足された石垣である。主軸をN-47°-Eにとり、現存する石垣IIに対してほぼ平行に延びる。石垣上部の一部はすでに抜き取られていて原状が失われているが、規模は、遺存長11.5m、検出高3mを測る。石垣を構成する石材には1mをこえるような大型のものではなく、全体にこぶりの石材を用い、70°前後の勾配で積まれている。全体に雑な感を受ける石垣である。石垣背面には裏込めの栗石が認められ、その背後には黄褐色砂質土、暗褐色砂質土が大量に埋められている。石段遺構より新段階の石垣とみられ、曲輪の拡張に伴い構築された可能性が考えられる。

遺物は石垣前面の埋土中から陶磁器類の碗、皿、壺、擂鉢（第34図）と、この他に釘、鎌等の鉄製品（第35図）が出土した。

石垣02

第二次調査区のほぼ中央に位置する。第二次調査区に設定したトレーニングによって検出した石垣で、裏込め石の遺存と、土層の断面観察によってその存在を確認した。石垣の本体はすでに失われていたが、裏込めの栗石が幅1.0m、高さ1.2m前後にわたって遺存している。主軸はN-35°-Wにとり、現存する天球丸正面石垣の主軸より若干北に向いている。また、断面観察では、裏込めを境にし断層的な層序がみられ、裏込めの背面には地山の礫を含む砂質土や粘質土などの大量の盛土が行なわれている。石垣が構築されていたことを示唆している。石垣の天端は断面からみて正面石垣（石垣III）から約18m背後に位置していたものと推定され、古段階の曲輪の存在が想定される。石垣基底部の標高は46.6mを測る。遺物は検出されなかった。

土坑状遺構

第一次調査区から5基（SK06~SK10）、第二次調査区から18基（SK34~SK51）、第三次調査区から1基（SK52）を検出した。各土坑の規模、形態等については第3表にまとめた。平面形は円形、橢円形、隅丸長方形を呈する。規模は、長さ70cm~309cm、幅46cm~223cmを測り、長さ2m以上を測る比較的大型の土坑が多くみられる。深さは8cm~117cmで、50cm以内の浅い土坑が主である。これらの土坑の中には坑内に多量の石が埋められているSK42、SK48や、瓦が多量に検出されたSK43など廃棄坑的な様相を呈する土坑があるが、性格不明の土坑が大半である。

S K42 (図版21)

第二次調査区の中央で検出された。円形に近い平面形をもつ長さ226cm、幅208cmを測る大型の土坑である。断面形は逆台形を呈し、深さは97cmを測る。坑内には15cm～40cm大の石が土坑全体にまんべんなく入っている。下部には比較的大型の石材を配し、上部にはこぶりの石を置き、上面を整えているような様子が窺われる。

S K43 (図版22)

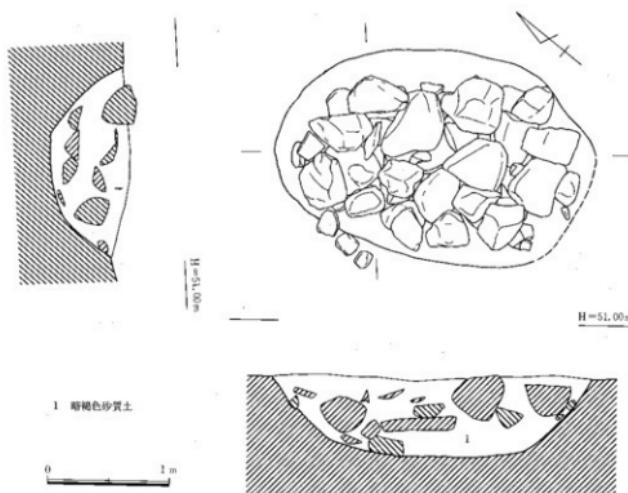
第二次調査区の北東側で検出した。下層で検出したが、出土遺物などからみると上層遺構の範疇に入るものと思われる。平面形はほぼ円形で、長さ154cm、幅150cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは30cmである。この土坑内には破片状態の多量の瓦が埋まっていた。瓦は大半が平瓦と丸瓦で占められ、廃棄された様相が窺われる。これらの瓦とともに陶磁器片、鉄製の釘が検出された。

S K48 (第26図)

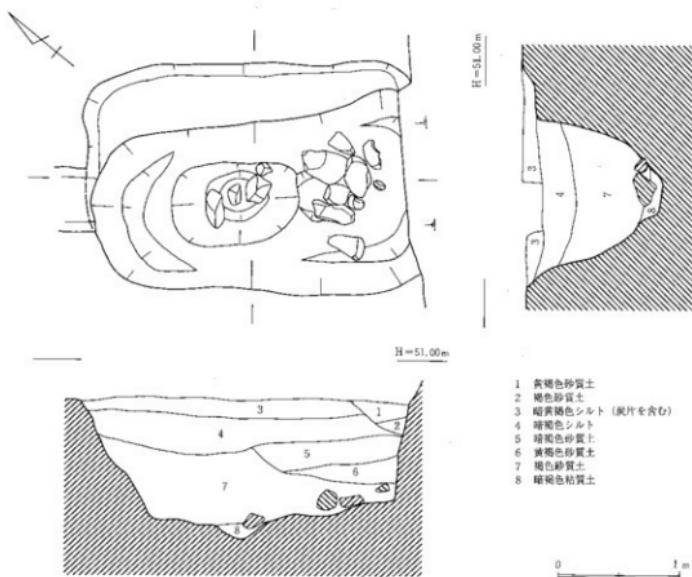
第二次調査区の南側に位置している。平面形は梢円形を呈し、長さ265cm、幅175cm、深さ61cmを測る。断面形は逆台形で底面は平坦である。土坑内には15cm～60cm大の円礫や角礫が多数埋まっていた。礫の出土状態に明らかな規則性は見られず、廃棄された様相を呈している。

S K50 (第27図)

第二次調査区の南東側で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、検出長264cm、幅186cmを測る。断面形は概ね逆台形を呈し、深さは117cmである。土坑底の中央に窪みがみられ、その上面および内部から12cm～30cm大の角礫が検出された。また、底面の南東側から底面には接した状態で10cm～40cm大の角礫が検出されたが、これらの用途、性格は不明である。



第26図 S K48 実測図



第27図 SK 50 実測図

出土遺物

遺物はSK 38、41、45～48を除く各土坑から出土しており、陶磁器、土師質土器、瓦、鉄製品、銅製品、古錢等が検出された。

陶磁器はSK 06～10、SK 34、35、37、39、40、42、44、49、50から出土した。大半が小片であるが、SK 06から盃（第38図7）、SK 07から鉢（第38図6）、SK 08から碗（第38図2）、SK 10から皿、碗、（第38図1・3～5）が出土した。また、SK 50には輸入陶磁器とみられる細片が含まれている。土師質土器はいずれも皿の破片で、SK 36、39から出土した。瓦は、SK 07、39、43、44、49、50等から検出された。平瓦、丸瓦の破片が主であるが、SK 39、50から軒丸瓦片が出土している。鉄製品は、SK 07、34、39、43、44、49から出土した。鋸化の著しい形態不明のものがほとんどであるが、SK 43、44からは釘が検出された。銅製品は、SK 06、07から針金状の製品が、また、SK 35からは煙管の一部が出土した。古錢はSK 07から永樂通寶が1点検出された。

溝状構造

第二次調査区から14基（SD 14～SD 27）、第三次調査区から3基（SD 31～SD 33）を検出した。各溝の規模、形態等については第4表にまとめた。溝は第二次調査区の中央部から北側に集中してみられる。主軸は、SD 25、27、32を除きほぼ同一方向のN-42°～53°-Eにとり、正面の石垣Ⅲ、Vに向かって延びる。幅は35cm～69cmを測るが、60cm前後の幅を有する溝が大半をしめる。深さは全体に浅く6cm～26cmを測る。断面は皿状ないし逆台形に近い形状を呈する。規模や形態、また主軸方向がよく類似しており、同様の性格をもつものと推測される。排水に伴う溝の可能性が考えられる。

S D27 (第28図)

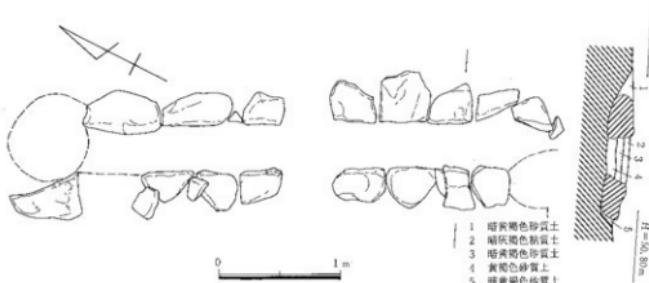
第二次調査区の東側で検出した。他の溝と形態が異なり、30cm～65cmの角礫の平坦面を内側に向けて並べた石組の溝である。規模は遺存長4m、幅33cm～40cm、深さ16cmを測る。溝内には上から順に暗灰褐色粘質土、暗灰褐色砂質土、黄褐色砂質土が堆積している。最下層の黄褐色砂質土は平坦に整えられ非常によくしまっており、この層の上面が床面とみられる。排水溝として機能していたものと考えられる。

S D33

第三次調査区の西側で検出した。20cm～35cm大の角礫を並べて築いた石組の溝である。溝の両端はすでに失われており、遺存長1.39mを測る。幅は内法で42cm、深さは26cmである。

出土遺物

遺物は、S D17、19、21、22の埋土中から出土した。遺存状態はいずれも非常に悪い。S D17から陶磁器の細片、S D19から陶磁器片、土師質土器の皿片、瓦片と不明鉄製品、S D21から陶磁器片、土師質土器片、瓦片、S D22から陶磁器片が出土した。



第28図 S D27 実測図

瓦溜り遺構

第二次調査区の南側に位置し、石垣Ⅲ、Ⅳの背面で検出した。長さ約10m、幅6m前後の範囲にわたって大量の瓦が堆積していた。堆積の厚さは最大35cmを測る。完形の瓦は認められず、すべて破片状態である。瓦は丸瓦と平瓦が主体をなすが、揚羽蝶文や巴文などの軒丸瓦129点、軒平瓦59点が検出された。これらの瓦の中には二次的に焼成を受けたものがわずかに含まれている。これらの瓦の中から中国製の碗（第39図2）、唐津焼の皿（1）、備前系の擂鉢（3）や焼塙壺（4）が出土した。

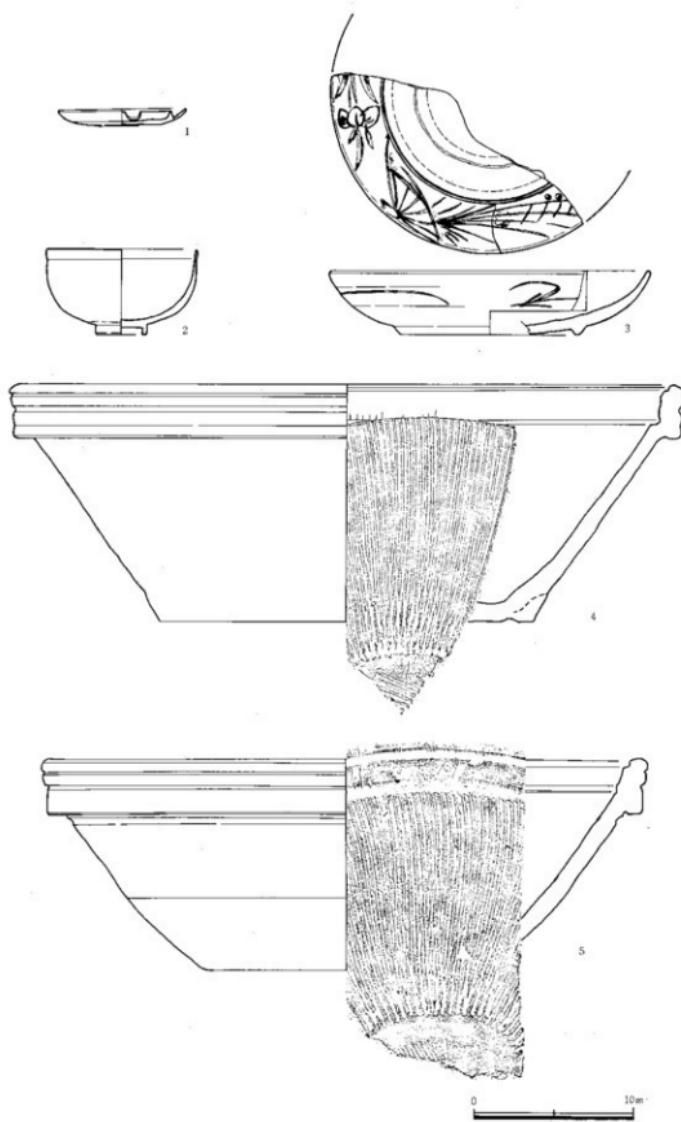
5. 出土遺物

遺物は、陶磁器類、土師質土器、瓦、金属製品、古銭、貝殻等が出土した。全体に遺存状態が悪く、細片の遺物が大半を占めている。

陶磁器類には唐津焼の皿、鉢や、備前の壺、擂鉢の他、中国製、朝鮮半島製とみられる陶磁器類もわずかに含まれている。土師質土器は大半が皿である。瓦は、S K43および瓦溜りから大量に出土した。丸瓦と平瓦が主体であるが、瓦溜りとS B03からは軒丸瓦や軒平瓦が出土している。金属製品には真鍮製の煙管や、鉄釘、鎌、鉛製の玉、簪等があるが、全体に錆化がかなり進んでいて形態不明のものが多い。古銭は「寛永通寶」、「景德元寶」等が出土した。

上層検出遺構出土遺物（第29～32図）

第29図(1～4)、第32図(1)はSK16、第29図(5)はSK04、第30図(1)はSK14、第31図(1、2)はSB02、第32図(2)はSK33から出土した遺物である。



第29図 SK04・SK16出土遺物

第29図(1)は陶質の皿で、内面にU字状の切り込みが3ヶ所認められる。燈明皿とみられる。口縁部1/3、底部は完存する。口径7.8cm、器高1.0cmを測る。底部は糸切りである。胎土は1mm以下の砂粒を含む。内外面茶褐色を呈する。

(2)は1/6が残存する陶器碗である。復元口径9.2cm、底径3.0cm、器高5.4cmを測る。内面と外面の高台脇まで施釉し、高台の内外面は無釉である。施釉部は淡緑色を呈し、内外面に貫入がみられる。胎土は1~2mmの砂粒を含み、乳白色を呈する。

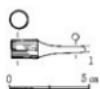
(3)は染付皿で1/3が残存する。復元口径19.6cm、底径11.0cm、器高4.0cmを測る。全面に釉を施し、内面底部は2.2cm幅にわたって蛇ノ目状に釉を剥ぐ。高台端面には砂目が残り、内面の釉剥ぎ部に輪状の砂目跡が認められる。内面は2条の團線を廻らし、花文と扇子文を一部濃筆で染付ける。外面にも染付けが見られる。素地は乳白色を呈する。19世紀前半の所産と思われる。

(4)、(5)は備前系の擂鉢である。(4)は約1/8が残存する。復元口径40.6cm、底径23.2cm、器高14.8cmを測る。口縁部は直線的に立上り、口縁部外面に2条の、内面に1条の沈線をもつ。口縁端部は平坦である。内面は10条単位の櫛描条線を重複させて施し、底部にも5条の櫛描条線が見られる。胎土には1~6mmの砂粒が含まれる。色調は茶褐色ないし暗橙褐色を呈する。(5)は1/4が残存する。復元口径35.8cm、底径17.4cm、器高13.1cmを測る。口縁部の端部は丸味を持ち、外面に2条の沈線が廻る。内面は1条の沈線と段を持つ。内面は8条単位の櫛描条線を重複させて施す。胎土には2mmの砂粒が多く含まれる。全体に茶褐色を呈する。

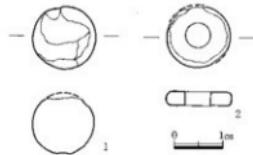
第30図(1)は真鍮製の煙管の吸い口である。表面の銹化がかなり進んでおり、吸い口側の先端がわずかに欠失している。残存長4.9cm、最大径11.5mm、最小径4mmである。羅字の取付部は5.5mm幅で他より若干厚く、外面には継位の線刻を平行に細かく施す。

第31図(1)、(2)はSB02から出土した金属製品である。(1)は鉛製の玉で、ほぼ完存している。径13.5mm、重さ13.5gを測る。(2)はリング状の銅製品である。径13mm、厚さ3mmを測り、中央に径5mmの孔をもつ。重さは1.7gである。

第32図(1)、(2)はほぼ完存する古銭である。径2.3~2.4cmを測る。(1)は「寛永通寶」、(2)は「景德元寶」である。



第30図 SK 14 出土遺物



第31図 SB 02 出土遺物



第32図 SK 16・SK 33 出土遺物

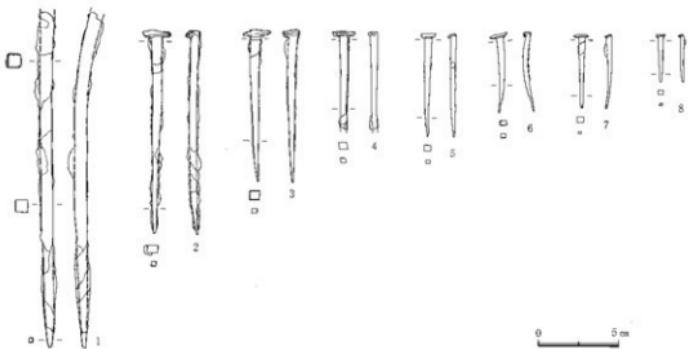
下層検出遺構出土遺物

S B03出土遺物（第33・43図）

焼土中および焼土上層から多数の瓦片と鉄釘が出土した。

鉄釘は総数90点あまりを数える。鉄釘の大半は錆化が著しいが、比較的良好な遺存状態を示すものもあり、これらを図化した。

鉄釘はいずれも角釘で、釘身断面はいずれも方形を呈する。（1）は頭部を欠くが、遺存長21.1cmを測る。釘身断面はほぼ正方形を呈し、厚さ8.0mmを測る。S B03出土の鉄釘の中で最長である。（2、3）は長さ9.55～12.7cm、釘身上位の厚さ5.0～6.5mmである。（5～7）は長さ4.65～6.45cm、釘身の厚さ2.8～4.5mmを測り、出土した釘には同寸法のものが多い。（8）は出土した釘の中で最小の部類に入り、長さ3.0cm、釘身上位の厚さ2.7～3.2mmを測る。



第33図 S B03 出土遺物

石段遺構出土遺物（第36図）

石段の東壁石垣の裏込めから出土した遺物である。

（1）は中国製の白磁碗である。口縁部1/8が残存し、復元口径は11.0cmである。灰白色の素地に透明釉を施す。（2）は碗の破片で、口縁部1/14が残存する。口径は16.7cm前後が推定される。口縁部は緩く外反し、胴部上半ロクロ成形による凹凸が認められる。素地は淡灰色を呈し、黒粒物を多く含む。全体に淡緑灰色を呈する。朝鮮半島製陶器とみられる。（3）はソフトウタイプの青花大皿の破片とみられる。素地は褐色を呈する。

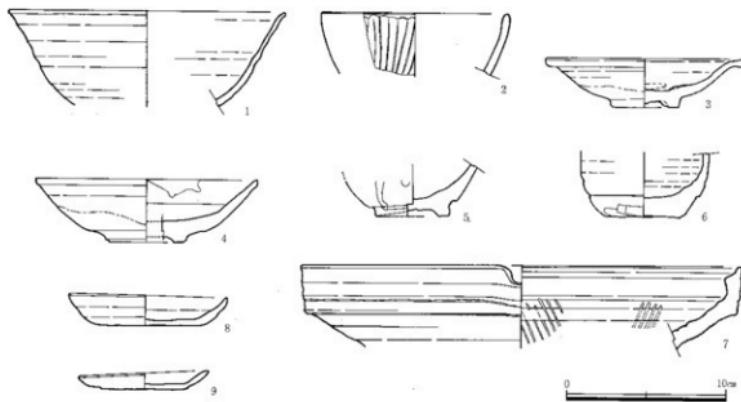
石垣01出土遺物（第34・35図）

石垣01の前面埋土中から検出した遺物である。

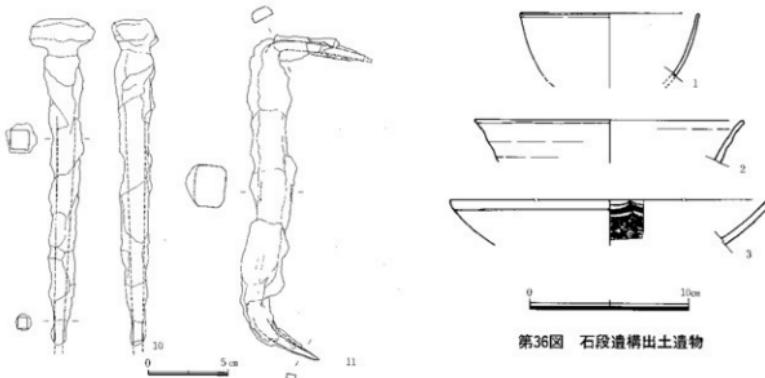
（1）は朝鮮半島製陶器の碗とみられる。口縁部～体部の1/15が残存しており、口径17.1cmが推定される。口縁部は緩く外反し、胴部上半にロクロ成形による凹凸がみられる。素地には黒粒物が多く含まれており、淡灰色を呈する。全体に淡緑灰色を呈する。第36図2と類似している。（2）は中国製の青磁碗とみられる。口縁部1/10が残存しており、口径11.5cm前後が推定される。乳白色の素地に花文を陰刻し、淡緑色の釉を施す。（3）は口縁部が外反する唐津焼の皿である。口縁部1/4、底部は完存する。復元口径12.2cm、底径4.2cm、器高3.1cmを測る。内面底部3ヶ所と高台内2ヶ所に砂目の痕跡が顯著に残る。内面および外面高台脇まで釉を施し、淡緑灰色を呈する。胎土は1.0mm前後の砂粒を含む。（4）は口縁部1/4、底部1/3が残存する。復元口径13.6cm、底径5.0cm、器高3.9cmを測る。内面中位に稜をもち、高

台は削り出し高台である。胎土は2.0mm前後の砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。内面と外面上半に釉を施し淡緑灰色を呈するが、口縁部内面の一部に釉溜りが認められる。(5)は鉄釉の碗とみられる。底部が完存し、底径4.5cmを測る。内面に黒色の釉が認められる。胎土は1.0mm前後の砂粒を含み、茶褐色を呈する。(6)は備前の小壺である。底部1/2が残存し、復元底径4.6cmを測る。内外面にヨコナデ成形による凹凸がみられ、底部は糸切りである。全体に茶褐色を呈する。胎土には1.0~2.0mm前後の砂粒が多く含まれる。(7)は備前の擂鉢である。口縁部の1/6が残存しており、復元口径26.9cmを測る。口縁部は直立し、罐部は内傾する凹を持つ。口縁部外面は茶褐色、他内外面は橙色にちかい色調を呈する。胎土は1.0mm前後の砂粒を含む。

(8)、(9)は土師質皿である。(8)は約2/3残存しており、口径9.7cm、底径6.3cm、器高2.1cmを測る。内面はヨコナデのちナデ、外面はヨコナデ、底部は糸切りのちナデ調整を行なう。淡褐色を呈する。



第34図 石垣 01 出土遺物(1)



第35図 石垣 01 出土遺物(2)

(9)はいびつな完形の皿である。口径7.5~8.0cm、底径5.1~6.6cm、器高1.2cmを測る。内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、底部はナデ調整を行なう。全体に淡橙褐色を呈するが、口縁端部の一部に煤の付着がみられる。

第35図(10、11)は大型の鉄釘と鎧である。(10)は尖端部を欠失しており、残存長は20.4cmである。釘身断面はほぼ正方形を呈し、上位で幅11mmを測る。尖端側に木質がわずかに観察される。錆化が著しく頭部の形態は判然としない。(11)は長さ20cmを測る。断面は長方形を呈し、中央部での幅は19×25mmである。両尖端部に木質が顯著に認められる。

土坑出土遺物

第38図(1、3~5)はSK10、(2)はSK08、(6)はSK07、(7)はSK06、また、第37図(1)はSK07から出土した遺物である。

第38図(1)は皿の底部である。底径5.2cmを測り、底面に糸切り痕が見られる。内外面底部に4ヶ所の砂目跡が残る。底部を外面を除き釉が施され、施釉部分は灰褐色を呈する。胎土は1.0mm以下のか細かい砂粒を含み、茶褐色を呈する。

(2)は陶器碗で口縁部1/7、高台部1/3が残存する。口縁部は外反し、腰部が外へ張り出す。復元口径10.2cm、底径4.1cm、器高7.0cmを測る。内面と外面の高台近くまで淡乳色の釉が施され、高台内外面は無釉である。全体に淡乳黄色を呈する。胎土は1.0mm前後の砂粒を含み、淡黄色を呈する。

(3)は陶器碗で高台部完存、口縁部~胴部は1/3が残存する。腰部が外へ張り出し、口縁部はわずかに外反する。外面中位に2条の沈線が廻る。口径11.4cm、底径5.2cm、器高7.4cmを測る。高台部の内外面を除く全面に施釉し、淡乳黄色を呈する。胎土は1.0mm前後の砂粒を含む。(4)は2/3が残存する。口径9.6cm、底径5.1cm、器高7.2cmを測る。高台部内外面を除く全面に釉を施し、全体に淡黄褐色を呈する。胎土には1.0mm前後の砂粒が多く含まれる。

(5)は口縁部が欠失し、底部のみの完存である。赤褐色の胎土に乳白色の釉をかけ、その上から透明釉を施している。高台端面は釉を剥ぎ取る。

(6)は唐津焼の鉢である。底部のみ完存し、底径9.5cmを測る。内面底部の4ヶ所に砂目跡が残る。内面および外面の高台脇まで釉を施し、全体に淡黄緑色を呈する。胎土は淡黄褐色を呈し、2.0mm前後の砂粒が多く含まれる。

(7)はいびつな完形の盃である。口径5.4cm、底径2.6cm、器高3.3cmを測る。高台の内外面を除く全面に釉を施し、淡乳灰色を呈する。胎土は1.0~2.0mmの砂粒を多く含む。

第37図(1)はSK07から出土した古銭である。1/2が欠失するが「永」「寶」の文字が読み取れる。瓦溜り出土遺物(第39図)

(1)は唐津焼の皿である。口縁部1/10、底部1/2が残存する。口縁部はわずかに外反し、口縁内端部に溝状の窪みが一周する。口径13.2cm、底径4.43cm、器高2.8cmを測る。見込と高台部に砂目跡が残る。高台上位から内外面に釉を施す。外面に釉溜りが観察されるが、全体に緑灰色を呈する。胎土は比較的緻密で0.5mm以下の砂粒をわずかに含む。

(2)は中国製のソフトウタイプの皿とみられる。底部4/5の残存で、底径7.6cmを測る。内面に花文を染め付け、釉を厚く施している。全体に乳灰色を呈する。胎土は淡褐色で軟質である。

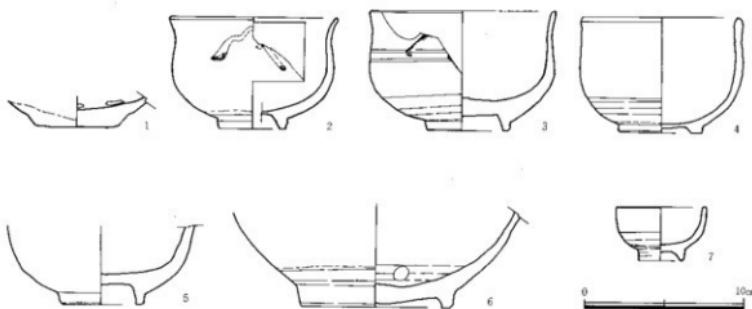
(3)は擂鉢である。口縁部1/16が残存し、推定口径26.4cmを測る。口縁部外面に2条の沈線を廻らし、口縁端部は内傾する面をもつ。内面は1.6cm幅に5条の彫刻条線が認められる。橙色ないしは褐灰色を呈する。胎土は1.0~3.0mmの砂粒を多く含む。

(4)は焼塩壺である。約2/3が残存し、器高10.5cm、口径6.7cm、胴部径7.4

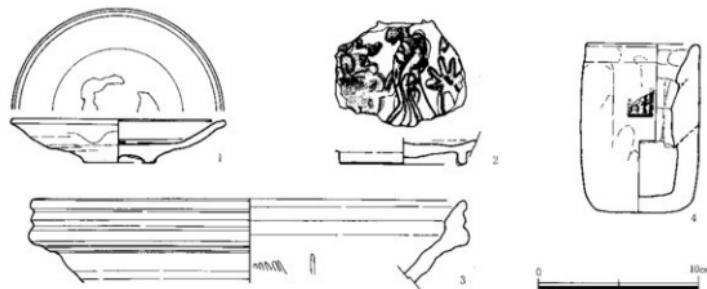


第37図
SK07出土遺物

cmを測る。明瞭な頭部は認められず筒型をなす。全体に指成形のちナデ調整をされるが、外面に指頭圧痕が顕著に残る。外面は橙色、内面は赤橙色を呈し二次焼成を受けた痕跡が認められる。胎土は5.0~6.0mmの砂粒を多く含む。口縁部下位の外面に長方形の刻印が認められるが約2/3が失われており内容ははっきりしない。



第38図 SK06・SK07・SK08・SK10出土遺物



第39図 瓦窯出土遺物

造構外出土遺物（第40~42図）

陶磁器（皿、碗、鉢）、金属製品（釘、鎌、煙管、簪）、古銭、硯、瓦類等が出土した。

陶磁器（第40図1~9）

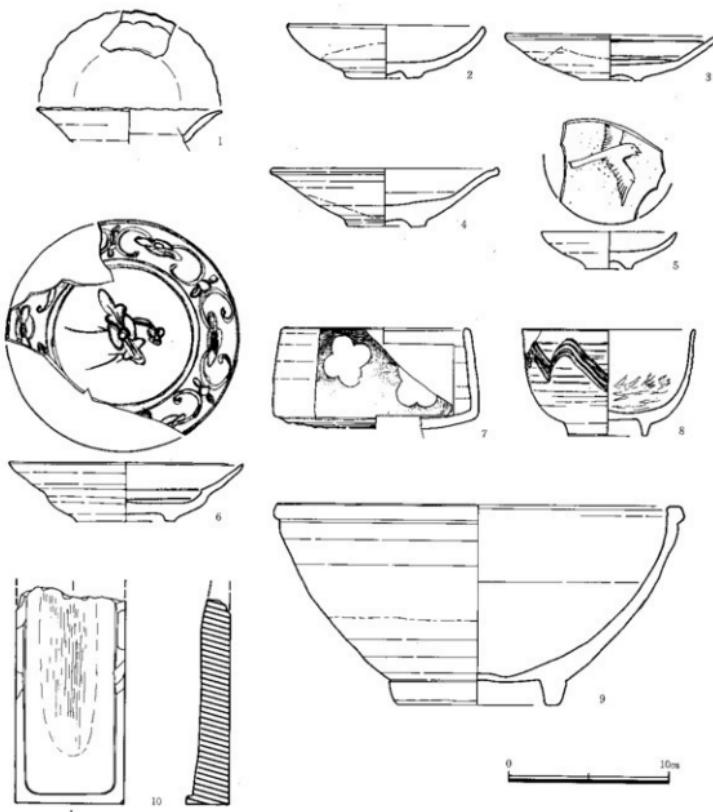
皿（1~6）

(1)は中国製の青磁皿の破片である。輪花状の口縁をもち、内面に陰刻によって花弁を表現する。釉は淡い青緑色である。復元口径11.4cmを測る。素地は乳灰色を呈する。(2)は唐津焼の皿である。約2/3が残存し、口径12.0cm、底径4.9cm、器高3.5cmを測る。体部は内湾ぎみに立ち上がる。外面上半から内面に釉を施し、全体に淡緑色を呈する。胎土は淡灰色を呈し、1.0~3.0mmの砂粒が含まれる。(3)、(4)唐津焼の皿とみられる。(3)は2/3が残存する。復元口径12.8cm、底径3.8cm、器高2.8cmを測る。高台の2カ所に砂目跡、端面にわずかに糸切り痕が残る。内面は鉄釉で3条の園線を施した後、外面上半と内面に施釉。施釉部分は淡緑色を呈する。胎土は1.0~2.0mmの砂粒を若干含み、淡灰褐色を呈する。(4)は底部と口縁部1/3が残存する。復元口径14.0cm、底径4.7cm、器高3.6cmを測る。高台外面の3カ

所に砂目跡、端面に糸切り痕が残る。釉を内面と高台部上位まで施し、全体に淡緑灰色を呈する。外面施釉部に乳黄色の釉をまだらに施し模様化している。胎土は1.0~2.0mmの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。(5)は伊万里焼の染付皿である。口縁部1/5と底部が残存しており、復元口径8.4cm、底径2.8cm、器高2.3cmを測る。高台端面に輪状の砂目跡が残る。全面に釉を施し、乳灰色を呈する。内面は、一羽の小鳥を染付けた後全体を淡藍色で吹墨している。(6)は磁器皿で口縁部1/2と底部が残存する。口径14.5cm、底径6.0cm、器高3.7cm。内面に3条の圓線を廻らし、草花文を濃筆で描いた染付皿である。全面に透明度の強い釉を施す。高台部に砂目跡が残る。

碗(7、8)

(7)は高台部欠失し、口縁部1/12と体部1/4が残存する。体部は腰部が大きく張り出し、内傾気味に直線的に立ち上がる。外面に花弁文様を施す。内面から体部に黒釉、文様部分に透明釉を施す。胎土は淡灰色を呈し、2.0~3.0mmの砂粒を多く含む。(8)は口縁部1/6と底部が残存する。復元口径10.6cm、



第40図 遺構外出土遺物(1)

底径4.8cm、器高6.7cmである。高台端面に輪状の砂目跡が残る。体部外面は乳白色の釉を周回させ、その後棒状工具で波状文を施す。内面も同種の釉を用いる。仕上げは高台端面を除く全面に透明釉を施す。精緻な胎土で暗紫褐色を呈する。

鉢 (9)

口縁部1/4と底部1/2が残存する。復元口径23.7cm、底径10.0cm、器高12.5cmを測る。口縁部は外側に肥厚し、端部は平坦である。内面下半と外面中位には乳色の釉を周回させて施す。釉は外面上半から内面全体に施されており、暗茶灰色を呈する。胎土は赤褐色を呈し、1.0~3.0mmの砂粒を含む。

石製品 (第40図10)

(10)は硯である。海部が欠失する。残存長13.5cm、幅6.7cm、厚さ2.7cmである。陸部は使用が著しく凹面をなす。材質は流紋岩である。

金属製品 (第41図11~17)

(11)は真鍮製の平打簪である。耳搔部を欠失し、足はわずかに左へ湾曲するが、遺存状態は比較的良好である。残存長19.2cmを測る。鏡部分は紅葉と文字で飾られる。字体は抽象的で特定し難いが「寿」「夏」「度」等の可能性がある。

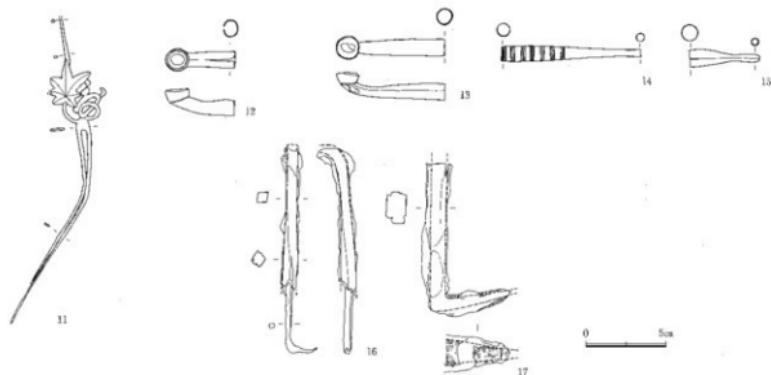
煙管 (12~15)

煙管はいずれも真鍮製である。(12、13)は雁首部、(14、15)は吸い口であるが、表面の銹化がかなり進んでいる。(12)は完存し、長さ4.3cm、火皿口径1.4cm、火皿底部孔径は0.9cmである。接合された部分がわずかに分離している。(13)は長さ6.8cm。火皿口径1.4cm、羅字の取付け部分の口径1.1cmを測る。火皿底部の一部が破損する。(14)はほぼ完存する。現存長8.75cm、羅字の取付け部分の口径0.95cm、吸い口部分の口径0.45cmである。羅字側胴部には2.5mm幅に平行な6条の線刻を7ヶ所に廻らし装飾している。(15)は完存する。長さ4.35cm、羅字の取付け部分の口径1.05cm吸い口部分の口径0.5cmである。接合部がわずかに分離する。

鉄鎌 (16、17)

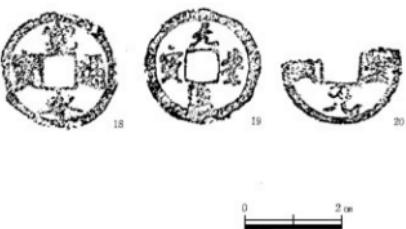
(16、17)共にかなり銹化が進んでいる。(16)は残存長13cm、(17)は長14cmである。断面はいずれも方形を呈する。尖端部に木質が顯著に認められる。

古銭 (第42図18~20)



第41図 遺構外出土遺物(2)

(18、19)は完存する。(18)は「寛永通寶」、(19)は「元豊通寶」である。(20)は1/2が欠失するが、「型」「元」の文字が読み取れる。径はいずれも24mm前後である。



第42図 遺構外出土遺物(3)

瓦(第43図)

主に瓦溜りとSK43から出土した。大半は丸瓦、平瓦で占められるが、破片ながら軒丸瓦、軒平瓦も比較的多く含まれている。軒丸瓦には大きく揚羽蝶文と巴文の2種類がある。軒平瓦の文様は多種にわたる。このほかに鬼瓦の一部と思われる破片が出土している。

軒丸瓦

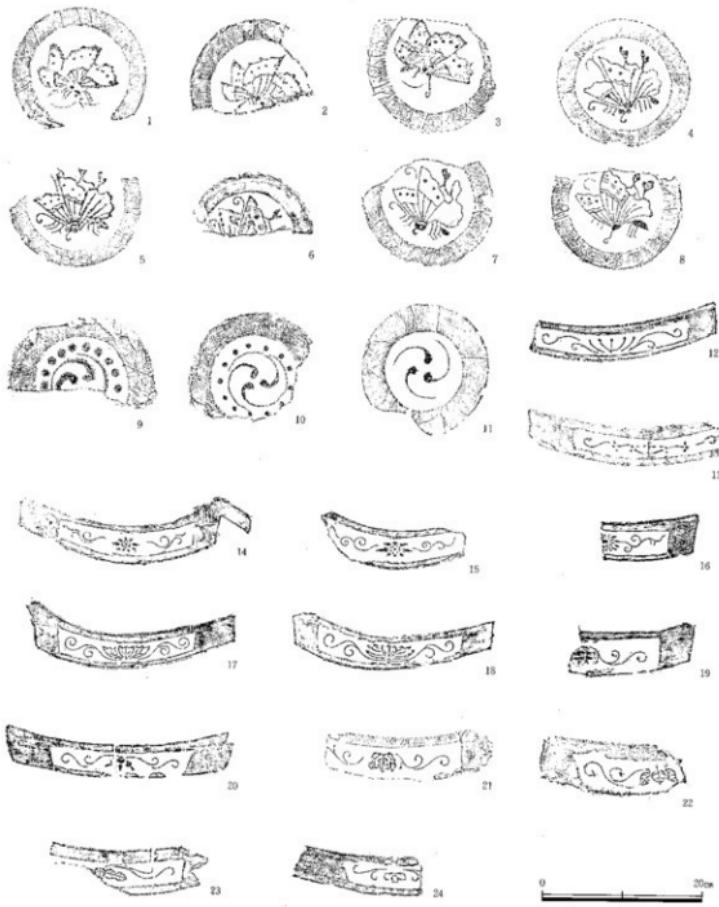
軒丸瓦には揚羽蝶文の(1~8)と、巴文をもつ(9~11)がある。外縁は全て同型で直立素文縁をなす。(1)、(2)、(5)、(6)は瓦溜りから、(3)、(7)、(8)、(10)はSB03から、(4)、(9)、(11)は遺構外から出土した。

揚羽蝶文(1~8)は、蝶の顔の向きから4種類に大別できる。(1)、(2)は右正面、(3)は右横、(4)、(5)、(7)は左正面、(8)は左横を向く。(6)は瓦当半分を欠失するが、翅の向きから左を向くものと思われる。翅の斑点は珠文で表現しており、形態は(1~3)、(4~8)が類似する。(4)、(5)は口管は短く、双眼を小さく陰刻している。全体に丁寧で、細かい表現がなされている。(8)は頭部、胴部を強く太長に表現する。(7)にも(8)同様の傾向がみられ、双眼、胴部を強く表現している。瓦当の外径は(6)を除いて16.1~16.8cm、内区径は11.8~12.2cmである。(6)は外径15.4cm、内区径9.8cmを測る。

巴文(9~11)はいずれも左巻きの三ッ巴文をもち、(9)、(10)は珠文を配する。(9)は瓦当部下半を欠くが、胴部が残存しており全長34cmを測る。瓦当部の外径18cm、内区径は11.7cmである。外縁は幅3cm前後を測り、やや内傾する。外縁端から21.5cmに直径1.2cmの釘孔を凸面から穿つ。胴部内面に布目痕が残る。(10)は13個の珠文を配する。瓦当部の外径16.6cm、内区径は11.1cmを測る。(11)は外径15.8cm、内区径9.8cmを測る。外径に比べ外縁幅が広く、内区幅が非常に狭い。巴の尾部は太く短く次に巴と離れている。

軒平瓦

(12)、(13)、(18~20)、(22~24)は瓦溜りから、(21)はSB03から、(14~17)は遺構外から出土した。瓦当面に見られる唐草文は左右に2葉ずつ展開する形の均整唐草文である。(14)、(15)、(16)の様に蕨手の先端に子葉の付くものもある。中心飾りは各々異なるが、(12)は棒状の蕊を表現し、(19~22)は木の葉文を表している。(14~18)は花文と思われる。(17)、(18)は酷似しているが、左右の葉脈に違いが見られる。(14)、(15)、(16)は同類とみられるが、華弁の枚数がそれぞれ異なる。(14)と(16)には側縁に刻印がみられる。(14)の刻印は「作」と読み取れるが、(16)については二文字が確認されるが陰影が薄く判然としない。



第43図 S B 03・瓦溜り・造構外出土瓦

第3表 土坑一覧表

遺構名	法量(cm)			平面形	断面形	主軸方向	出土遺物
	長さ	幅	深さ				
SK-01	(76)	58	16	楕円形	逆台形	N-44°-E	
SK-02	158	100	7	楕円形	逆台形	N-46°-E	
SK-03	124	82	17.5	隅丸長方形	逆台形	N-49°-E	
SK-04	268	240	17	不整円形	逆台形	—	陶磁器 鉄製品 銅製品
SK-05	(143)	(80)	18	楕円形	逆台形	N-22°-E	陶磁器 瓦貝がら
SK-06	79	70	27	円形	逆台形	—	陶磁器(盃) 銅製品
SK-07	225	190	50	楕円形	皿状	N-29°-W	陶磁器(鉢) 瓦 鉄製品 銅製品 古銭
SK-08	190	141	20	楕円形	皿状	N-57°-E	陶磁器(碗) 銅製品
SK-09	140	136	10	円形	皿状	—	陶磁器
SK-10	85	—	80	—	—	—	陶磁器(碗、皿)
SK-11	174	144	30	楕円形	逆台形	N-59°-E	瓦
SK-12	117	80	58	隅丸長方形	逆台形	N-40°-W	陶磁器
SK-13	(117)	73	46	隅丸長方形	逆台形	N-40°-W	陶磁器(碗)
SK-14	278	261	48	円形	逆台形	—	陶磁器 瓦 煙管
SK-15	(117)	106	14	—	皿状	—	陶磁器 瓦
SK-16	48	46	24	円形	逆台形	—	陶磁器(碗、皿、擂鉢) 土師質土器 古銭
SK-17	69	62	24	円形	逆台形	—	陶磁器 瓦
SK-18	(126)	54	8	隅丸長方形	皿状	N-47°-W	陶磁器(碗) 土師質土器
SK-19	77	72	15	円形	逆台形	—	
SK-20	110	103	53	円形	逆台形	—	陶磁器 土師質土器
SK-21	101	95	8	円形	皿状	—	陶磁器 土師質土器(皿)
SK-22	170	—	22	円形	皿状	—	
SK-23	137	—	9	円形	皿状	—	
SK-24	140	100	6	楕円形	皿状	N-86°-W	
SK-25	108	90	20	楕円形	逆台形	N-68°-E	陶磁器
SK-26	121	—	31	—	逆台形	—	
SK-27	110	78	29	楕円形	逆台形	N-19°-W	
SK-28	116	72	14	楕円形	皿状	N-42°-E	
SK-29	104	87	45	楕円形	逆台形	N-34°-W	陶磁器 鉄製品
SK-30	160	61	11	隅丸長方形	皿状	N-49°-E	
SK-31	(100)	—	8	—	—	—	
SK-32	68	—	15	—	皿状	—	
SK-33	67	—	46	—	逆台形	—	陶磁器 土師質土器 古銭
SK-34	149	142	23	円形	皿状	—	陶磁器 鉄製品
SK-35	(230)	(155)	52	—	U字形	—	陶磁器 煙管
SK-36	275	133	11	隅丸長方形	皿状	N-39°-W	土師質土器
SK-37	180	65	25	長楕円形	逆台形	N-50°-E	陶磁器
SK-38	70	66	8	円形	皿状	—	
SK-39	175	140	55	楕円形	逆台形	N-43°-W	陶磁器 土師質土器 瓦 鉄製品
SK-40	96	86	38	不整円形	逆台形	N-30°-W	陶磁器
SK-41	210	150	9	隅丸長方形	皿状	N-42°-W	
SK-42	226	208	97	円形	逆台形	—	陶磁器
SK-43	154	150	30	円形	皿状	—	陶磁器 瓦 鉄製品(釘)
SK-44	309	223	66	楕円形	逆台形	N-52°-E	陶磁器 瓦 鉄製品(釘)
SK-45	(102)	—	19	—	—	—	
SK-46	225	88	17	隅丸長方形	逆台形	N-33°-W	
SK-47	130	71	14	楕円形	逆台形	N-60°-E	
SK-48	265	175	61	楕円形	逆台形	N-42°-W	
SK-49	190	120	74	隅丸長方形	逆台形	N-49°-W	陶磁器 瓦 鉄製品
SK-50	(264)	186	117	隅丸長方形	逆台形	N-39°-W	陶磁器 瓦
SK-51	120	46	47	楕円形	逆台形	N-38°-W	銅製品
SK-52	102	81	25	楕円形	皿状	N-29°-E	

() 値は検出長

第4表 溝一覧表

遺構名	法量(cm)			断面形	主軸方向	出土遺物
	長さ	幅	深さ			
SD-01	304	58	11	逆台形	N-49°-E	
SD-02	(420)	50	7	逆台形	N-44°-E	陶磁器
SD-03	(1070)	49	7	逆台形	N-47°-E	陶磁器 土師質土器
SD-04	(196)	40	6	逆台形	N-48°-W	陶磁器
SD-05	(194)	48	4	逆台形	N-47°-W	
SD-06	(190)	36	5	逆台形	N-42°-W	陶磁器
SD-07	(180)	50	11	逆台形	N-43°-W	
SD-08	(496)	48	8	皿状	N-57°-E	
SD-09	(1650)	60	25	逆台形	N-46°-E	陶磁器 瓦
SD-10	285	60	19	皿状	N-35°-W	陶磁器
SD-11	(335)	58	8	皿状	N-44°-W	陶磁器 瓦
SD-12	(886)	65	4	皿状	N-47°-E	陶磁器 土師質土器
SD-13	(770)	56	10	逆台形	N-50°-E	陶磁器 土師質土器
SD-14	(573)	60	11	逆台形	N-46°-E	
SD-15	(374)	40	7	皿状	N-42°-E	
SD-16	1092	49	12	逆台形	N-47°-E	
SD-17	320	55	16	皿状	N-46°-E	陶磁器
SD-18	(1660)	55	12	逆台形	N-47°-E	
SD-19	(458)	68	11	逆台形	N-44°-E	陶磁器 土師質土器 瓦 鉄製品
SD-20	211	60	16	逆台形	N-53°-E	
SD-21	(970)	60	15	逆台形	N-46°-E	陶磁器 土師質土器 瓦
SD-22	(880)	68	15	逆台形	N-49°-E	陶磁器
SD-23	(540)	69	15	逆台形	N-48°-E	
SD-24	232	57	17	逆台形	N-50°-E	
SD-25	(115)	35	6	皿状	N-18°-W	
SD-26	205	45	7	逆台形	N-49°-E	
SD-27	(400)	40	16	逆台形	N-27°-W	
SD-28	(467)	73	19	皿状	N-45°-E	
SD-29	(434)	64	24	皿状	N-48°-E	
SD-30	(204)	74	33	逆台形	N-43°-E	
SD-31	(345)	52	12	皿状	N-46°-E	
SD-32	(430)	43	19	皿状	N-67°-E	
SD-33	(139)	42	26	逆台形	N-43°-E	

() 値は検出長

第3節まとめ

鳥取城は、鳥取市街地の北東に位置する久松山山頂を本丸とし、山麓裾部に二ノ丸、三ノ丸等の城郭を築いた、中世山城の様相を呈する城である。現在は石垣と堀が遺存しているにすぎないが、石垣からは当時の偉容を偲ぶことができる。石垣は、明治以降荒廃し旧状を失いつつあったが、それにもまして、昭和18年に発生した鳥取大震災の影響は著しく、崩落が各所に及んだ。石垣の復元修理は、史跡指定後から本格的に実施され、現在その旧状を取り戻しつつある。

今回の発掘調査は、二ノ丸東側の一段高い区画に構築されている、天球丸の石垣保存修理事業に伴って実施されたものである。調査主体は、鳥取市教育委員会である。発掘調査は、石垣の解体復元工事の影響範囲を対象とし、平成2年、3年、7年の三次に分けて実施された。調査総面積は約1395m²である。調査の結果、建物跡や、天球丸における初段階の遺構と考えられる石段、石垣が検出され、天球丸の変遷を知る貴重な資料を得ることができた。以下、検出された遺構、遺物、調査結果からみた天球丸の変遷についてその概略を記す。

遺構

遺構検出面は大きく上層と下層に分かれる。上層から検出した遺構には、建物跡2、ピット12、土坑28、溝16、列石3等があるが、近代の搅乱をかなり受けているようである。下層からは建物跡5、石段遺構1、石垣2、土坑24、溝17と、瓦溜り等の遺構が検出された。

土坑は、主に円形か橢円形の平面形を呈し、長径1.0~2.0m、短径0.5~1.0m規模の土坑が主体で、径2.0mを超えるような比較的大型のものは少い。深さも全体に浅く、15~50cm前後を測る土坑が主体である。土坑の用途、性格については特定し難いが、多量の瓦や石などが埋まっている、廐棄坑的な土坑もみられる。

溝は、幅50cm前後、深さ10~20cmあまりの浅い溝が大半である。溝の主軸には規則性がみられ、天球丸を構成する前面石垣に対してほぼ直交して延びるか、あるいは平行に向く。排水に伴う溝の可能性が考えられる。

建物跡には、塀か柵跡と考えられるSB01や、掘立柱建物とみられるSB04、柱穴の規則的配列がみられるSB05、06がある。また、第三次調査区の上層と下層からは、大型の建物であるSB02、03が検出された。

SB02は天球丸の南東に位置し、桁行9~10間、梁間4間の規模をもつ建物である。「鳥取城御住向之図」(年代不詳)には、SB02の検出位置にあたる天球丸南東部に建物が描かれている。この絵図内には「御藏行拾間張間四間」の記載がみられる。位置や規模などから推察して、SB02は絵図に描かれている「蔵」に該当するものと考えられる。万延元年(1860年)とされる鳥取城絵図に同様の建物をみるとことはできず、建物の時期は、江戸終末期と推定される。

SB03は、天球丸の南東端に位置し、焼失した痕跡が顕著に認められる建物跡である。SB02が上位に位置することなどから、建物全体を検出することはできなかったが、梁間4間、桁行12間の規模をもつ建物と推定される。鳥取城絵図(延宝8年)には、SB03と同位置に三階櫓が描かれている。この三階櫓は焼失したという記録があり、調査で確認した焼失痕跡と一致している。絵図から想定される規模や位置、また、焼失した痕跡等から推察して、古図にみられる三階櫓に該当するものと思われる。

今回の発掘調査では、埋没していた石段遺構や、石垣(石垣01、02)が新たに確認され、天球丸において曲輪の改変、拡張が行われていたことを裏づける資料となった。

石段遺構は、天球丸の北西側に位置し、現存する石垣Iの背面約11.5mで検出された。主軸は、石垣Iとほぼ同一方向にとる。長さ7.1m、幅4.3m、高さ4.4mを測る比較的急傾斜の石段である。段を構成する石材は大半が失われていたが、10~11段の段数が推定される。石段の正面石垣には、幅1mを超える大型の石材が多く使用されている。石段の東壁面を構成する石垣は、裏込めを行なって築かれてお

り、石段東壁の背後側に曲輪の平坦部が形成されていたことが窺われる。この裏込めからは16世紀後半代に比定される中国製・朝鮮半島製の陶磁器が出土している。

石垣01は、石段遺構の西側約5.5mに位置する。石段正面石垣の北西角部から、ほぼ直交する状態で南西方向に接ぎ足されており、現存する石垣Ⅱと概ね平行関係にある。石垣には、こぶりの石材が多く使用されており、全体に稚な感じのする石垣である。明らかに石段遺構より新段階の遺構である。この石垣の前面埋土からは中国製・朝鮮半島製の陶磁器や、17世紀前半代とみられる唐津焼、備前焼等の陶磁器が検出された。

石垣02は、現存する石垣Ⅲの約18m背後で検出された。石垣の本体はすでに失われていたが、裏込めされた栗石の遺存状況と、断面観察からその存在が確認された。石垣の主軸は、石垣I、Ⅲ、Vと概ね同一方向をとる。天球丸における古段階の石垣と考えられる。

次に、石段遺構と石垣01、02の関係についてみることにする。石段遺構と石垣01の関係では、石垣01が石段遺構より後出である。石段遺構の埋土に、石垣01の裏込めが認められることからも明らかである。また、石垣01の背後には大量の盛土が行なわれており、石段遺構が廃絶した後、あるいは廃絶と同時に石垣を構築し、曲輪の拡張が行なわれたことが推察される。

石段遺構と石垣02の関係では、石段遺構と石垣02の基底部の標高が共に46m前後である点に注目される。また、石垣02を北西側に延長すると、石段の東壁面の延長線とほぼ直交する関係がみられる。石段遺構と石垣02によって曲輪が形成されていた可能性が考えられる。断面観察では、石垣02の天端は、現存する石垣Ⅲの上端から約18mの位置で捉えることができ、曲輪を復元すると、現存の石垣に対して概ね相似形となる。石段遺構と石垣02によって、古段階の曲輪が構築されていた可能性が想定される。

出土遺物

遺物には瓦、陶磁器類、土師質土器、金属製品、古銭等がある。

瓦は、瓦溜りと土坑を主に、遺構外からも多量に出土した。全体に遺存状態は非常に悪く、大半が破片である。瓦のほとんどは丸瓦と平瓦で占められるが、軒丸瓦や軒平瓦もわずかにみられる。鳥取城から出土した軒丸瓦には、池田家家紋の揚羽蝶文の他に三ツ巴文、三ツ葉葵文、三ツ柏文、茗荷文が知られているが、今回の調査では揚羽蝶文と巴文の2種類が出土している。量的には揚羽蝶文が圧倒的に多い。軒平瓦の文様は多種にわたる。

陶磁器類は、唐津、備前、伊万里焼の皿、碗、鉢、擂鉢、壺や、中国製・朝鮮半島製の輸入陶磁器が出土した。時期的には16世紀後半代から19世紀代のものがみられるが、16世紀前半代の所産とみられ中國青磁（第40図1、第34図2）等が出土している。中国製陶磁器には、この他、ソフトウタイプの（第36図3、第39図2）、白磁（石段第36図）や、青花皿、碗とみられる破片が出土している。朝鮮半島製陶器は、石段遺構と石垣01から2点（第34図1、第36図2）出土している。全体に淡緑灰色を呈し、黒粒物を多く含む胎土が特徴的である。唐津焼には皿、鉢や絵唐津の破片がみられる。石垣01の埋土、瓦溜りや包含層の下層から出土した皿は、主に淡緑色を呈し、目跡が顕著に認められる。備前焼は擂鉢が主であるが、石垣01の埋土からは小壺が出土している。

土師質土器は大半が皿である。また、瓦溜りからは焼塙壺（第39図4）が出土している。金属製品には鉄製の釘や鍵、真鍮製とみられる簪、鐘管、鉛製の玉がある。鉄釘はいずれも断面方形を呈する角釘である。SB03の焼土中と、石垣01の埋土から多数検出されており、二次焼成を受けた痕跡が認められるものが多くみられる。長さ20cmを超える大型の釘もわずかに出土しているが、5.0～9.0cm大の釘が主である。古銭は6点出土しており、「寛永通寶」「元豊通寶」「景德元寶」がある。

天球丸の変遷

まず、天球丸における初段階の遺構として、石段遺構と石垣02が考えられる。石段遺構と石垣02によって曲輪が形成されていた可能性を前述したが、いずれにせよ、共に天球丸における古段階の遺構である

ことは明らかである。石段遺構の時期は明確に特定できないが、石段の裏込めから出土した陶器類と、石段遺構より後出の石垣01埋土から検出された唐津、備前等の遺物から16世紀末～17世紀前葉の時期が推定される。

次に、石垣01が構築された時期が天球丸における第2段階であろう。石垣01によって形成される曲輪の範囲については明確ではないが、北西側では、初段階の石段遺構から北西側に約5mの拡張が行われているようである。ただ、石垣の構築状況には、小型の石材を多く使用し、全体に雑な石積状況がみられるうことなどから、大がかりな改変はなかったものと推察される。

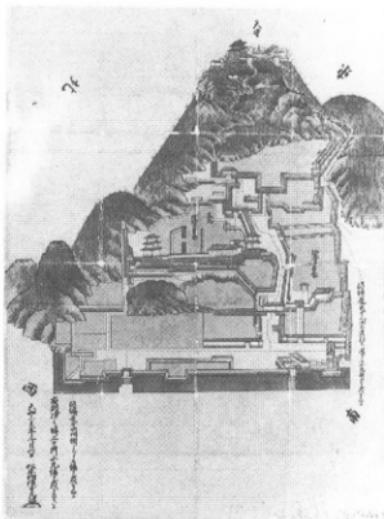
石垣01が廃絶後、小規模な改変が行なわれた可能性はあるが、概ね現在みられる曲輪形態に大きく拡張が行なわれたものと思われる。具体的な拡張時期は特定できないが、天和三年（1683年）とされる「鳥取城破損修復図」（第44図）からは、現在の曲輪に近い状態が見てとれる。この段階には曲輪の拡張がすでに完了していたものと思われる。天球丸の改変は、17世紀代の比較的短期間に数回にわたって行われ、天和三年までには現在にみる曲輪形態がほぼ完成していたことが窺われる。

最後に、今回の調査で検出した遺構面についてみると、下層から検出した遺構には、初段階から現在の曲輪形態に拡張されるまでの遺構と、拡張後の遺構が混在しているものと思われる。各遺構がどの段階に伴うかは特定し難いが、復元して得られる石垣02の天端より南西側（第3段階の拡張部）に位置するSK36～41、SK46～51、SD16～18、SD20～24や、SB04などは天球丸が大きく拡張された後の遺構とみられる。また、第三次調査区の下層で検出したSB03は、前述したように、天球丸に構築されていた三階櫓に該当するものと考えられる。この三階櫓は、天和三年の絵図にはすでに描かれており、それ以前の築造であることが分かる。また、三階櫓について、「鳥府志」には享保五年（1720年）の火事で焼失し、その後再建されなかつとの旨の記述などもみられ、三階櫓は享保五年の火事によって消滅したもの推察される。下層検出遺構は概ね17世紀代を中心とし、三階櫓が機能していた時期の遺構と考えられる。上層検出遺構は、SB03焼失後の18世紀～19世紀代の遺構とみられ、SB02は幕末期の建物と考えられる。

以上、調査結果をもとに天球丸の変遷についてその概略をみてきた。想定の城を出ない面があるが、調査結果とあわせて文献資料との細かい検討が必要である。また、今回の調査で、16世紀前半代に比定される遺物も出土しており、さらに天球丸における古段階の遺構が所在することも考えられ注意が必要である。併せて今後の課題としておきたい。

参考文献

- 鳥取県立博物館「久松山鳥取城—その歴史と遺構—」『鳥取県の自然と歴史-6-』 1984年
鳥取市「新修鳥取市史」 1983年
久保様二郎「鳥取県内出土の朝鮮製陶磁器」『鳥取県立博物館研究報告』第30号 1993年
鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡附太閤ケ平 保存修理概要報告書」 1987年
鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡附太閤ケ平 天球丸発掘調査概要報告書」 1992年

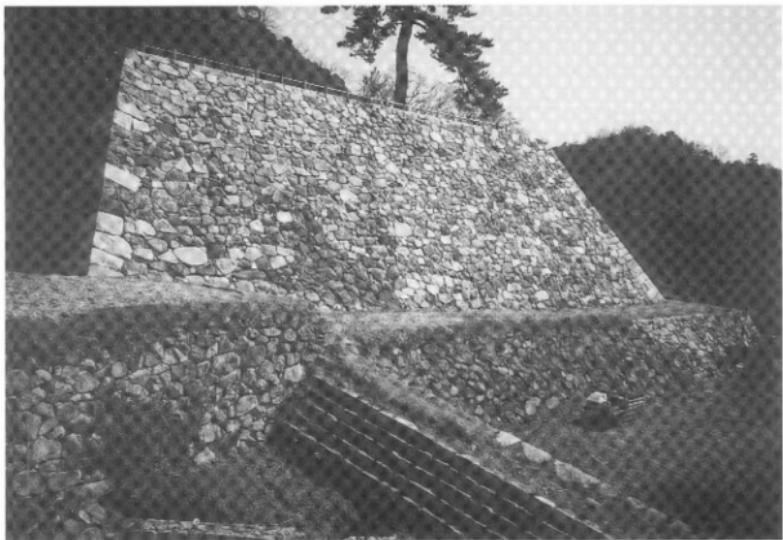


第44図 鳥取城破損修復図（天和三年）
〔鳥取県立博物館所蔵〕

図版



天球丸石垣Ⅰ修復後（南西から）

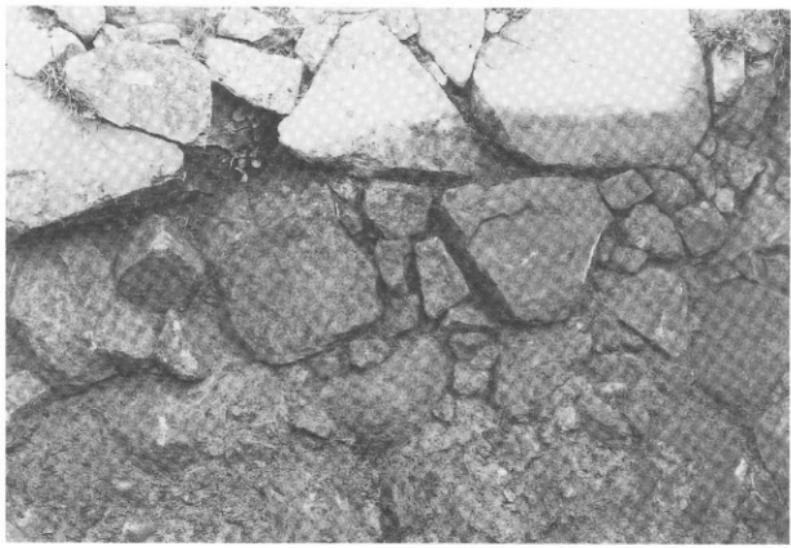


天球丸石垣Ⅲ修復後（西から）

図版 2



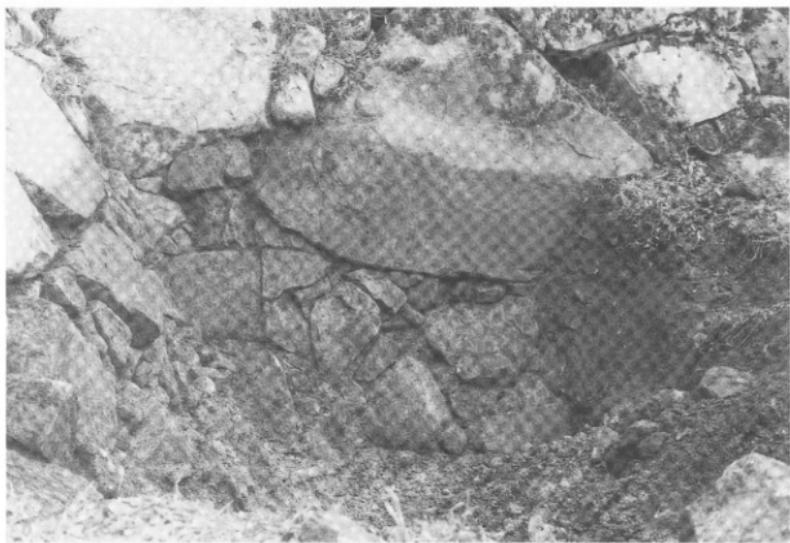
天球丸石垣 I (南西から)



天球丸石垣 I 棚石 (南東隅)



天球丸石垣Ⅲ（北西から）

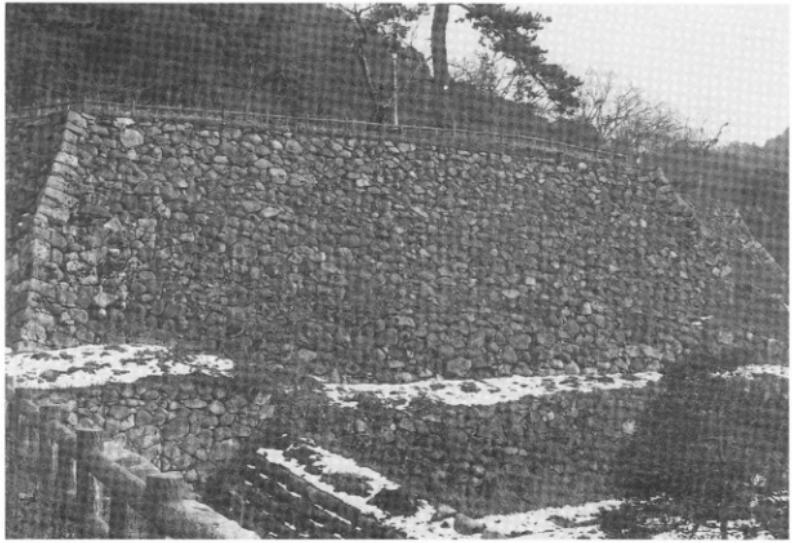


天球丸石垣Ⅱ 棚石（北東隅）

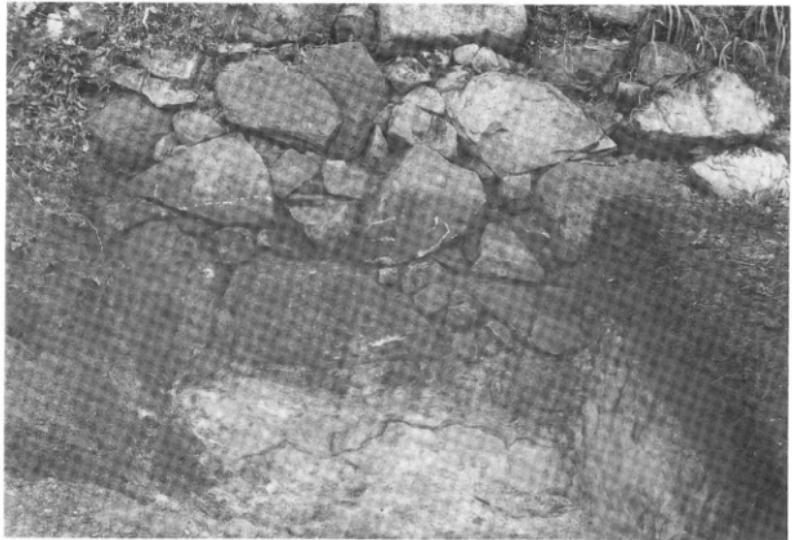
図版 4



天球丸石垣Ⅱ 根石（南西角）



天球丸石垣Ⅲ（西から）

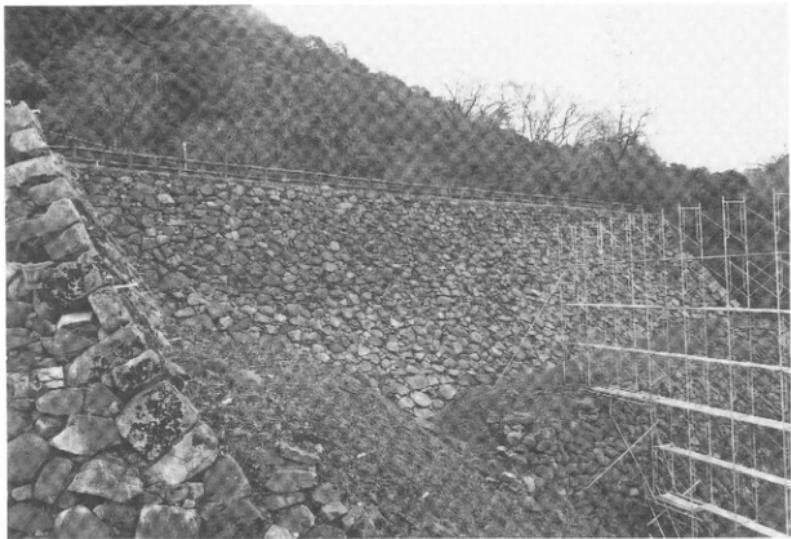


天球丸石垣Ⅲ根石（第2トレンチ部）



天球丸石垣Ⅲ根石（第3トレンチ部）

図版 6



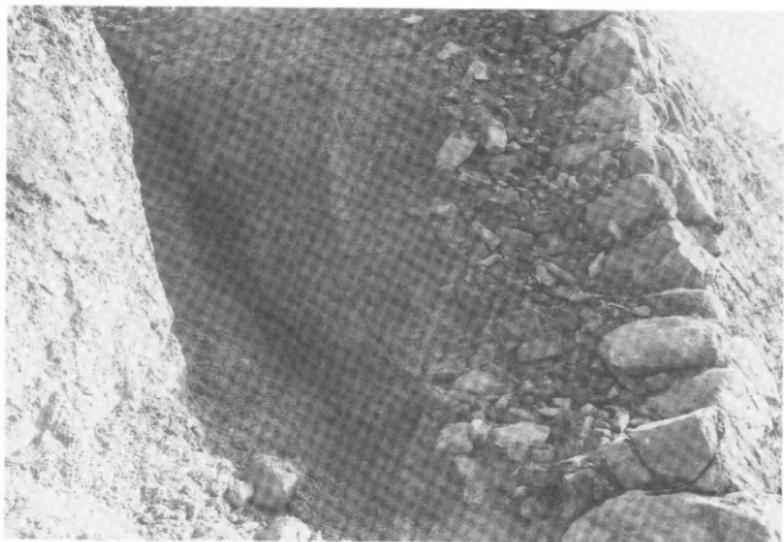
天球丸石垣V・VII（西から）



天球丸石垣V・VII（西から）

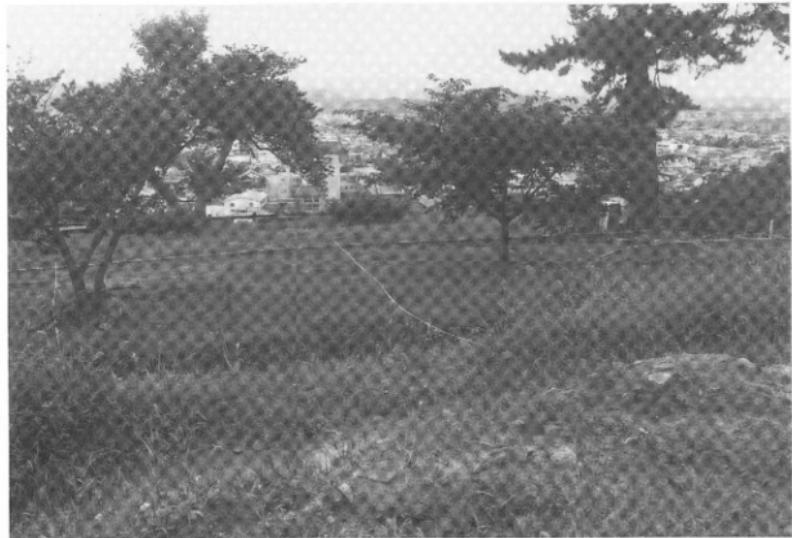


天球丸石垣Ⅲ裏込状況（北西から）



天球丸石垣Ⅲ裏込状況（北西から）

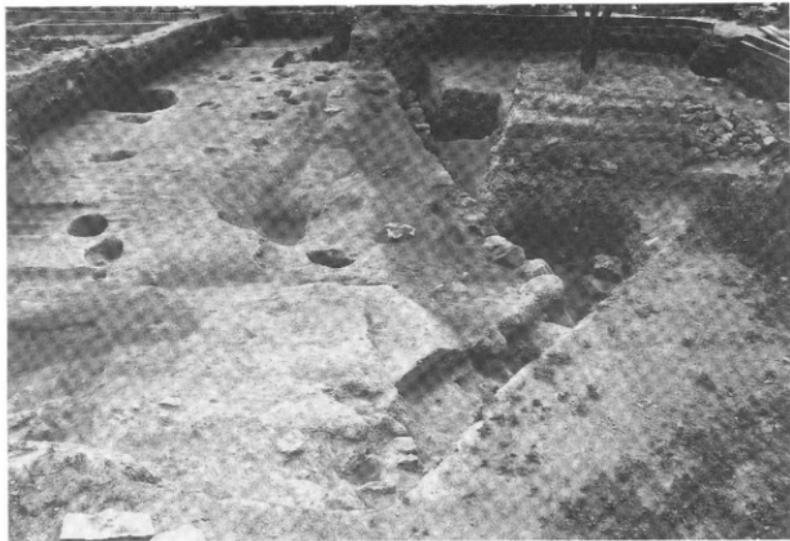
図版 8



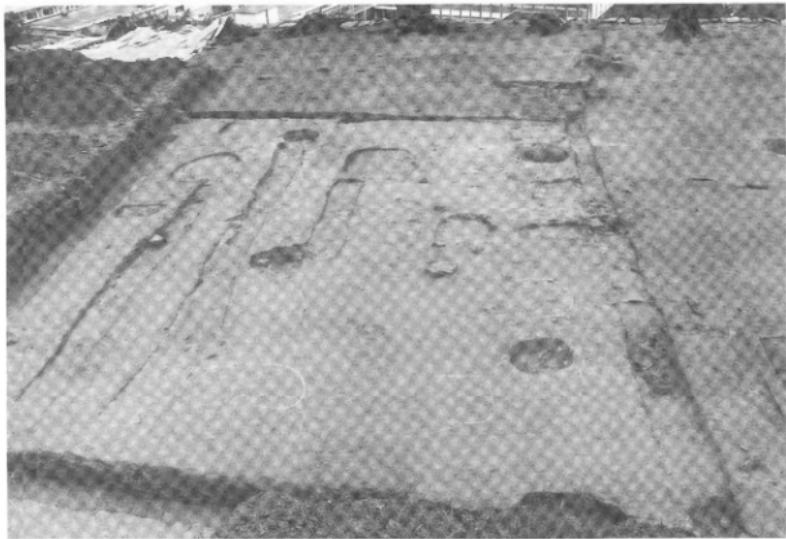
第二次調査区調査前（北東から）



第三次調査区調査前（北から）

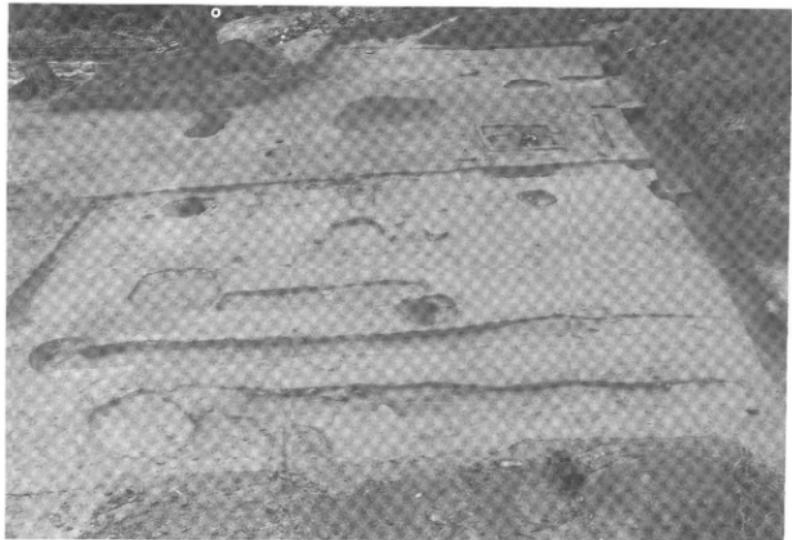


第一次調査区遺構検出状況（北東から）

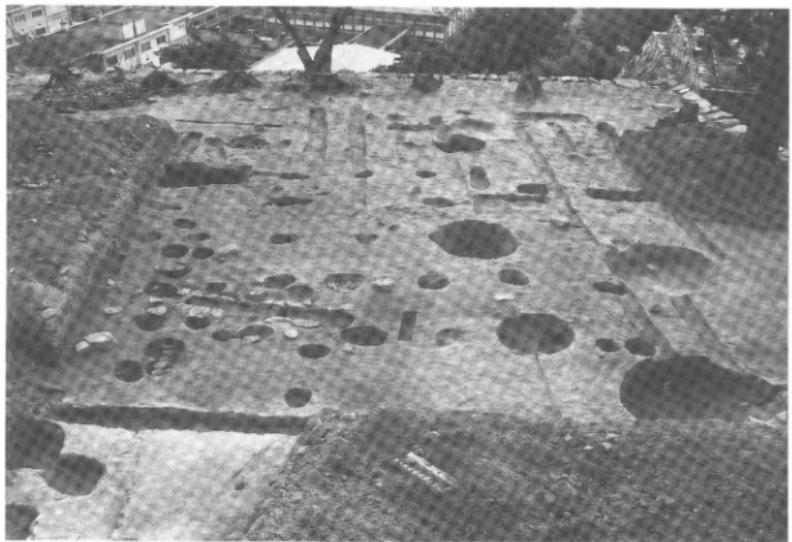


第二次調査区上層遺構検出状況（北東から）

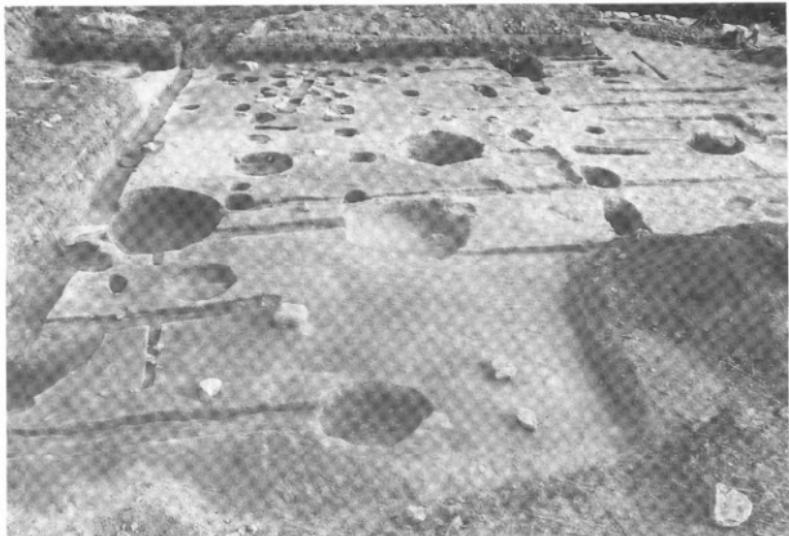
図版 10



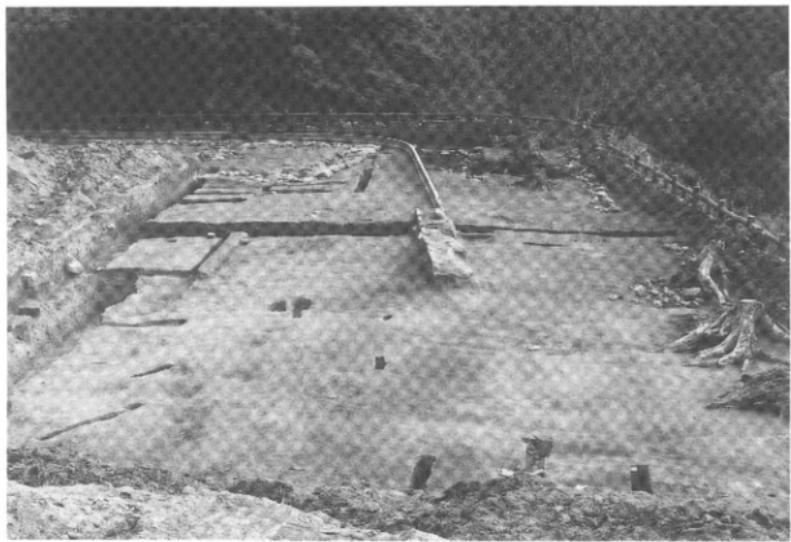
第二次調査区上層遺構検出状況（南東から）



第二次調査区下層遺構検出状況（北東から）

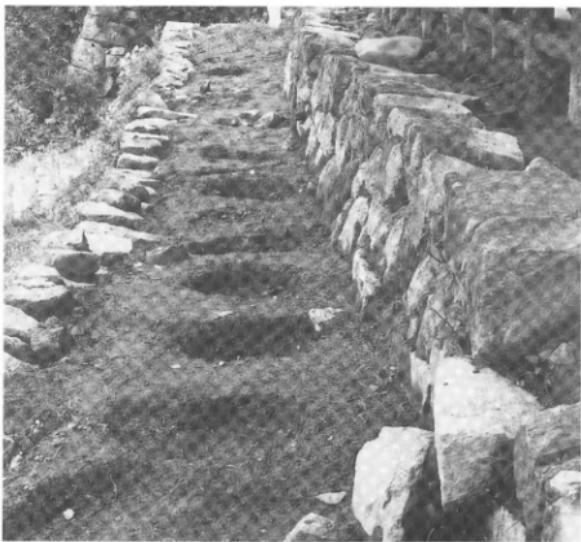


第二次調査区下層遺構検出状況（北西から）



第三次調査区遺構検出状況（北西から）

図版 12



S B 01検出状況（南東から）



S B 02検出状況（南西から）



SB 02検出状況（北西から）

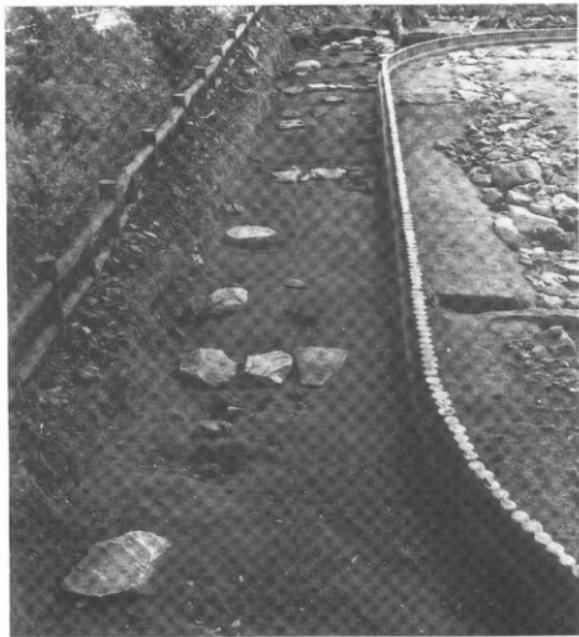


SB 02検出状況（北東から）

図版 14



S B 03検出状況（北西から）



S B 03検出状況（北東から）



S B03検出状況（南西から）



S B03埋土状況（南西から）

図版 16



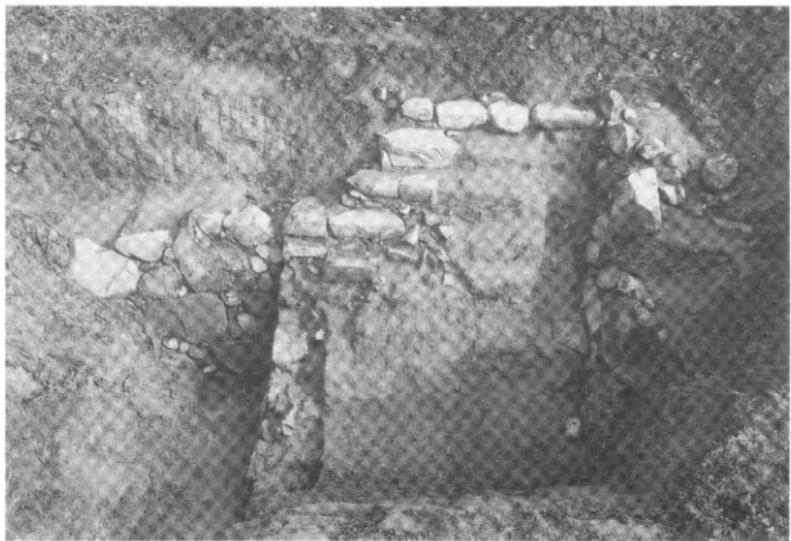
石垣01検出状況（北から）



石垣01取付部（北西から）



石垣01検出状況（北西から）

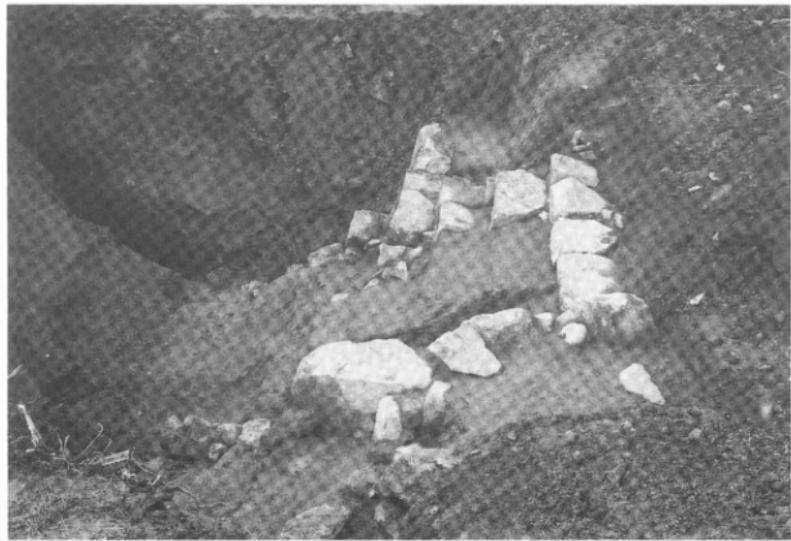


石段検出状況（南西から）

図版 18



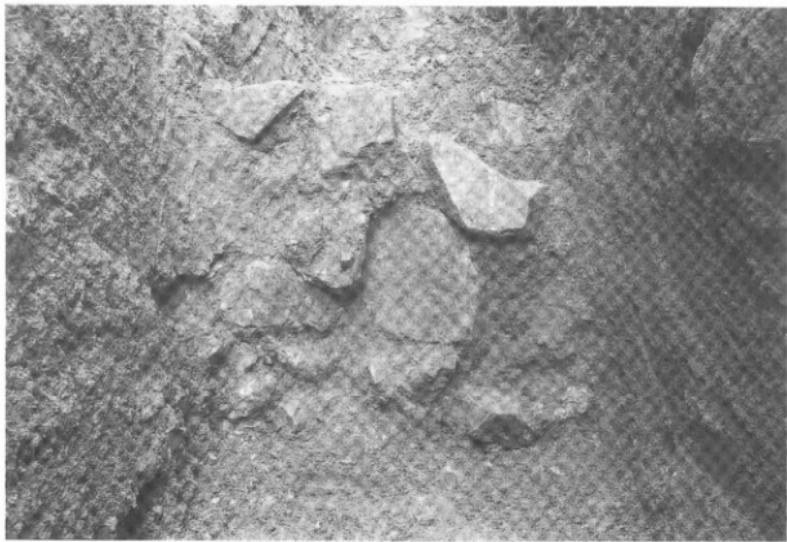
石段検出状況（北西から）



石段検出状況（南東から）



石段北壁石垣（南西から）

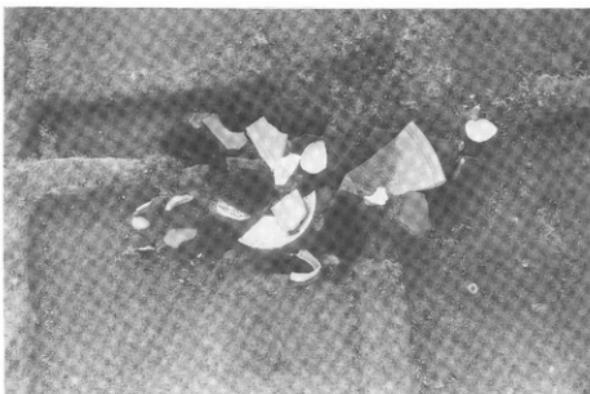


石垣02裏込検出状況（南西から）

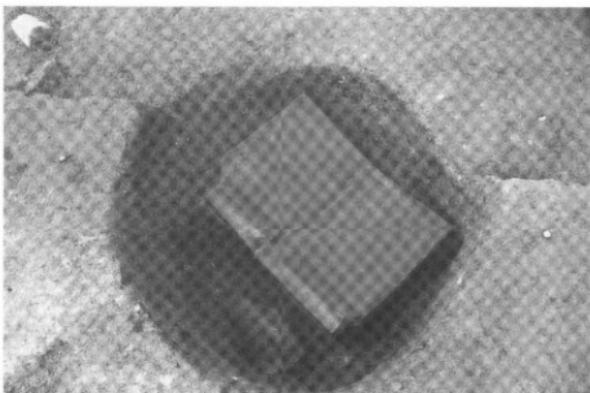
図版 20



S K 08検出状況
(南東から)



S K 16検出状況
(北東から)



S K 17検出状況
(南東から)

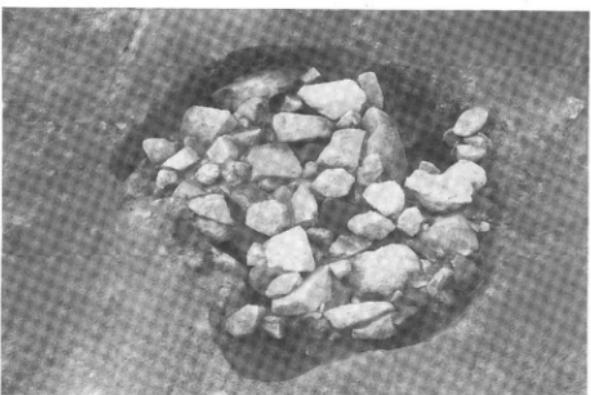
S K 39検出状況

(北東から)

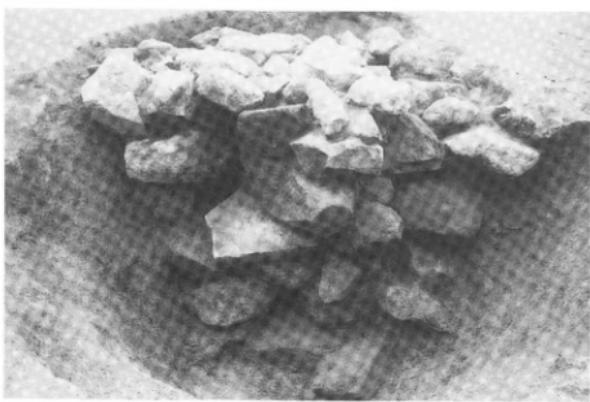


S K 42検出状況

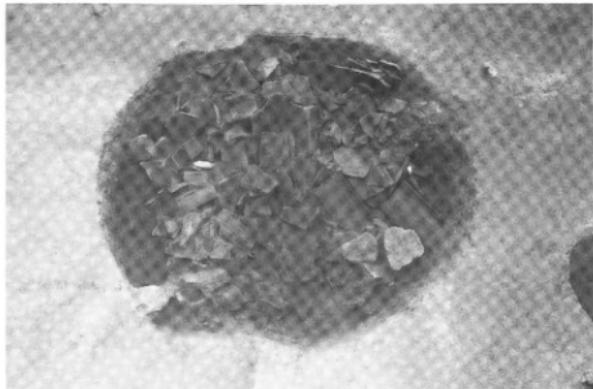
(北西から)



S K 42断面



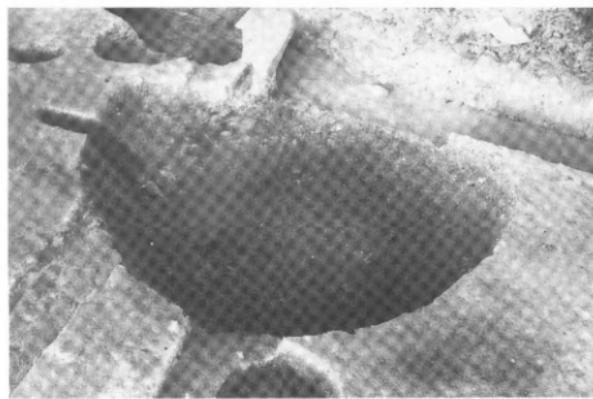
図版 22



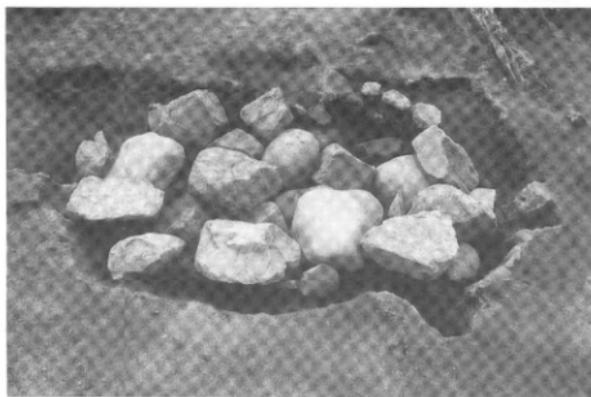
S K 43検出状況
(北西から)



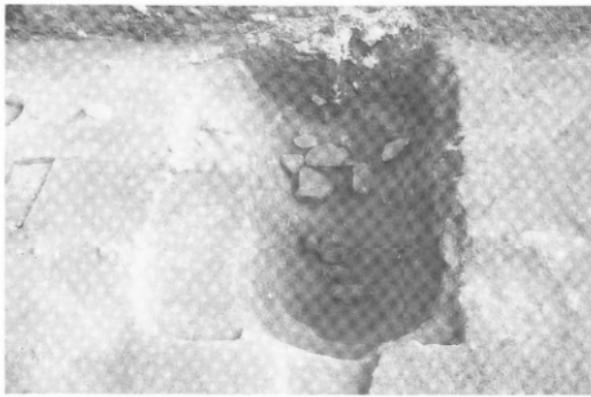
S K 43断面



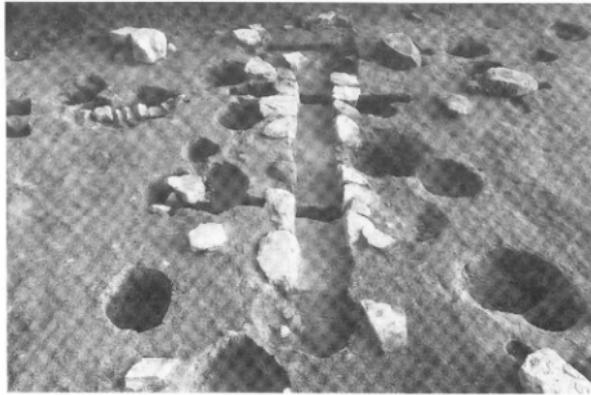
S K 44検出状況
(南西から)



SK 48検出状況
(北東から)

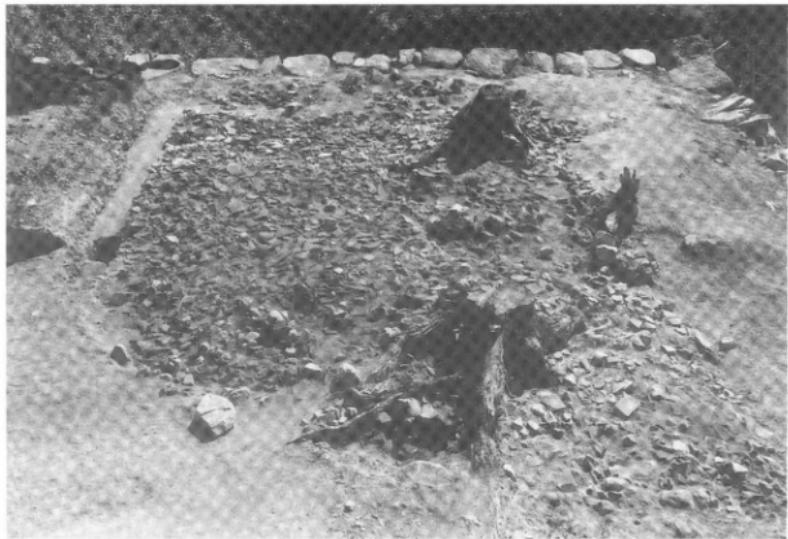


SK 50検出状況
(北西から)



SD 27検出状況
(北西から)

図版 24



瓦溜り検出状況（南西から）



瓦溜り検出状況（北東から）

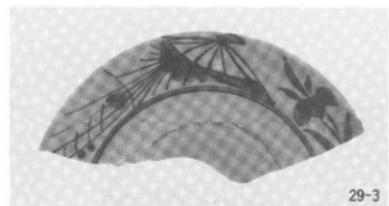


29-1



29-4

S K 04出土遺物

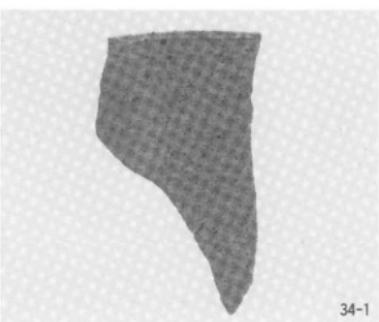


29-3

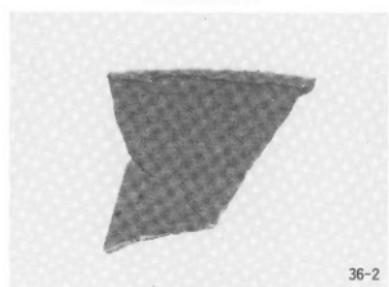


29-2

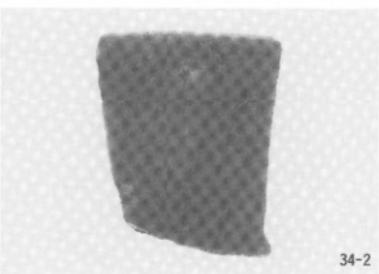
S K 16出土遺物



34-1



36-2

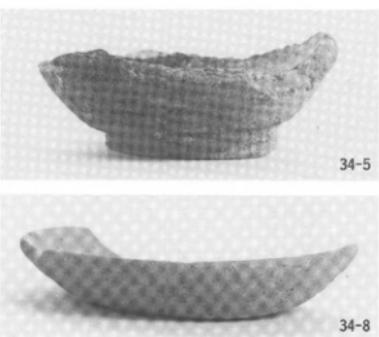


34-2



36-3

石段出土遺物



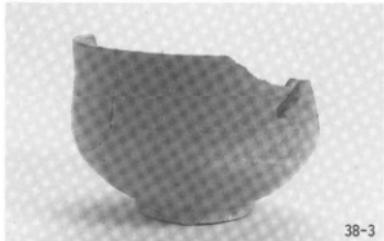
34-5



34-8

石垣01出土遺物

図版 26

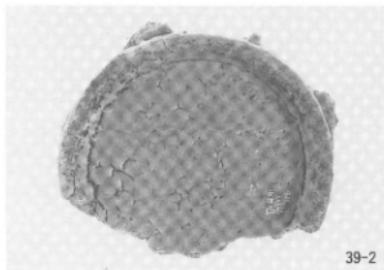
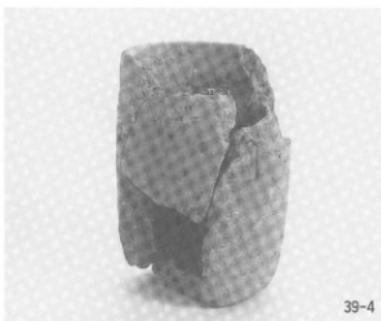
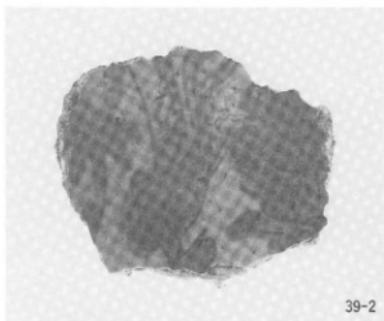


S K 10出土遺物

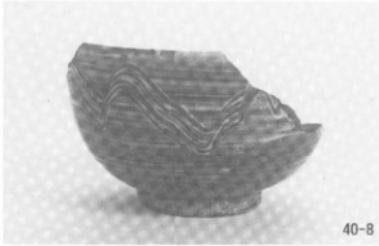
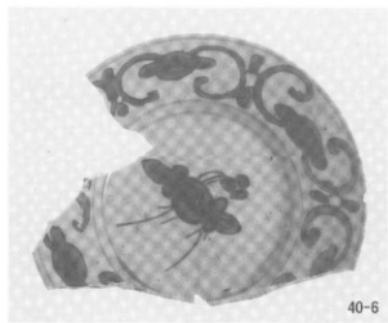
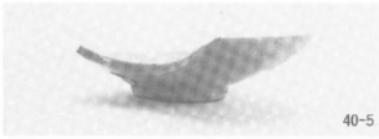
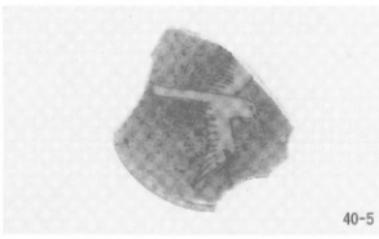
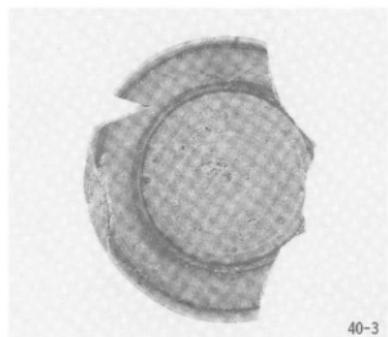
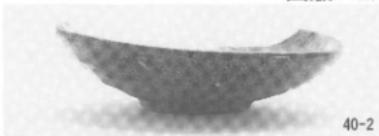
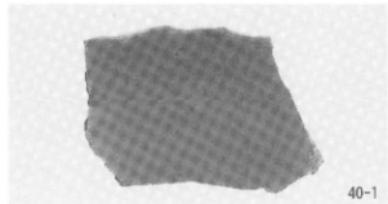


S K 07出土遺物

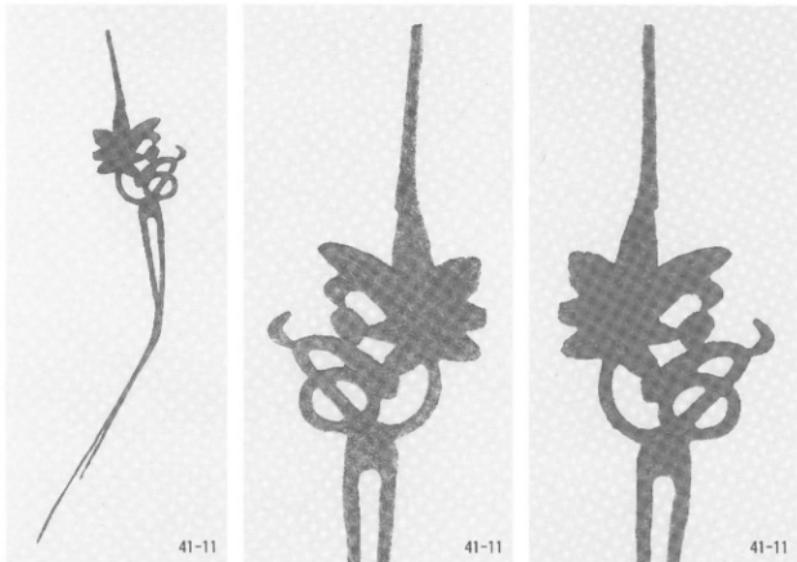
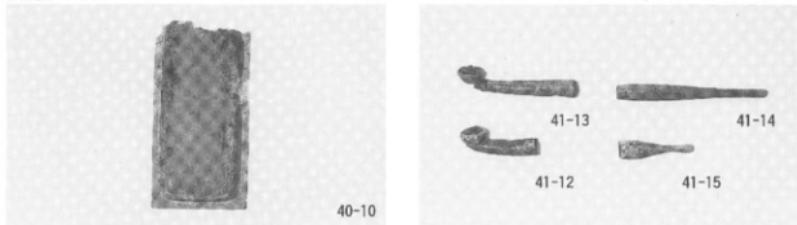
S K 06出土遺物



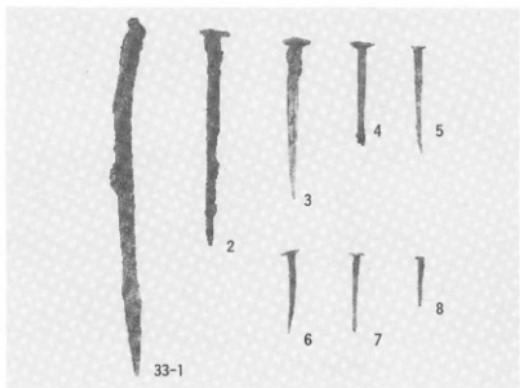
瓦混り出土遺物



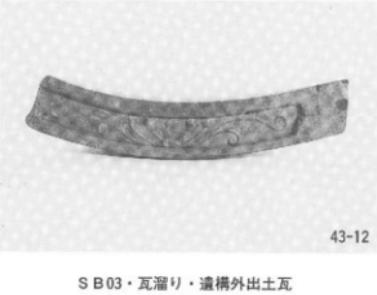
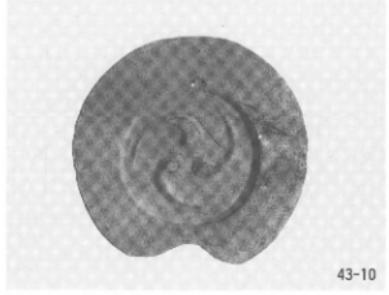
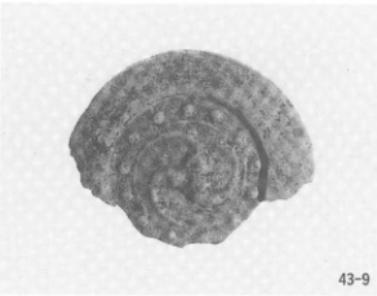
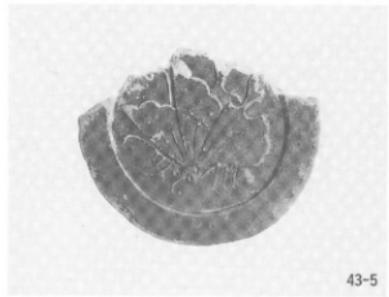
図版 28



造構外出土遺物



S B 03出土鉄釘



S B 03・瓦溜り・遺構外出土瓦

図版 30



43-13



43-14



43-17



43-18



43-20



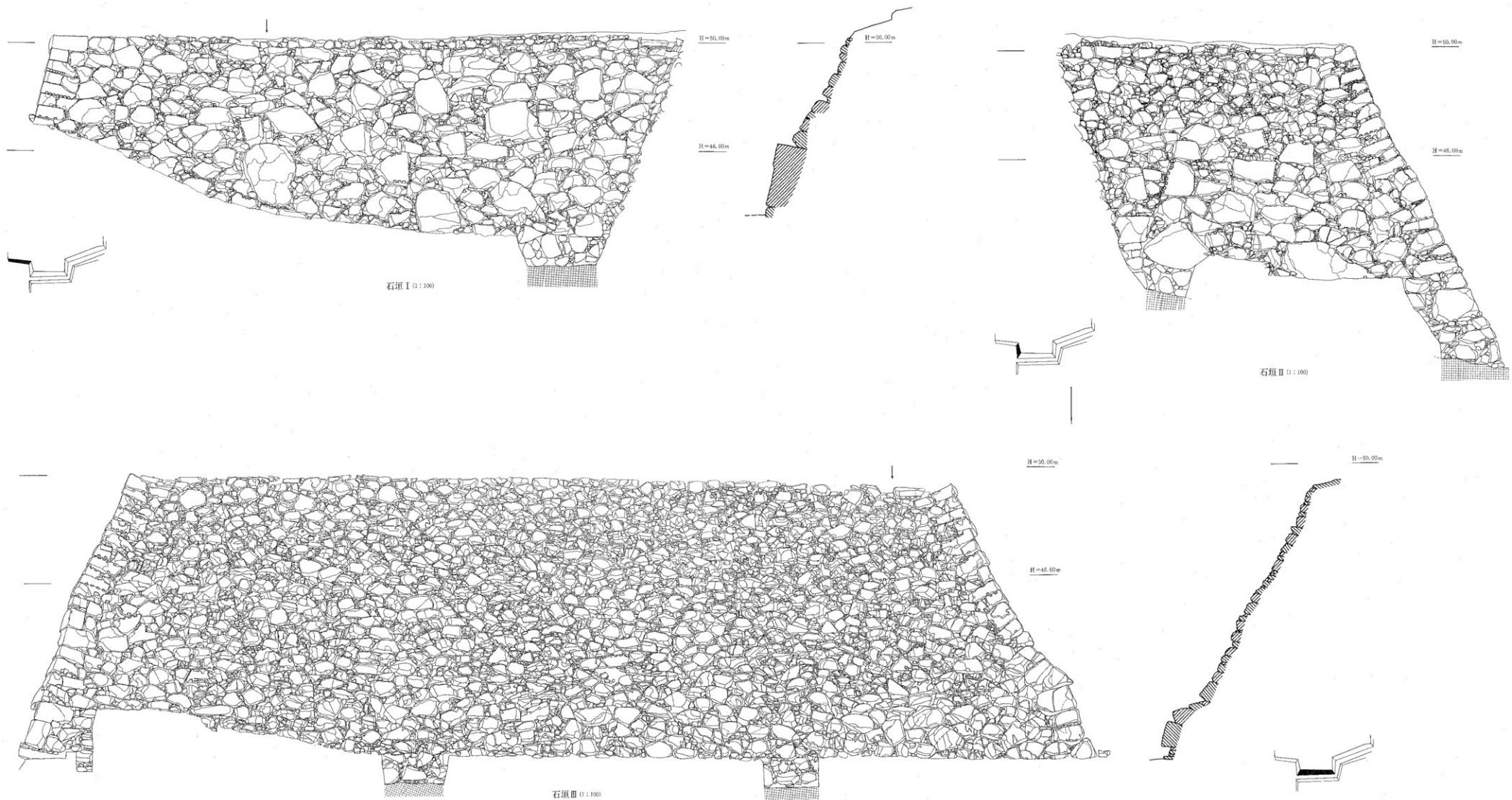
43-21

S B03・瓦溜引・遺構外出土瓦

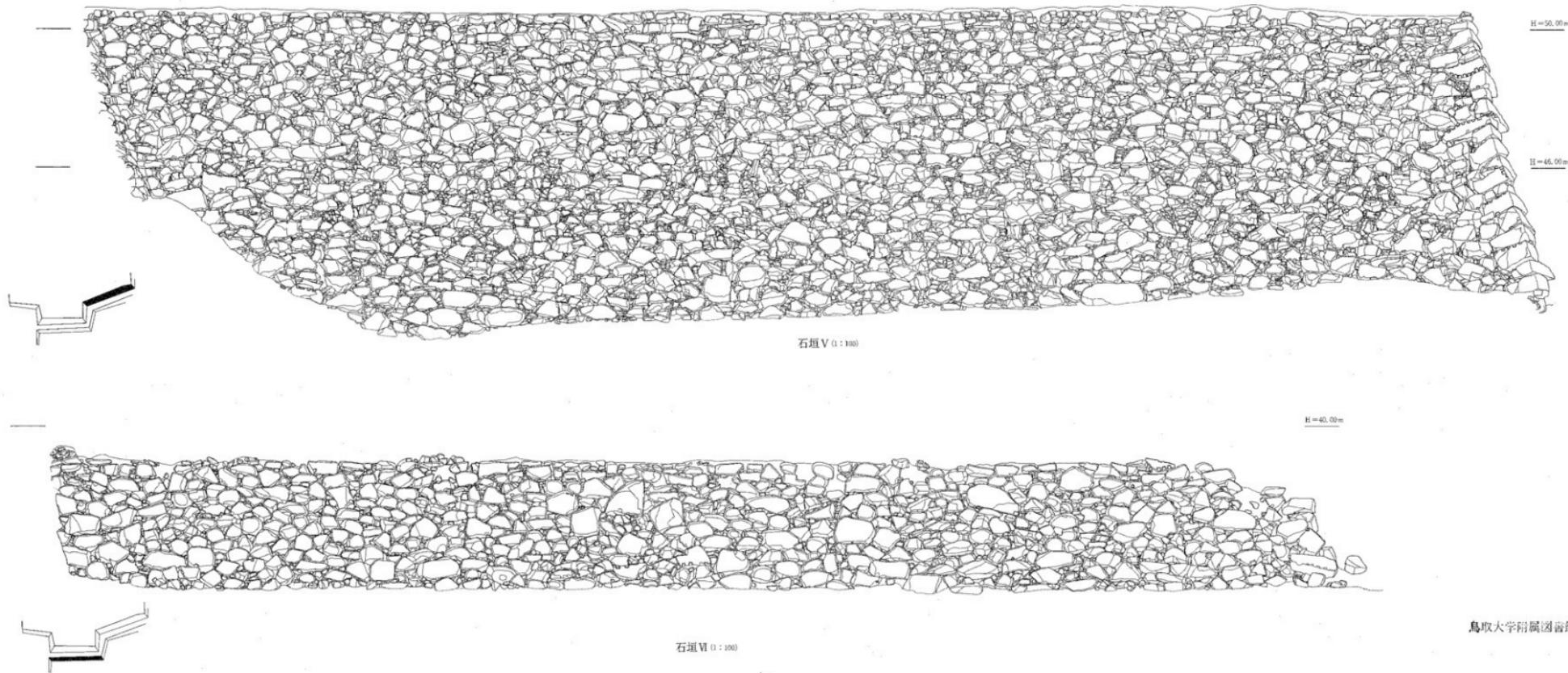
報 告 書 抄 錄

ふりがな	しそきとつとりじょうせきつけたりたいこうがなる てんきゅうまるほぞんせいびじょうはうこくしょ							
書名	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 天球丸保存整備事業報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	平川 誠 前田 均							
編集機関	鳥取市教育委員会							
所在地	〒680 鳥取県鳥取市上魚町39			TEL 0857-22-8111				
発行年月日	西暦1997年 3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°°'	°°"			
しそきとつとりじょうあた 史跡鳥取城跡 附太閤ヶ平	さとうじゆしひがしまち 鳥取市東町	31		35°	134°	19900501 ~19900731 19910801 ~19911220 三次 19951001 ~19951212	1,470m ²	史跡 鳥取城跡 天球丸石垣 復元修理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡鳥取城跡 附太閤ヶ平	城郭跡	江戸時代	櫓跡 掘立柱建物 石垣 石段 溝 土坑	瓦 陶磁器 簪 煙管 鉄釘 錢		古段階の石段、石垣、 焼失した櫓跡を検出		

付図1 天球丸石垣測量図（石垣I・II・III）



付図2 天珠丸石垣測量図(石垣V・VI)



付図3 天球丸石垣測量図（石垣IV・VII）



石垣IV・VII (1:100)

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平
天球丸保存整備事業報告書

平成9年3月 印刷・発行

編集・発行 烏取市教育委員会

印刷所 株式会社 矢谷印刷所
